



東京プロジェクトスタディユ

共在する身体と思考を巡って

東京で他者と出会ったために

# 東京プロジェクトスタディ1 共在する身体と思考を巡って 東京で他者と出会うために

002	<b>2020年1月に日本で最初の新型コロナウイルスが発見される前の話</b>
003	共在する身体と思考を巡って～東京で他者と出会うために～ 加藤甫／南雲麻衣／和田夏実 (スタディ1 参加者募集のメッセージ)
007	#00 スタディ1で、私たちが取り組みたいことは何か
011	#01 お互いの顔が見えないまま「出会う」「共に在る」
025	#02 私たちは本当に出会ったのだろうか
028	#03 撮る/撮られるから、他者の無意識に触れる
030	#04 それぞれのもやもやから出会う
032	#05 フィクションを織り交ぜながら、自分の分岐点について書く
034	#06 翻訳する身体と思考を巡って
040	#07 既存の「自己紹介」の手前にあるものは？
042	#08 わかりやすさ/伝わるはやさだけにとられない言葉を味わう
044	#09 南雲麻衣のパフォーマンスから「フィクションを織り交ぜる」を考える
045	#10 これまでの経験をあらわす
046	#11 誰にもなれない自分の身体に、一番近いコミュニケーションのあり方とは
066	<b>研究日誌概要</b>
154	おわりに (木村和博／嘉原妙)
156	奥付

# 2020年1月に 日本で最初の新型コロナウイルスが 発見される前の話

日々の暮らしの中で、自分の伝えたいことを、うまく伝えられなかったり、もやもやしたりすることがありませんか？

たとえばチャットやメールでのやりとりをするとき、文字情報だけでは相手のニュアンスがわからず、対面コミュニケーションとは違う緊張が起こっている気がします。それは言葉と身体が切り離されやすい環境だからかもしれません。私たちは普段、人と関わるなかで、言葉だけではなく、相手の声色や間の取り方、ちょっとした仕草などから、意識せずとも複数の情報を受け取っています。

そんなナイーブでデリケートな他者との関わり「あわい」について、深掘りしていくことはできないだろうか。そして、それを身体を起点にして考えたい。

そんな欲求を出発点にして、このスタディ1の輪郭を探していました。

しかし、ナビゲーターとスタディマネージャーが幾重も議論をしていた最中、新型コロナウイルスによってインフラが遮断され、未知の脅威がやってきました。

そして、見えないウイルスと対峙し、ソーシャルディスタンス、三密、リモートワークなど新しいことばやオンライン環境が日常生活に浸透しはじめると、これまで当たり前だった他者との触れ合いや距離感に対して、私たちは、どこか身体に薄い膜が貼られたような、敏感な状態になっていきました。それと同時に、オンラインを通じてのコミュニケーションが頻繁になればなるほど、物足りなさ——目線が合わない、気配がない、温度感を掴めないなど身体的に感知していた何か——を感じるようになり、自分自身と身体が切り離されていくような感覚をますます覚えました。思考と身体の間にあるものとはなんなのか、また他者とのコミュニケーションの間にあったはずのものはなんだったのか。

誤解を恐れずにいえば、一人ひとりの異なる身体と違って、フラットに同じ感覚を共有するためには、都合の良い条件下でした。

当時、オンラインビデオツールなど、直接対面せずに他者とコミュニケーションできる手段が瞬間に広がっていきました。そこには、他者と身体的に出会うことへの渴望があったように思います。

出会うことへの渴望と接触を断られたことでどこか持て余している身体を起点に、スタディ1は出発したのです。

最初からなにか確信や答えをもって進めていったわけではありません。

しかし、ことばやコミュニケーション以前の身体そのものを丁寧に紡いでいくための手がかりとして、スタディ1に集った参加者の一人ひとりの身体、他者に向かっていく態度、ひとりのナラティブなど、進むべき方向を示すコンパスはそれぞれの身体が既に持っていました。

何かを媒介にして出会うとき、はたして私たちは出会ったと言えるのだろうか。

これは、私たちが最初に立てた問いです。オンラインコミュニケーションツールを使って。通訳という媒介者を介して。文字や写真というメディアを通じて。ピクニックなどのイベントを通して。具体的な動作や所作などの身体をテーマにするつもりが、より抽象度の高いコミュニケーションにおける身体性がテーマとなっていきました。

「会う」ではなく「出会う」。そこには偶然性や共に立ち向かうこと、また密会の意味が伴います。立場や境遇が違う12人が、日常生活の中で、いつもなら気になっていても頭の隅っこに寄せてしまうような些細な出来事や、それに対する自分の想いをつぶさに拾ってきては共有し合い、誰かが出会ったものに他の参加者が出会う。それを見過ごしたりはせずに、しつこく立ち向かう。

私たちが行っていたことは、それぞれが日々感じているモヤモヤしたものに対して名前をつけていくような作業だったのかもしれない。

スタディ1メンバーだけでなく、本スタディに参加してくれたゲストたち、また飛び入り参加してくれたイマジネーション豊かな盲ろう者からもたくさんの出会いをもらいました。そして、本スタディを通して参加いただいた手話通訳のみなさんの在り方からも大きな影響を受けました。

紆余曲折しながらそれぞれが出会った様々な問いは、疑問形として残ったのか、没入感とともにほどよい疲れを得たのか、掴みかけてきたのにすると消えてしまったのか。様々な身体と思考によって誘発された数々の問いと共に在った思考の結晶が、このアーカイブブックに詰まっています。ぜひ、ゆっくりとページをめくりながら掘り取ってもらえたらと思います。

加藤甫／南雲麻衣／和田夏実

# 共在する身体と思考を巡って 東京で他者と出会うために

誰かと何かをはじめようとするとき、考えや視点の違いを理解しながら、互いのイメージを擦り合わせ、どうやって共につくっていくかと議論を重ねる。

文化的にも社会的にも、そして身体的にも異なる経験を持つ者同士が、お互いの差異と経験を想像しながらコミュニケーションをはかること。

日々、アートプロジェクトの現場で起こっている光景です。そして、そのコミュニケーションの密度や共に経験した時間が、プロジェクトをより豊かなものにすると言っても過言ではありません。コミュニケーションとは、“ことば”に限ったものではなく、むしろ、表情やしぐさ、声色、動き、間など身体を用いた非言語の領域が、日々のコミュニケーションに大きな影響を与え、補い、支えているのではないのでしょうか。

いま、思い立って誰かに会いに行く。互いに目を見合い、相手の息づかいを感じ、何気ないしぐさを眺めながら話をする。そんな当たり前のことが気軽にできなくなって久しい状況のなかで、改めて「コミュニケーション」や「身体性」について考えていく必要があるのではないかと。

本スタディは、写真家、ダンサー、インタープリター（通訳者・解釈者）とともに、身体性の異なる人々の世界に触れながら、“ことば”による表現だけではないコミュニケーションの在り方を探り、その可能性について考えていきます。

（スタディ1 参加者募集のメッセージより）

ナビゲーター：加藤甫（写真家）  
南雲麻衣（パフォーマンス、アーティスト）  
和田夏実（インタープリター）

記録・運営：木村和博（劇作家・編集者・ライター）  
スタディマネージャー：嘉原妙（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

写真を撮っている時、僕には写したい「所作のポイント」みたいなものがあります。それはわかりやすい決定的瞬間的なものではなく、意識と無意識の間くらい、撮る側撮られる側どちらかの主張が強すぎない、ちょうどいい塩梅の自我の入り方。そういうものを撮ることが僕は「写真」らしいと考えています。撮影者として、所作やたたずまい、人がただ居ることなどから感じる「なにか」。普段ファインダー越しに考えていることの正体っていったいなんなんだろう？ ということテーマに扱っていきたいと思っています。それは、「共存する身体」であったり、「他者」であったり、「コミュニケーション」を考えることに通じるはずです。

いま僕は、6歳になるダウン症の息子と暮らしています。彼は発育が遅く、まだ言葉を話すことはできません。話せないけれどももちろん意思はあって、その意思の発し方は独特です。ジェスチャーや音、文脈などを使って伝えようとします。彼の発露を「どう受け」「どう返す」のか、僕自身も想像力を駆使しながら試行錯誤する毎日です。

彼らは「療育」と呼ばれる、発育の遅れを補うための訓練を受けています。社会で生きていくために、他人とコミュニケーションが取れるように。そこに立ち会い、息子の成長を嬉しく見ている反面、なぜ彼らはそのままでは生きていけないのだろうと思うことがあります。

「成長」ってなんだ？ 社会に適應していくことばかりが「成長」なのだろうか？ コミュニケーションにおいて、発する側だけでなく受ける側のありようも、同じように大切な気がします。

だから、このスタディでは身体と視覚を主な手がかりに、コミュニケーションの受け方についても考えていきたいと思っています。

## 加藤 甫

このコロナの影響で、私たちの身の回りのコミュニケーションが少し変化していきました。第一にマスクをして会話することの困難さ。私の場合ですが、口元が見えなくても人工内耳を使用すれば大体聞き取れます。けれど、言葉を理解する前に、この人はどんな気持ちでこのことを言ったのかをその人の声色からは判断することができないことに気づきました。マスクの奥にある表情が隠れてみえないことにもどかしい気持ちでいます。

ちょっと難しい話をし始めるときに変な顔をする人や、言葉に迷っているときに口をバクバクさせる人など、言葉だけではないところ、その人の顔の表情からも、人間は無意識に情報を読み取っているのではないのでしょうか。

これまで苦なくコミュニケーションできていた人も、マスクやフェイスガードによって声が届かないことを実感することが増えたのではないのでしょうか。サービス業では、接客中に身振りなどで伝えようとするパワーが以前より増してきたと思います。私は、マスクからのぞく笑顔に、目尻の皺に注目する癖が身につけてしまいました(笑)。

第二に、テクノロジーの進歩により、手話という視覚言語にテクノロジーが追いついてきた感覚があります。巷で流行っているオンライン飲み会や遠隔講演会などは、コロナ禍以降から盛り上がりを見せています。また、手話がわからない人もわかるように字幕を付けるなど、当事者側から発信するアクセシビリティも見られるようになりました。リモートの手話講座はいつも満員だそうです。これまでなかったことでした。

手話とテクノロジーの相性の良さや便益性を発見できたのと同時に、手話という言葉は身体をも伴う言語であることを、私のなかで改めて実感しています。オンライン上では、相手の身体がそこにないせいなのか、立体ではない二面の画面であるせいなのか、相手をマークして投げる会話のキャッチボールが、いつもよりうまくキャッチできず戸惑う感覚があります。それはまるで、全力疾走しながら、会話を受け止めている感覚になり、あとから疲労感と物足りなさを感じます。

コミュニケーションの以前に、一人一人の身体や表情がそこに「在る」というリアリティが、ある一定の期間に急速に薄れました。今はその状況を互いにシェアリングできたことで、これまで見えてこなかったものをなんとなく掴みかけているところです。それが一体なんなのか、一人でもやもやしているのではなく、スタディという名前を借りて参加者とともに探してみたい。みんなが同じ状況に立たされた「共在感覚」と一人ひとりの異なる身体を、しぼりだしながらも言葉にして記録し、後世に残すことに大変意味があるのではないかと思います。

インタープリターである和田夏実さんとは、何年も前から手話の先にある視覚身体言語の面白さや、感覚が異なる者の環世界など話し合っ、ワークショッププログラムなどを作ってきました。私の手話を翻訳し、音声言語に伝える彼女のパーソナリティを信頼しています。バックグラウンドが違う私たちが二人三脚でやってきたこともこのスタディで発揮できたらと思います。

## 南雲 麻衣

「他者と出会うこと。」まだ先行きの見えない、大きな変化の中で、私たちは互いにどんな風に出会い、どうしたらその人らしさを知ることができるのか、そんなとんでも身近で、とつても壮大な実験に、ようこそ。

私は、コーダと呼ばれる両親がろうの聴こえることとして生まれ、手話を第一言語にして育ちました。手話という手で空間に描くように構成される言語と、音や文字で線状に紡がれる日本語という音声言語。それぞれの間で、インタープレート(通訳)していく中で、こどもながら、全然伝わっていないのではないかと!という場面に数多く遭遇しました。それは言語自体の翻訳の難しさもちろんですが、温度や空気、気配といったその人らしさを構成するものを、誰かが介在して伝えることの難しさでもありました。

マスクや画面、透明のビニルシート。私たちを守り、隔てるもので、受け取りにくくなってしまったものが想像以上にたくさんあることに、日々驚いています。けれども同時に、それは今まで知らぬ間に受け取っていた、その人らしさがたくさんあったことに、気づいた機会でもありました。

南雲さんと直接会って手話で会話したり、実験していた時に、ぼこっと生まれていた会話の空間(たぶんまんまるの空気の球みたいな形をしていたと思う)が、画面を介すると時間のズレや目線に気づけず、一緒にいる感覚がしないこと(四角くてガチッとした箱に入って、パラレルワールドの先の彼女に話しかけている感じがする)。会議で話し始めるタイミングをどうにもつかめず、「あっ、どうぞ。」という機会が増えたこと。そういえば、小さな頃、どうにも電話を信じるができなかった5歳の私は、何に恐れている、何があったら信じることができただろう、と考えたりします。

ここは毎日の中のコミュニケーションの中に生まれるほんの少しの違和感について、みんなで話し合い考えることを目指した、プロジェクトスタディです。南雲さんの手話もダンスをも現すから、写真を撮ることと視覚的な会話について考えている加藤さん。3人と、スタディチーム、そしてこれから出会う、皆さんと。

ざらざらとした不思議に出会い、これは「リズム」の話かしら。「意識」の方向の話かしら。と考えたり、ともになんだろう、と悩み、ともに絵を描いたり、写真を撮ってみたらどうだろう!とついたりする、そんな実験にご一緒できたら嬉しいです。

和田夏実

# #00 スタディ1で、 私たちが 取り組みたいこと は何か

スタディ1の実験・実践の場を通して、どこに向かおうとするのか。

「コミュニケーション」と「身体性」について、ナビゲーター3名はそれぞれに、いま考えていることやふと思い出したことをGoogleドキュメントに書き出し、お互いにコメントを書き加えながら議論を進めた。

言葉、文章、誰かの思考の跡に、別の誰かの視点や思考が重なり、またそこから新たな方向性が開かれていくようなドキュメント上での対話。オンラインでも相手の思考のリズム、温度を感じる、スタディ1の取り組みの起点となるコミュニケーションのはじまりの記録。

※書き手により表記ゆれや空白などが見られるが、原文の表現を活かすためそのまま掲載している。

## 加藤 甫

最近の加藤の体験から思ったこと。  
先日、品川区の障害者支援施設で毎月恒例のプログラムを行ってきました。

スタディを行いたいと思った一番の動機は、実はこの施設で行なっているプログラムがきっかけで、知的障害がある彼らと言語以外のツールでどうコミュニケーションをとっていくか、ということに1年間取り組んできたことでした。

単純に「美しい写真」を撮ることをよほどできないタチの僕としては、写真のWSといえは頭を使うタイプのものばかり考えてしまうのですが、彼らにはその方法は通用しない。

いつもコミュニケーションは手探りで、3歩進んで2歩下がる、なんてことはできず、上げた足をその場に下ろす、けど数センチは進んだかな?というようなあゆみで進めてきました。

最近このスタディで目指すべきことを言語化するためにいろいろ言葉と戯れていた際、「受け方」という言葉が出てきました。

この「受け方」という言葉を自分にインストールして臨んだ4月の活動では、自分が気になっていたことはこの「受け方」だ、という核心のようなものが掘めた気がします。

具体的に説明するのが難しいのですが、例えば支援スタッフは僕がやろうとしていること(前回は僕が撮ってきた近所の桜の木の写真を投影して花見ごっこ)をどうにかメンバーさんに促そうとしてくれるのですが、僕としてはそれはどうでもいいんです。僕が投げた球にどう反応してくれるか、が重要で、その反応次第でぼんぼんやることを変える。そうするとそれぞれが違う方向に進んでいくんですが、そうじゃないと僕が気持ちが悪いです。先日は初めて、撮ったらすぐに感熱紙に写真が印刷されて出てくるおもちゃカメラも使ったんですが、メンバーさんみんなにも撮ってもらいました。

床を取り続ける子、ずっとカメラを突いている子、撮ることに普通にハマる子、そしてホワイトボードに文字を書き続ける子がいました。

床を取り続ける子は、ボタンを押す快樂にはまっているのか、この場の空気に馴染めていないのかかわからないので、支援スタッフがメンバーさんを撮るように促しているのを止めて、ひたすらにシャッターボタンを押してもらいました。ずっとカメラを突いている子に目をやると、まさにいま写真がジーっとカメラから出てきている。みるとちゃんと活動の風景が写っていました。そのままシャッターボタンを押したんじゃなくて、ちゃんとカメラをむけて、意思を持って撮ったということがわかる。そしてホワイトボードに字を描き続けている子は、みんなが高揚したテンションは受け取っていて、ずっと駅のアナウンスを口ずさみながら、駅名を書いていた。なぜそう思うか、という、

彼がずっと活動の場にいることはめずらしく、いつもブイッとなくなってしまうことが多いそうです。みんなと同じことをする、ということには興味がない。けど共鳴はしている。そういうことが今までの関わりの中で見えてきたからです。

そして僕も共鳴してしまって、そのおもちゃカメラを使って、たくさんメンバーさんを撮りました。「ワークショップ」というにはあまりにカオスな場で、支援する側はやりにくいだろうなと思いつつ。

活動終了後、スタッフで振り返りをするんですが、彼らのリアクションについて、みんなで想像しながら言い合う。そこで僕の知らないメンバーさんのことやひとりでは気づききれなかったことを共有しています。この共有に重要なのは文脈で、なぜ彼／彼女がこういうリアクションをしたのか、いままでの観察を元に推察していきます。

コトバでのコミュニケーション(文字・口語・手話etc)は、共有のコミュニケーションですよね。

けれど共鳴のコミュニケーションってあるような気がします。それは彼らを見ているもそうだし、自分のこどもたちの遊びを見ているもそうだし、撮影のコミュニケーションの中にもあります。(いいライブは撮る側も共鳴していい写真が上ってくる、とか)

また知的な障害のあるメンバーさんとの共有のコミュニケーションももちろんあります。言語ベースではなく、それは文脈と推察をベースにしたキャッチボールで、正しいかどうかはわからない。

けれど、正しいかどうかかわからなくていい。よく支援スタッフの方にメンバーさんのリサーチをすると、「正しいかわからない」と返されるんですが、正しいかどうかなんてどうでもいいのに!いつも思います。キャッチボールをする、球遊びの参考にしたいだけだから。

仮説をベースにしたコミュニケーションをとるには受け方が重要で、っていう話に繋がるんですが、「受け方」という言葉が出てきた今、次のなにかに興味が移りつつあるような気もしています。

これって、まさに芸術文化で培われてきたコミュニケーションだと思いました。例えば、演劇も、コップに入っている水を「お酒」と仮定して、演者はお酒を飲んでいるように振る舞う。観客は、それは水だと認識しているけれど、「お酒」だという仮定を共有しているから演劇という表現が成り立つ。

## 和田 夏実

思想への望郷:直接のコミュニケーションと専門家  
寺山修司が思想への望郷の中で述べる、直接のコミュニケーション、直接の詩と代用品(stand for)[俳優や歌手(自分で詩を書かない)]が、詩人自身を上回ることははたして可能なのか。という問い

死ぬまで騙してほしかったという、作詞家の極めて個人的な恨みごとが、音にのせられプレスされてレコード楽器屋に保存される。活版印刷の発明がことばの文化に革命をもたらした、しかしそれは私達の情念伝達のために重要な役割ももっていたことばを、より遠く、より多くの人に届けることによって、政治的効用性を優先させただけだった。

詩は在るのではなく、成るのである。  
すなわちそれは、ある状況の中で互いの関係性と振る舞いとすべての状況をもってうまれるある種、催眠的な支配力をもつ言語の中でその感化的内容と私たちの生きることとの関わりあいによって決定されている。

触媒者として他者に身体を貸し出す時、その互いのことばの伝わらなさに途方もない宇宙のねじれを感じることもある。

たとえば在るひとが、苦しみについて話したときその苦しみをこの身体で感じたことのない私達がいかに、その人自身が感じた苦しみとの距離を縮めることができるだろうか。  
受け取り手は、できる限りの苦しみについて想いを馳せるか、自分自身の中に似た苦しみを発見し共感と位置づけ、自分の中に発見した苦しみに置き換えて理解しようとする。

だが当然、発した人と受け取り手の苦しみは違う。苦しみのみならず、あまりに多くの言葉たちはひとりひとりがその意味世界を構築しており、それは言葉一つとっても全く同じ円として重なることはない。

同じ時代を生きたもの同士でいると心地いいのは、観た映画やドラマ、年齢とその年による出来事が重なっていることで、ことばの感覚世界の近似値が高いと感じるからだと思う。

口ぐせをうつしあったらばらの花、恋人たちや家族、仲の良い友人が状況から成ることばたちを重ね合わせ、同じ経験を積み重ねることでことばに対する円の重なりを少しずつ大きくしていくこともあるだろう。

(脱線する)

超個人的な感覚として、恋愛相談というものの自分がどうにも苦手で(友人たちとあーだこーだ話すことの意味不明なほどの盛り上がりやどきどき感とはしかに中毒になりそうなくらいに楽しいんだけど)、きっとそれは2人の間にしかうまれえない状況とそこに居た人にしかわからない空気のもとで交わされた狂気(恋愛はこの世界に許された狂気、という友人の意見を私は支持している)を”一般的には”や”普通”という尺度で測ろうとすること自体がとてつもなくナンセンスで無意味な気がしてしまうからかもしれない。ふたりで決めてくれよ、それは、って思うからかもしれないし、それに我が物顔で恋愛ってさ、とはいることも、不安だとは思いつつも、普通はどうなんだろう、って通念を求めめることも、いやそもそも共有できないものが多すぎる中で、判断なんて不可能じゃない?って思ってしまう、感覚で恋に落ちたなら、感覚を信じて突っ走って!って。2人で完結する関係の中に何をねじ込めるのだろう、って思ってしまう。

相手の頭の中の像を想像し、相手の脳内に投げ込む形で会話を試みるとしたら、どんな方法になるだろうか。時には深い理解に繋がるかもしれないが、同時に相手にとってのそれが皆目見当違いの場合もある。

感覚、そのひとつひとつのイメージや記憶、そしてそれを伝える方法、それぞれを少しずつ解体、考えながら伝え方を探していく。

あなたが何を言っているのかわからないでも

あなたが何を言いたいのかはわかる  
私はあなたの愛に依存しない  
あなたとの愛を発明するのだ  
これは、世の中のコードに合わせるためのディシプリン  
私の目に映るシグナルの暴力

今まであなたが発する音声によって課せられた私のノイズ  
今、やっと解放します

竹田恵子「ダムタイプによるパフォーマンス『S/N』(初演一九九四年)における引用の形態と作品構造」(『演劇学論集 日本演劇学会紀要』2014年 58巻 p. 73-89

ダムタイプ、古橋悌二-----

## 南雲 麻衣

「見て理解するとはなんであるのか。それが決して名付ける事ではない事だけは僕にでもわかる。

我々はとにかく安心したいのだ。未知の世界に対して我々は名前を与え、それを支配した安心感という錯覚を手に入れて概知の事として済ませてしまいがちである。しかし、言葉により何かを表そうとした時点で、同時に、表さなかった何かを覆い隠してしまっていることを忘れてはならない。これは李朝の16世紀の茶碗ですという言葉は、その茶碗に対するある一つの事実を指し示す事は出来ても、その茶碗の姿や意味をとらえた事には決してならない。体験の後に言葉は生まれても、言葉の後に体験が生まれる事はない。」

自粛ムードの中、俗に言うおうち時間を活用しようとiPhoneの中にある写真を整理していたら、去年の春頃にこの文章だけを撮った写真を見つけた。

ただ、肝心なところ誰の言葉なのかわからず、調べてみたら、民藝運動の父・柳宗悦さんの言葉だった。(脱線しますが、民藝は日本にしか作れない美しさだと思う)

あれ待てよ、溜まっていた本を整理していたときに「柳宗悦―「複合の美」の思想」があったなと思い出し、途中で投げってしまったその本を読んでいたら、前回本を開いたときよりもすらすらと頭に入り、本の一節には、互いに違うものを「全肯定する」(ホイットマンに影響された)や「相互扶助」(ちょっと今の時代に馴染めなさそうですが)の言葉が繰り返してでく

るのではないか。「全肯定する」というのは、どういうことか。幼少の頃を振り返ると私は他者を「全肯定する」ことで模倣していたと気づいた。聴こえる者と聴こえない者の二者が「相互扶助」するには「全肯定する」ことから始めなければならない。これは決して易しいものではなく、より時間をかけて考えあぐねる作業を続けていくしかない。ただ、それは私自身が一方的にしかも黙々と続けていたのだと気づいた。これらの作業を他者とシェアしつつ、考えあぐねていけば、もしかしたら、柳のいう茶碗の姿や意味をまるっと伝えられる方法を発明できるのではないかと思う。

また、柳は、政治経済的強者の同化によって弱者をなぎ倒していべきではないと唱えている。

皮肉にも新型コロナの影響で露わになった社会構図とも似ている。

全世界が豊かになるように願う彼の思想の中で好きな一節がある。「行く雲も飛ぶ鳥も、何ものか静止するものと対比されない限りその運動を知覚することはできない。…音は音なきところに響き、光は光なきところに輝く」対立的二個の世界が一切の現象に潜む。この現象を肯定していきながら、個々ひとりの唯一無二の身体から探っていきたい。

# #01

## お互いの顔が見えないまま 「出会う」 「共に在る」

まず私たちは、お互いの顔が見えない状態で出会うことにした。

Googleドキュメントの音声入力を使用して、あるいはドキュメントにテキストを記入して自己紹介を行う。

入力される文字、誤字脱字を修正していく過程を見つめながら、それを見つめているであろうメンバーが、画面の先にいることを想像しながら。

はい佐藤卓也と申します職業は都市計画とか道路の設計とかをやってます最近  
は最近では景観デザインとかも仕事で行って  
ます外出時はまったことですが私の場  
合はとことん本を読んできました今まで購入  
をして8読まずに入ったものが本棚にいっ  
ぱいあったのでそれを続けて4で行ったっ  
ていう感じになりますこんな感じでいい  
でしょうか とです週に一冊から2冊は読  
んできましたので金額にして2万円ぶんで  
す2冊はい

山田と申します。音声入力できないので  
木村が担当します。やまだゆうこと申しま  
す。ずっと舞台演劇、俳優をやrittつ、プ  
ロダクトデザインの会社でウェブショップ  
の運営と広報の仕事をしています。外出  
自粛期間は、仕事の関係で自粛ができて  
おらず、毎日外出していました。なので、  
電車に乗ったり街歩いたりしていた。いつ  
もより人はいなくて、人がいない電車の中  
の様子とか人の様子を観察することにハ  
マっていました。別の国に来たような感覚  
がありました。

大塚拓海です。大学生です。小説を書くこと、手話も好き。サークルで教えながら勉強。本を読んで、角田光代さん源氏物語を読破しました。瞑想にはまる。考えすぎていると言われることが多い、リラックスできるようになった。姿勢が良くなりました。

時間があればいつでも大丈夫。そのときの違いを楽しむと良い。

僕も闇ブロします。僕も3年生です。

ショウスウティンです。大学生3年生です。闇風呂。やったー!最近価値観変わり始めているので、やりたいことはうまく言えないです。

十代田詠子です。6月まで舞台の仕事を  
していましたが、今は新しいことをしたい  
などと思って探しています。自粛期間中に  
ハマったことは、英会話です。ハマったと  
いうか、身に付けたくて、勉強中です。以  
上です。手話も身に付けたいです!

伊藤聖実です 去年一年間は東北のいろ  
んな場所を借りてマッサージ屋さんをやっ  
ておりました。今は東京の実家に帰ってき  
ていて6月から有楽町にある漢方屋さん  
で働いています。

自粛期間中にはまったことはご飯をちゃん  
と作ることと、あと映画をたくさん見ようと  
思ったんですけど全然見れなくて気持ち  
的に。それは何でかなって考えた時に映  
画館が特に好きなんだなっていうのに気  
づきました。映画も勿論好きだけどなんか  
日常の中で感じたことと近いものが見た  
いって言う、何て言うんだろう動機みたい  
のが映画を見る時にあって。でも自粛中  
はずっと家に本当にこもっていたので何  
も動機が生まれなかったの見ようってい  
う気持ちになれなかったのと、なんかみた  
い作品に出会えなかったのとあと映画館  
っていう場所で見るのが改めて好きなん  
だなっていうことに気がつきました。

原口さとみと申します。さとみはひらがななんです、だから多分 Google が私のいつもの判断したんだなと思ってすいませんちょっと驚きが。私はフリーランスで編集をやっているんですがあの本音で骨としては編集のみをやっている感覚で仕事をしていますもともと出版社にいたこともあって編集に強い関心を持っているものです。自粛期間中なんですけどフリーランスっていうこともあってもともと出社みたいな習慣がありませんでした。たまたま2月からワーキングスペースに入居していたのであそこちょっと行く気持ちなんか行って大丈夫かなみたいな気持ちになったんですけどあの自転車で行ける距離なので私全然自粛期間中とかも生活が変わらなくてむしろあのイベントが中止しちゃったクライアントさんとかのプロジェクトの人から相談がすごくいっぱい来てすごいワーカホリックな期間が続きましたなので世の中鹿籠におすすめのなんとかかんとかみみたいなありましたけど全くすることなくひたすら仕事してましたというのはいちよっこの会においてあまり面白くない話だちょっとおまけで言うところちょうどその位の期間3月ぐらいですな増えたお客さんでアユルヴェーダのカセットカウンセリングをやっている方の情報発信のサポートをするようになってね養生するっていうことに関心を持ち始めたりしましたま元々興味あったんですけどより具体的に関心を持ったりとかしたのでさっきの同じ下の名前さとみさんの漢方の話がクリア後で話を聞かねばと思ったちょっと名前が被っちゃったいけません長くなりましたがひとまずそんな感じですテキスト数が多いな。私今三軒茶屋にあるそのアユルヴェーダのカフェのサポートしているのでもしお近くであれば三軒茶屋にいます遊びに来てくださいご無理ない範囲で!

## 1. 自己紹介のやり方

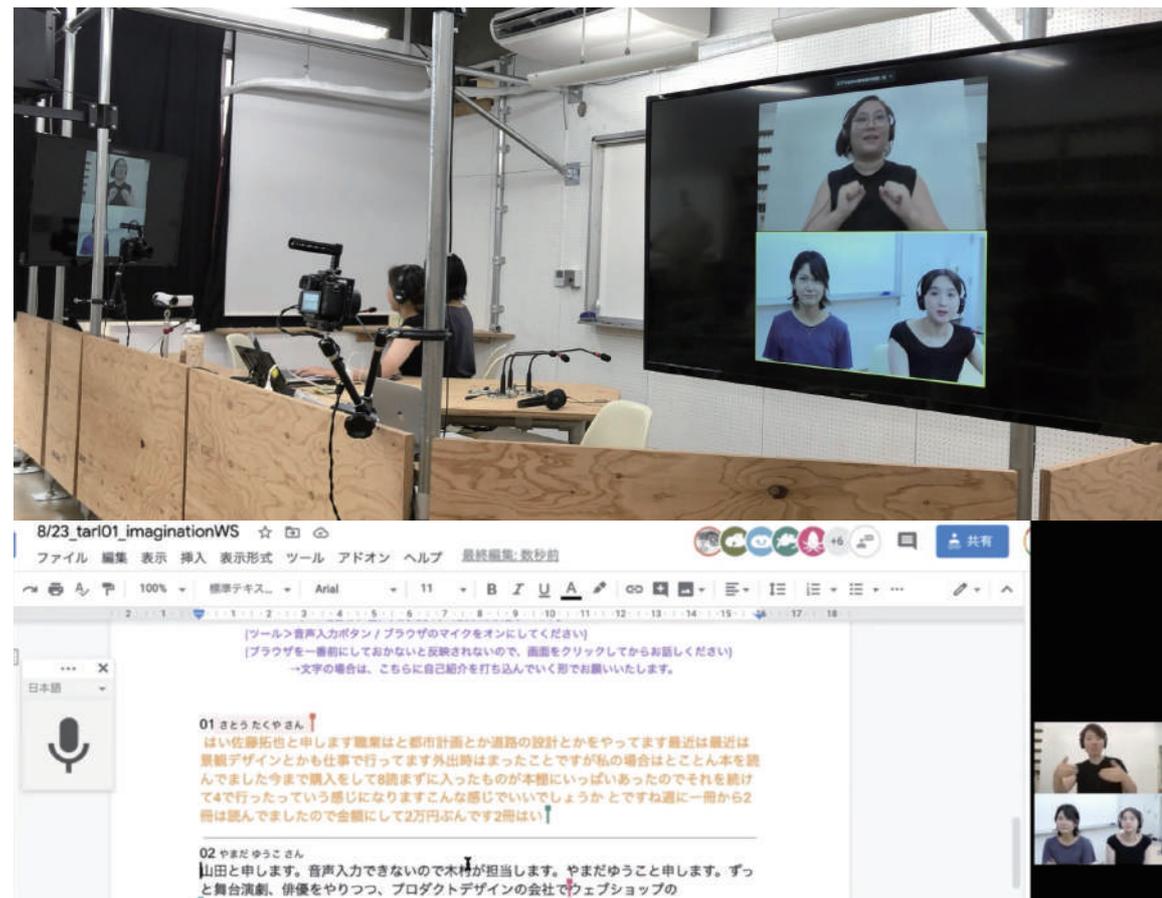
◆自己紹介方法は、声でも文字でも構いません。

→声の場合は、音声入力を試して頂けたら嬉しいです。

(ツール>音声入力ボタン / ブラウザのマイクをオンにしてください)

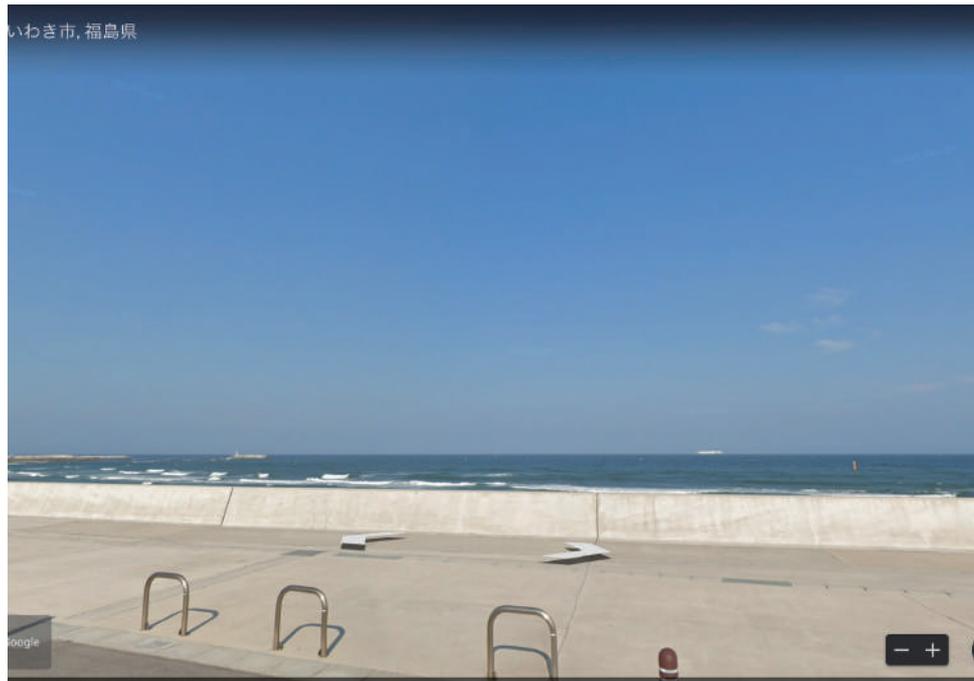
(ブラウザを一番前にしておかないと反映されないの、画面をクリックしてからお話しください)

→文字の場合は、こちらに自己紹介を打ち込んでいく形をお願いいたします。



## 2. 7人それぞれの場所を紹介

生まれ育った町 / 行ってみたい国 / お気に入りの風景を Google Earth を使って共有。



しおやぎとうだいという・・・

灯台の袂、

塩屋崎灯台、そう、その字です。

はい。はい。はい。

生まれ故郷ですね。

えっと、二十歳までいました。

ただ、僕が知っている風景とはだいぶ違ってらんですけど。

震災でここは全壊しまして。

あの一、このへんの街並みはなくなっています。

もっと南側におりる、って言えばいいんですかね、

画面で言えばしたっていうか・・・

そう、そのへん、そのへんは港があった、

そのへん本当は街なんです。

街、だった。

出、身、地、、、ですね。



自分の実家が香港のどこにあるのかも

把握していないんですね。

すごく疎遠で。

一応最後に帰ったときにキューロン、九に龍・・・

そこに行った記憶があるので。

・・・ここなんだ。

そうですね、上からはあまり見えませんが、

高いビルが多くて、

窓が・・・窓が敷き詰まってるんですね。

なつかしい。

敷き詰まってます。敷き詰まってますね。窓。

中国って故郷、故郷なんですけど、

あまり故郷って感じがなくて。

そこにいたことがあるはずなんですけど、

知らない場所ばかりで。

コロナがあって、行けなくなって、

行ってみたくまりましたね。



私は行ったことがあるところで、鮮明に憶えている場所を紹介したいと思います。

もちむね、っていう場所なんですけど。

2年前に友達と青春18きっぷを使って京都にいこうという旅をしたとき、お昼時になって、私がパンを食べたいということで、電車に乗りながら、パン屋さんを検索して、この用宗駅からちょっと歩いたところにパン屋さんがあるらしいということで降りて、

駅からまっすぐ海岸の方に向かって、一本道になっていて、ああそうです、このまっすぐな道を歩いていたらちょっと坂になっていて、登り坂で、登りきったときに、海がぶわーっとひらけて、なんかすごい、なんか、本当にドラマチックで。

その海岸沿い、あ、そうですそうです、ここの道。右に、海沿いにまっすぐ歩いたところにすごい小さいパン屋さんがある。

ここで手作りのパンとかおにぎりとかを買って、誰もいない海辺で、友達を二人で、ご飯を食べました。

計画していないところで、すごい素敵な場所とかお店とか食べ物に出会えて、なんていうんだろ、心底嬉しかった記憶があります。

なんかすごい夏の日で、すごい晴れてて、海には誰もなくて、ひたすら波の音と、太陽と雲をみながら、手作りのあったかいパンとかおにぎりを食べるっていう、時間がすごく、すごい記憶に残っています。



この道を、毎日、自転車で走っています。

海が綺麗なところで。

はい、その、手前の方です。はい、そっち側ですね。

手前にバックする感じで。

海がなかなか見えてこないですね。

その外側のこう・・・はい。その対岸沿いの、、道を、、、

はい、その道を毎日自転車でダーっと走っています。

信号とかもなんもないので、自分のこう、

そんなに早く走っているわけではないんですけど、

ゆっくり、きままに走ってます。

高校生のときに、街を自分で探検してみたいくなる時期があって、

ふふ、そこで街の一番端っこまで行ってみようと思って、

自転車で行ったときに、

この道についたんですね。

# 第1回を終えて

## 大塚拓海

初めての、ワークショップ。みんなどんな人だろう。アートプロジェクトだから、変な人がいっぱいいるのかな。しかし、声や話を聞いてみるとみんなそれぞれ落ち着いた個性を持っている。声や話し方だけでも、その人らしさを感じることができた。

ナビゲーターや司会の方達だけの顔が見えたので、まるで学校の授業を聞いているようだった。主に話している方が先生で、聞いている私たちは生徒であるしかし、その想像はきっと外れてしまうだろう。だから、想像しすぎることもできないでいて、ばくぜんとあれは何だったのだろうか、と不思議に思っている。ファンタジーの世界を想像するような具体的な想像ではない。知らない人の心や顔を想像する時は、はっきりと輪郭を描くことができないでぼんやりとしたままの印象が頭に残っている。その印象は独特なもので、今まで自分が他人を思いやるときなどにも抱いていたものだと思いついた。

はっきりとした形を持たないものだから、すぐに忘れてしまうし、

日々のさまざまな出来事の中で消えていってしまうものだ。今回、じっと顔を合わせずに長い間話すことで、そうした淡い空気を掴むような手触りを改めて思い出した。

とすれば、ワークショップは終わってからの、この一人になったときに始まっている。次に会う時までその手触りがどのように自分の体の中にとどまって、消えていくのか、あるいは別の感覚になっていくのかを見つめていたい。

あれはいったい誰だったんだろう。こうして問いかけている「誰」は、本当にはいない自分の想像が生み出した「誰」。次にあったときは、本人の顔や表情で消えてしまうのだろうか。

しかし、その「誰」というあいまいなままの不思議は、たとえ顔が見えたとしてもどこに残るという確信がある。そもそも、顔を見せて会ったとしても、その人の全てがわかるわけではない。わかったつもりになっているだけで、分からないことは確かにある。オンラインという形で、今回出会ったわけだが、出会うということが曖昧になってきているとおもう出会いの中にも、出会いがある。顔を早く見てみたいという気持ちもあるし、顔を見ておしまいというのは、さみしい。どこまでも、人と出会い続けたい。

## 南雲麻衣

ダンスやパフォーマンスが終わった後のやりきった感がたまたまなく好きだ。今回のワークショップも。

やりきった感とふーと空気が抜けていく感じ。その空気がぬけて空白になった身体にビールを流し込み、「はー」とみんなで言う一体感もう最高。きっとそのために舞台をやっているんだろうなとたまに思う。そう、私はいま、ビールを飲みながら文字を打っている。そばには、エビスビールとサラミがある本当にうまい。

そう書いていたら、私の印象は変わってしまうのだろうかとか... そんな心配はしていないけども、「見かけによらずおじさんみたいだね」とよく言われる。ちょっとでも気になる社会情勢があれば、コンビニで新聞とコーヒーをセットで買う。それをみた同僚から「見かけによらずおじさんみたい」と全く同じことを言われる。え、見かけによらず...? いや、そのまえに「おじさん」のイメージは「ビール」「新聞」「コーヒー」の三点セットなんだな、とそこでイメージができてしまった。

普段、私は私が見えない。私を見ている他者が見た「私」はまさかビールをのんで、「ぶはー」とは言わないと思ったのだろうか、新聞を買って日本についてあれこれ言う人には見えないと思ったのだろうか。何かしらこの容姿で無意識に判断しているのだろうか、そう言われる度に考えていた。または「ギャップ萌えだね!」と友達に言われる。ギャップに萌えるっ

てなんだろうと考えてしまう。そう考えるとキリがないので大塚さんの瞑想は今の私に必要なことだと気づいた。ありがとう、大塚くん。このメンバーは「癒し」のプロフェッショナルが多いので、いろいろ聞いてみたい。

このワークショップは、「見たい目」を考えられるワークショップになったかなと思う。ラベルを貼るまえの、視覚情報で判断するまえの、誰がどんなひとだろうと、混乱したり、今のこえは誰だったのだろう考えたりで、なにか定まらない感じは、このオンラインでしかできないことだったのでとてもよかった。ちなみに、私は声は聞こえていないから、みんなの声は全部手話通訳を通してみている。みんなの声が、田中さんと米内山さんに宿ったみたいで、ひとりひとりというよりは、一つのかたまりとして、別の田中さんと、別の米内山さんと出会っているような感じだった。イタコのような。でも、例えば原口さんの声を米内山さんに宿しても、当たり前だけど米内山さんにしかみえない。佐藤さん以外は私は面談をしていないので、ワークショップを作ったのは、私なのに後悔してしまうほど、ほかのみなさんの顔が見たくて見たくてたまりませんでした。似顔絵をみせあったときに私以外の運営チームは「あ〜!!」と盛り上がりすぎて、あ、ちょっと疎外感(笑)スーさんの眉は、私は知らないんだよな、悔しいなど。そんなことを思いながら今回の出会いを楽しみにしています。(文字を打つことに集中していたら、ビールがぬるくなってしまった)

# #02

## 私たちは本当に出会ったのだろうか



メンバー同士の顔が見えない状態でワークを実施した前回、普段とは違うかたちで他者と出会った。

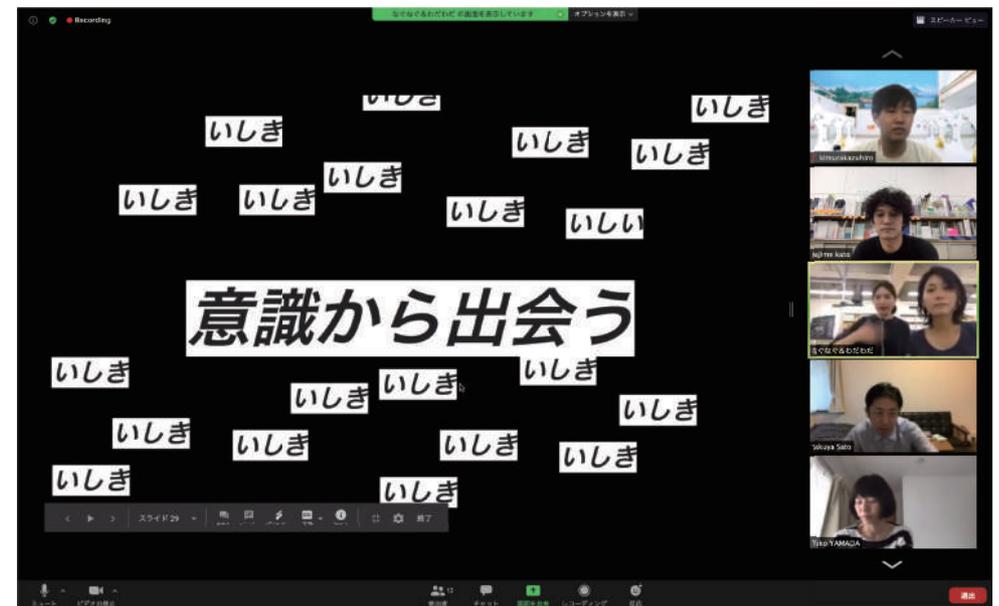
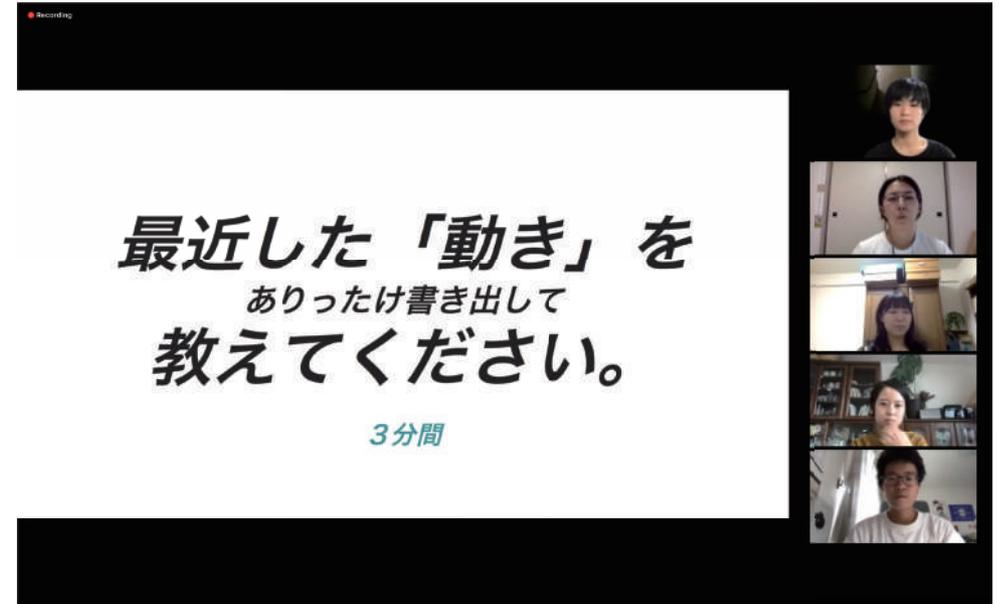
しかし、第1回を終えてしばらく経ち、ナビゲーターチームから生まれた問いは「私たちは本当に出会ったのだろうか」だった。

第2回は、出会うとは何かを考えることから始まった。



## 「はじめまして」の顔合わせ

それぞれが「新しい挨拶」を考え、  
画面上に共有された「せーの」の文字と和田の発話をきっかけにしてビデオをONにした。



第2回ワークショップの様子。



オフラインではじめて集った日。  
「撮る / 撮られる」行為をヒントに他者の無意識に触れていきました。

# #03

撮る / 撮られるから、  
他者の無意識に触れる

# #04

## それぞれのもやもやから 出会う

秋晴れの代々木公園。  
第1回から第3回を経て、自分に生じている変化や感じている  
「もやもや」を思い思いに共有する時間を過ごしました。

電車で揺られながら、宿題である「もやもや」について考える。もやもやってなんだ。この問い自体が、私の中にもやもや宿す。「これが、私のもやもやです」と手に持って示すことができるのなら、それはたぶんもやもやじゃなく、ゴロゴロべたべたサラサラした、何か。

このスタディに応募した時、まさかスタディのメンバーのみんなと「出会う」とは思っていなかった。

僕は「出会い」に固執した。「本当にわかったのか?」「実際に会ったほうがわかるのか?」「腹を割って話したらわかるのか?」「通訳がいたらわかるのか?」「通訳が必要ない状況だったらわかるのか?」等々、「出会う」という一つの体験をいろんなパターンで繰り返して試している。4通りの、バラレルな出会い。

# フィクションを織り交ぜながら、自分の分岐点について書く

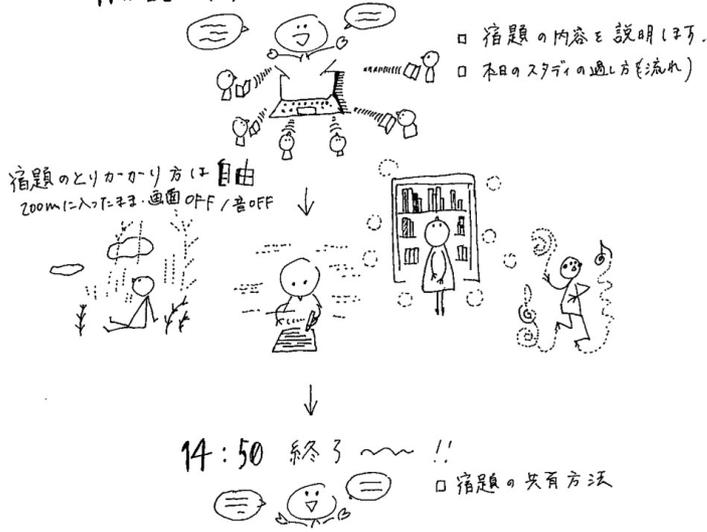
11月28日、オンライン会議ツール「Zoom」で第5回のワークを実施。テーマは「フィクションを織り交ぜながら、自分の分岐点について書く」。自分にとっての分岐点とはなにか、フィクションとはなにか。どのように織り交せていくのか、その結果何を目指すのか。大きな余白を受け取ったメンバーそれぞれが、自分なりの表現を模索する時間となった。

ナビゲーターの南雲麻衣から、テーマとともに次のことが共有される。メンバーそれぞれ別の人生において、分岐点だったと感じる出来事を振り返り、そこにまつわることを書くこと。事実をそのまま書くのではなく、フィクションを混ぜること。フィクションの濃度は1%でも99%でも構わないこと。

また書くときのヒントとして、「自分という存在がいて、他者と出会って、触れて、自分がある。ある出来事が分岐点となり、その出来事の積み重ねの先に、今の自分があるはず」という言葉がメンバーに手渡された。

## 東京プロジェクトスタディ1第5回

11月28日(土) 13:00 スタート @ オンライン



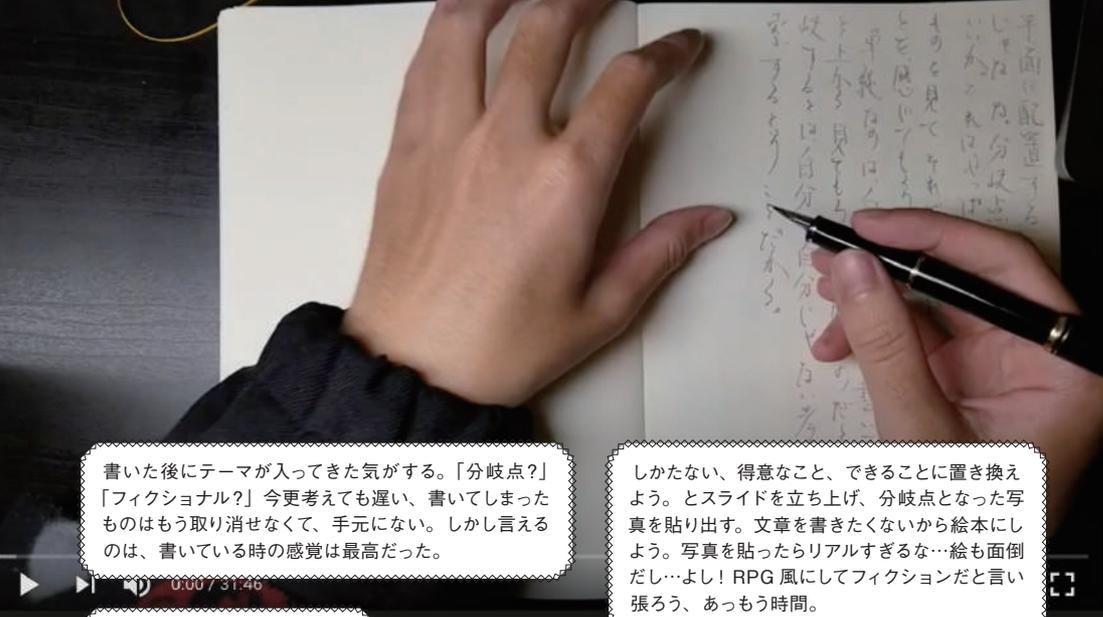
宿題を書きあげた人からGoogle DriveにUPして可!

出来たよ!

11月28日(土) ~ 12月5日(土) までに

自分の都合の良い日時をいつでも、物語を公開。

- ① 公開当日に参加した人は、その人の「物語」を「読んで」コメント。必要であれば、後日コメントOK。
- ② 公開当日に参加しなかった人は、後日コメントOK。



書いた後にテーマが入ってきた気がする。「分岐点?」「フィクショナル?」今更考えても遅い、書いてしまったものはもう取り消せなくて、手元がない。しかし言えるのは、書いている時の感覚は最高だった。

しかたない、得意なこと、できることに置き換えよう。とスライドを立ち上げ、分岐点となった写真を貼り出す。文章を書きたくないから絵本にしよう。写真を貼ったらリアルすぎるな...絵も面倒だし...よし! RPG風にしてフィクションだと言い張ろう、あっもう時間。

フィクションを取り入れて書く作業は、未来から過去の分岐を思い出す時、何か忘れ去られたり、自然と盛られたりすることに近い感じがしました。

ひとまず、気のむくまま書き進めていくと、しばらくして、分岐点で出会ってきた人々と物語のなかで対話するような感覚になった。もう会えないけど、でも会えるみたいなこの感覚は、寂しくてたまらないが私は好きだ。

後日、Googleドライブ上に、ワークを経てアウトプットしたものが、それぞれの形で共有された。Googleドキュメントにひたすら文字が書かれているもの、PowerPointで作成されたもの、写真を起点に分岐点を振り返っているもの、書いている様子を動画で記録しアップロードしたもの。

大きな余白を受け取ったメンバーそれぞれが、自分なりの表現を模索する時間となった。

再集合した後は、ワークの感触がそれぞれから共有された。迷う暇もなく、ひたすら書き進めた人、「もしもあのとき、こう選択していたら」と考えること自体を捨てていた」と気づいた人、「全然書けなかった」と微笑む人。

Zoom はつないだまま、映像や音声のオン/オフはそれぞれのやりやすい状態で、再集合の時間まで各々ワークを行う。クローゼットにこもりながら、取り組んでいたメンバーも。途中、チャットに、「洗濯物が飛ばされてしまったので、取りに行ってきます」とコメントが入り、それぞれ違う場所にながら、画面の向こう側に人がいて、暮らしが確かにあると感じられた。

それらに、ぼつぼつとお互いのアウトプットにコメントが入っていく様子は、植えたばかりの種に、それぞれが肥料をまき、耕し合っているようにも見えた。

# #06

## 翻訳する身体と 思考を巡って



「私たちは何を伝え合っているのだろうか」。第6回のゲストは、劇作家・演出家・舞台手話通訳家の米内山陽子さんと、舞台人・舞台手話通訳者・手話通訳者の田中結夏さん。手話通訳という役割でこのスタジオに併走しているおふたりと共に、通訳する身体と思考を巡るディスカッションを行った。

※第6回はディスカッションの様子をまとめたレポートを掲載する。その他、各回のレポートは、「東京プロジェクトスタジアム・カブサイト」にて公開されている。(詳しくは p156)

## 私たちは何を伝え合っているのだろうか、伝えるとは何か

第6回のゲストは、劇作家・演出家・舞台手話通訳家の米内山陽子さんと、舞台人・舞台手話通訳者・手話通訳者の田中結夏さん。手話通訳という役割でステージに併走しているおふたりと共に、通訳する身体と思考にまつわる座談会を行った。

この日の手話通訳担当には、石川阿さん、瀧尾陽太さんが同席。ナビゲーターの和田夏実から「ゲストそれぞれの身体に合うと思う通訳者を選んでもらいました」と共有があり、座談会ははじまりました。

### 手話通訳をはじめたきっかけ

**和田** 手話通訳をはじめたきっかけについてお伺いさせていただきます。

**米内山** 両親がろう者で、生まれたときから音声言語の日本語と同じくらい手話がそばにあったんです。親は聴者である私に通訳を強要することはありませんでした。幼い頃から手話ができまして、

はじめて通訳らしいことをしたのは、聴

者の親戚から「両親に○○って伝えておいて」と言われ、伝えたとどきだっと思えます。それ以降もたまにそういうことがありましたが、仕事として手話通訳をしようとは考えていませんでした。本格的に通訳に携わりはじめたのは26歳のとき、ある演劇公演の稽古場の手話通訳の依頼をもらったんです。

もともと手話通訳という関わり方ではない形で演劇活動はしていたのですが、通訳という役割において、私でなければできないことがあるのではないかと思い、そこから舞台手話通訳家として仕事を始めました。

**田中** 大学卒業後に演劇の学校に進んだのですが、そこでもう者の同級生と出会ったのがきっかけです。その人と関わるなかで、手から溢れ出る手話という言葉がとても格好いいと思って。そこから手話を本気で学ぼうと思いました。

はじめて通訳的なことを担当したのは、手話をはじめて1年ぐらい経った頃です。「アメンバーがろう者の劇団に、私は演出助手で携わっていました。演出家もろう者だったので、聴者とのコミュニケーションのときにすこし通訳をやりました。すると拙いながらもすこく喜ばれて、それが嬉しかったんです。

そこから誰かに「ありがとう」と言ってもらえるように、仕事としてやりたい

**和田** 通訳の現場で、相手に伝えると

きにしている工夫を教えてください。

**米内山** 大事にしているのは、「あー」とか「うーん」とか、何かに詰まるところまで、そのまま伝えようとするんです。考えているときに上を向いている人がいたら、一緒に上を向いている、表情が変わらない人であれば同じように表情を変えないようにしたり。冗長的な部分を省くと、意味は伝わるけど、やはり、その人の個性が伝わりづらくなってしまうので。

**和田** どんなにその人らしさを伝えようとしても、私たちは、自分ではない他人になれないと思うんです。それぞれが思考や身体の海を持つている。それを受け取ること自体難しい。

だからこそ現場に入る前の事前準備もあると思うんですけど、どんな情報がある前にあるとおふたりは嬉しいですか？「年齢や職業」はヒトにはなるかもしれないけれど、それだけでは、通訳する相手のことが自分に入っていない感じがあるかもしれない。

**米内山** できれば1週間前に居酒屋とかで飲んで「来週何話すの？」って「コミュニケーション」をとるのが一番いいですね。で

と思うようになり、学びながらいまに至っています。

### 意味情報からこぼれ落ちるものを伝える難しさ

**和田** 実際にさまざまな現場で通訳を経験していると思うのですが、通訳しているってどんなことに難しさを感じていますか？

**米内山** その人らしさみたいなのを伝えるのが難しいです。意味情報を伝えることは、多少こぼれ落ちたりすることもありますが、ある程度は伝えられる。でもそこから外れる、ノンバーバルなこと、例えば、言葉に詰まる感じとか、意味情報の周りにあるニュアンスとかもややとかを伝えるのが難しい。本来は、そういった部分も含めてその人だと思っし、そこが伝わらないと話に色や肉とかがつかない感じがあります。

言葉遣いひとつ、たとえば「仕事を」巻き取ります」「引き取ります」でもちよとした違いが生まれるじゃないですか。どちらも仕事の引継ぎという意味では同じかもしれないけれど、「巻き取る」感じと「引き取る」感じは違う。そのニュアンスまでしっかり通訳したいと思うんです。

### 通訳と俳優と編集は似ている？

**和田** 通訳する方と自分の相性もあると思うんです。例えば、この考え方や言葉の使い方は自分を通じたくないと思ってしまうときにどうしていますか。私は、相手のことも時代を想像していくんですけど、こどもの頃にやっていた「名前のない遊び」を聞いて、自分なりにその人のことを愛せるポイントを見つけていくんです。

**田中** 俳優の役作りに近いことをしているかもしれない。この人の正義やポリシーって何かを考える。舞台の登場人物でもアニメのキャラクターでも悪役が出てくると思うんですけど、彼らは彼らなりの正義を持って行動を起こしている。そういう人たちを演じるときと同じように、背景を調べたり、取り込めるものは取り込んでみて、通訳をしている感覚があります。

**和田** 俳優と通訳って似ているのかもしれませんね。

**米内山** 他者を演じる行為と通訳は二

特に演劇制作の現場だと、演出家が目指したい方向を、考えながら喋ったり、余白も残しながら俳優と「ミニミニエーション」することがあります。そうなること、ニュアンスはかなり大切なので、行間とかもできるだけ伝えようとはしています。

**田中** たしかに、演出家の言葉の通訳は難しいですね。それ以外だと、自分が慣れ親しんでいない領域の通訳は難しさを感じます。専門用語が多く使われていると、どう手話に落とし込んでいいのか悩んでしまうんです。自分が慣れ親しんで勉強してきた領域だと対応しやすいんですけどね。

だから通訳の仕事をはじめてから、どんな領域でもマルチに通訳できるようにするか、特定の領域を極めるか、どちらにいくか悩んだ時期もありました。結果的には自分の好きな領域を突き詰めて、そこで通訳をやりたいと思っています。



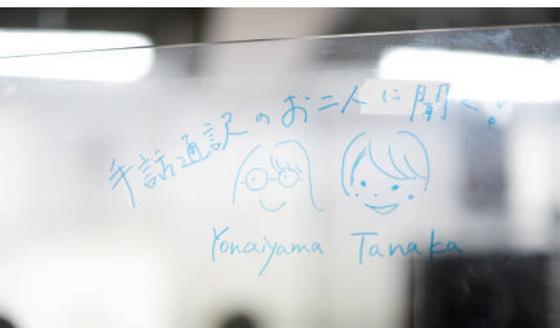
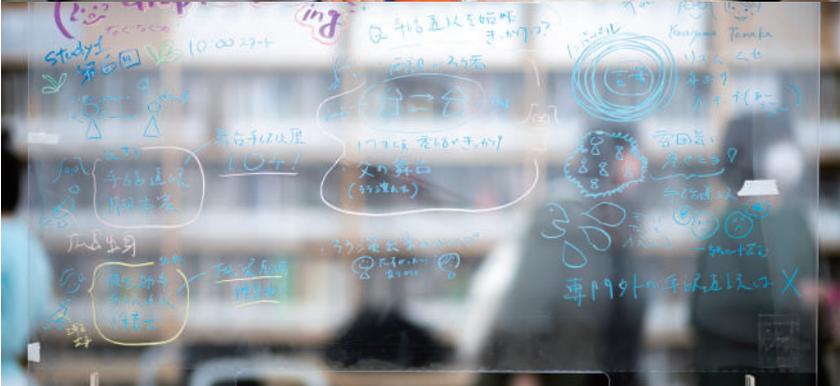
アイコールだと思えます。意味情報だけじゃなくて、この人らしさ、が伝わらないといけない。

**メンバー原口** 通訳も演じる行為も編集と呼べるのかもしれないです。相手は何を考えているか、自分に取り込もうとして、考えて出す行為は、編集だと思っ。自分の身体を通して、表現としてトランスフォーメーションして出す。劇作家も、その人が触れている社会、見えている世界を、自分の身体を通して戯曲に落とし込んでいけると言えるのでは。それぞれ通じる行為だけど名付け方が違うだけ。

※ここで和田が発話から手話に切り替える。和田の手話を瀧尾さんが発話で通訳。

**和田** 世界全体、見ているもの、例えば景色、空にある特定の雲に対して、きれいだと思うとき、それはもう一種の翻訳と言えるのかもしれない。きつと、身体言語や視覚言語、音声言語が得意なことはそれぞれ違う。手話は、その人がまだ言葉にできていないものに触れられると思うんです。





この回の終了後、一部のメンバーで、和田が作家、南雲が映像出演で参加している企画展「トランスレーション展―『わかりあえなき』をわかりあおう」を訪れた。トランスレーション＝翻訳をテーマにした展示に触れながら、翻訳する身体と思考について考えをさらに深めていたようだった。

その答えがこの時間で明確になっただけではない。ただ、それぞれが普段他者から何を受け取るうとしていたのか、それを共有する手段として何を選択してきたのか、そこからぼれおちてしまうものにどう手を伸ばすのか巡る時間だったように思う。

「私たちは何を伝え合っているのだろうか、伝えるとは何か」

マッサージで他者の身体に触れることへの感覚について、演出家と演出助手、俳優の稽古場でのやりとりで行われる翻訳とは何か、ダンサーとして振付をインストルしたり、自分の身体を媒介にして観客にみせるときの意識の矢印の方向など、メンバーから多くの視点が寄せられた。

後半には、「言葉が得意なこと、身体や視覚が得意なことそれぞれ違う。言葉のほう伝わることもあるけど、手話はそれだけなのか?と思うこともある。手話のほうはまだ言葉になっていないことに触られるのではないか」というテーマが和田より共有される。

座談会の前半では、和田の使用する言語が、発話から手話に切り替わる瞬間があった。そのタイミングでは、滝尾さんが発話で参加者に通訳する。和田の語りが本人自身の発話で共有されるとき、手話で共有されるとき、あるいは通訳者を介して手話で共有されるとき、通訳者の発話で共有されるとき、受け手側としてどのような違いがあるのかという問いが共有されていたように思った。

# #07

## 既存の「自己紹介」の手前にあるものとは？

美術作家の関川航平さんが持つ視点や創作の手つきと、このスタディのテーマに接点があるのではないかと、そんな予感を携えて、共に時間を過ごしました。

関川さんの内言語を皆で猛ダッシュしたような3時間はなんというか終わったー！みたいな爽快感があって、それでいてなんだったんだろう、と笑えてしまう感じもあり。タバコの箱のような時間でした。

コンビニの温度が、タバコの箱に残ってるって実はものすごいことなんじゃないか。うまくいえないけれど、どうでもいいことのように思えるけれど、実はすごいことだ。

彼が持参してくれた『タバコの箱の話』は、あきらかにスタディ1への応答で、僕にとってはまぎれもなく作家関川航平の作品だった。(彼にとつての作品かどうかは別、かもしれない。もしかするとこれに対するスタ1の応答次第では、これは彼にとつても作品になりうるの、かもしれない。)

# わかりやすさ／伝わるはやさだけに とらわれない言葉を味わう



「言葉は身近すぎるコミュニケーションツールで、わかりやすさ、伝わるはやさ重視されやすい。でも、それだけではないと思うんです」

こう語るのは、ゲストである歌人の伊藤紺さん。緊急事態宣言下に行われた第8回は、オンライン会議ツール「Zoom」を使用し、詩的言語を味わう時間となった。通訳する身体と思考を巡るディスカッションを行った。

## #08

2021年1月10日、緊急事態宣言下のためオンライン会議ツール「Zoom」を使用し第8回を開催した。ゲストは歌人の伊藤紺さん。手話通訳には米内山陽子さんと田中結夏さんを迎え、詩的言語の可能性に触れた。

「言葉は、身近すぎるコミュニケーションツールで、わかりやすさや伝わるはやさ重視されやすい。でもそれだけではないと思うんです。伝わる範囲がせまいけれど、届いた人の脳内に鮮やかなイメージを描けるものや、身体にじわっとしみてくるものもある。」

普段、社会で使う言葉からこぼれおちてしまふような気持ちやイメージを考えると豊かさを味わう時間になったら」

伊藤さんは、冒頭にこう共有する。そしてまず行ったのは、いくつかの短歌を読んで、話し合ふワークだ。5つの短歌がZoomの画面上に共有され、ビデオをOFFにして読み、読み終わったらONにするのが伝えられた。

しばらくすると、ビデオがONになりそれぞれが読んだなかで気になった歌と、

そこから考えたことについて喋る時間を過ごした。

短歌にある「この単語から、それぞれ違う解釈が生まれること、想起されるものが違ふこと。それぞれ感じたことこの共有から触発されて発見されるものがあること。そもそも、こんな状態が「短歌を読んだ」と言えるのか、その歌を、ど

の部分で区切って読むのか。どこにどの単語の意味がかかってくるのかによって印象が変わるのはなぜか。正解を求めるのではなく、それぞれに湧いてきた感覚に近い言葉を味わうための準備体操をしているようだった。

「感情がどこから湧き出るのが、胸に感情が直結すると言われるけれど、自分の実感に近いところで表現してみたい。まずはよろこびはどこからくるのか？」伊藤さんはこう共有する。メンバーはGoogleドキュメント上に匿名の状態書き込んでいく。

「よろこびに背中を押される」「耳のうしろから生まれる」「顔の真ん中めがけて飛び込んできて、尾髄骨に到達します」「指がしびれる」「よろこびが腰を支える」「よろこびは、頬」「手のひらから、二の腕をじんわりふるわす」「喜び…首筋のあたりからワーワーって感じ。手塚治虫のマンガの『ワァー』の感じ。飲む…身体を覆う一枚の皮（表皮）がびりびりする。喜び・天空の彼方からじゅくじゅくくる。でも胸骨の内側でオイルがじゅわっと溶ける感じもする」

よろこびを感じていた瞬間を探し、そのときの身体の状態を手練り寄せる。「よろこび」と呼んでいる感情と身体結びつきを眺め、言葉にしていた。

さらに自分の身体感覚に近づいたメンバーが行ったのは、「短歌をつくってみる」。伊藤さんは、次のように補足する。「思いつかなければ、ワークで出てきた表現を使ってみてください。また字余り、字足らず、句末ががり、なんでもありです」

限られた時間のなかで、さまざま短歌がドキュメント上に書き込まれる。そして、冒頭のワークと同様に歌から感じたことをメンバーそれぞれが語り、あつちう間にときが過ぎていった。

もう二度と会いたくないと思うほど愛しすぎるアイデアのあなたを

白い空 黒い軌跡が並びゆく、横にあなたが読む歌がある

新しいパジャマを洗わず着て 布団にころがる君から ユニクロのにおいがするよ

明日には 晴れるかしらと 爪の先 みつめて反射をたしかめる

部屋の中 いたるところに君がいて バファリンすらも味方な気がする

すこし寝て おきて食事を作る母 黒いスカートは すこしおやすみ

エンジンと 波しぶきにかき消され 彼方の海の きみの声をきく

あ…と声もれて 視線の先は 水たまり テーブルの角から 水がこぼれゆく

寒いよね そう言い合って また寒いと 寒い言葉が 不思議とあたたかい

「もう一軒…」頬を染めて伝える報告、わたしの中にひろがるあわ玉

発売前の本、生かされた絵をよんで、ああ終わったのだと、おしぼりで顔を拭く

ふわふわの白と茶色と薄茶色 散歩と昼寝と まるさんかくハート

提琴の音 から響けし光の粒に 94年の手土産と翔ぶ

手のひらで、つかむ光通り抜け、たしかに伝わる温度、隣りと

ひたいつけ ぎゅぎゅぎゅぎゅんと 流れる 尾から尾へ よろこびつながる

歌おう、と広がる海を見つめてる 握った拳の白い温度

ある夜に窓辺の彼女が呟いた わたしはヤモリ あなたはなあに

# #09

## 南雲麻衣の パフォーマンスから 「フィクションを織り交ぜる」 を考える

第9回は、ナビゲーターの南雲麻衣がパフォーマーとして参加したパフォーマンスフェスティバルの配信をオンラインで観賞した。その後、オンライン会議ツール「Zoom」にメンバーが集まり、それぞれ感想を共有。第5回「フィクションを織り交ぜながら、自分の分岐点について書く」が辿りつくであろう、ひとつの形に触れる時間となった。

「作品を観て。だれがなにを考えたのか知りたいたいでなく、自分がなにを感じたのか言葉にしたいと思った。遠回しに、自分なりに、安心できる土台から離れて受け取ることがしたい。わかりたいが、わかったつもりになっていることか。わからないうちに、自分の解像度が低いまま、自分勝手におそれを感じて離れたりすることか。恐さもあるけど、でもなんか格好いいし、面白し、惹きつけられる。『あなたはいつでも征服したが』って言葉がすごく、ドキッとした。個と個が出会うことの妨げを自分で作っていないか。

2021年2月7日、オンライン会議ツール「Zoom」にメンバーが集まり、第9回を開催。ナビゲーターの南雲麻衣がパフォーマーとして参加した「無言に耳をすますパフォーマンスフェスティバル『Zipcode』」のライブ配信を、それぞれの場所からオンラインで観賞した。

「第5回の『自分の物語にフィクションを入れてみる』ということに似ていて、南雲麻衣という物語を真実のまま話すよりはフィクションを交えながら話することで、真実味を帯びるというような作風になってます」と南雲から事前にお知らせがあった今回。メンバーそれぞれが何を感じたのか、その一部を記載する。

「うまく嘘をつくためには(＝相手に信じさせるためには)本当のことを少し混ぜておく必要がある」と、南雲さんのお話。その中で、南雲さんが「自分には基本的な信じられないこと、感じたことをその場で強く信じなければいけない、言われたことにしがみついてもいいや、やり方で言葉を理解していることに気がつく。疑って、グレーのままいるよりもぶつかっていたい目に遭いながら修正していくタイプ。(中略)

よく考えると、舞台の上でも南雲さんぽさはあるし、舞台の南雲さんといつも話している南雲さんがつながっていることも感じる。無言と言ったのが自分にとってとても心地よい。頑張って聞こうとしないでいいからである。いつも聞くことは自分にとって集中力がいることであるからだと思う。

でもやはり、最後の南雲さんの舞台を見ると、もっと話をしたいとも思う。「コミュニケーションがすれ違う悲しさは死ぬまで続くけど、絶望しないぞ、って感じが、最後の『うそです』に込められている気がした。」

「うまく嘘をつくためには(＝相手に信じさせるためには)本当のことを少し混ぜておく必要がある」と、南雲さんのお話。その中で、南雲さんが「自分には基本的な信じられないこと、感じたことをその場で強く信じなければいけない、言われたことにしがみついてもいいや、やり方で言葉を理解していることに気がつく。疑って、グレーのままいるよりもぶつかっていたい目に遭いながら修正していくタイプ。(中略)

「今日みて、なんとなくわかった気がする。ノンバーバルなコミュニケーションに興味があるけど、仕事は言語に関わっている。ダンスはノンバーバルじゃない？」ダンスは立派な言語だと思って。ダンスはノンバーバルなコミュニケーションとは言えない感覚になっている。」

今回は、第5回のテーマ「フィクションを織り交ぜながら、自分の分岐点について書く」が辿りつくであろう、ひとつの形に触れる時間となった。メンバーそれぞれが、今回のスタディで受け取ったものをどのように形にしているのか、その問いが迫ってきたように思う。

尚、この記事に記載されていることは、すべてが事実だとは限らない。しかし、メンバーそれぞれが作品に触れてそのとき感じたこと的痕迹は、たしかにあるはずだ。



# これまでの経験をあらわす

2021年2月14日、オンライン会議ツール「Zoom」にメンバーが集まり、第10回を開催。

「メンバーそれぞれがこのスタディを経て残す、成果物のようなものを共有しあえたらと思います。パフォーマンスなのか、企画書の共有なのか、プレゼンなのか、展示なのか、アウトプットのかたちは自由ですが、なにかしら発表していただきたいです」

ナビゲーターチームからのお題が共有され、メンバーそれぞれはこのスタディから掴もうとしているもの、育もうとしているもの、創り出そうとしているものの企てをオンラインで発表した。当日はグラフィックレコーダーの関美穂子さんをお呼びして、発表の様子をリアルタイムで可視化。また手話通訳として小松智美さん、瀧尾陽太さんが同席した。

# #10

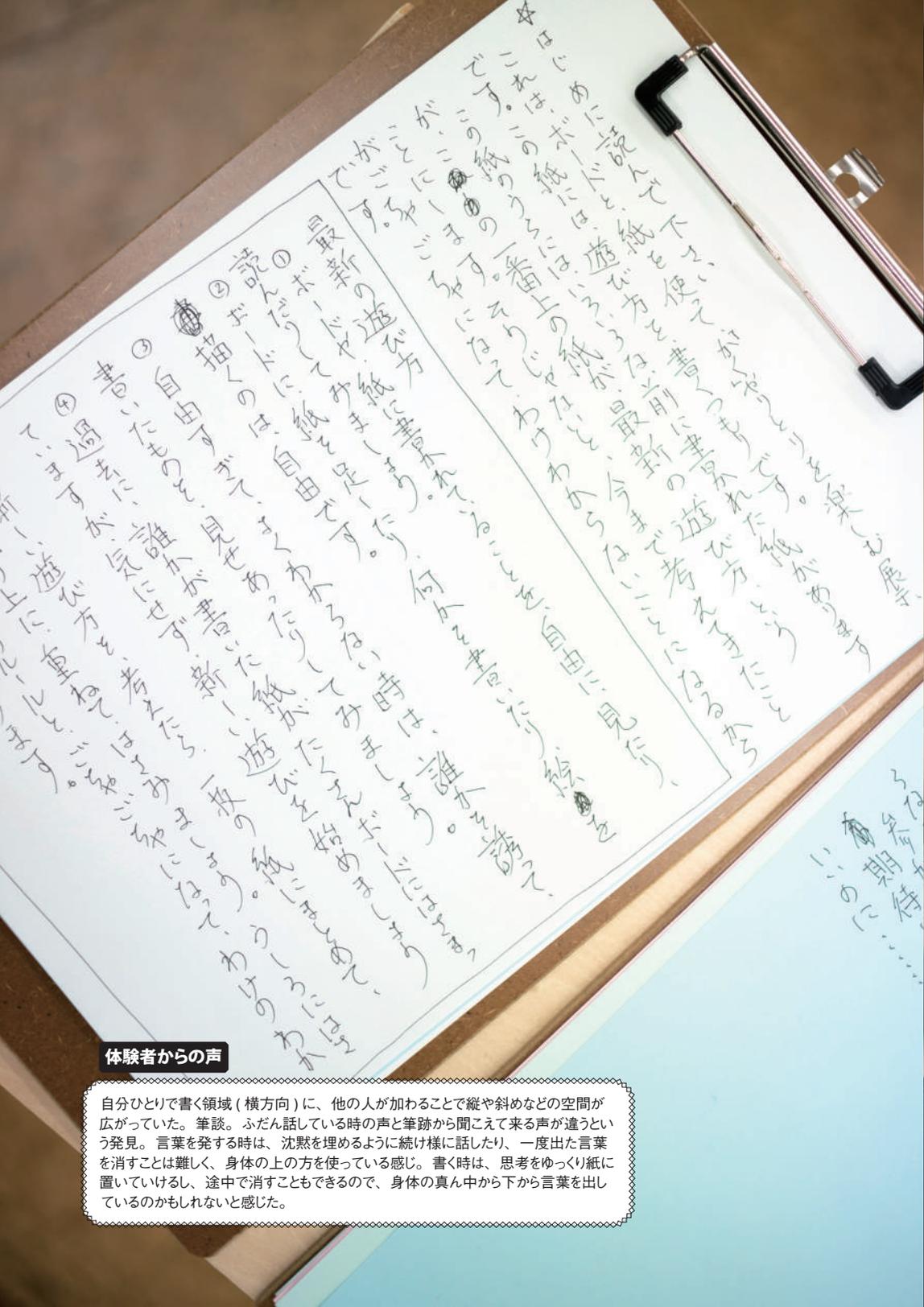
#11



誰にもなれない自分の身体に、  
一番近いコミュニケーションのあり方とは

# 「書く」から身体と思考を 味わうコミュニケーションボード 大塚拓海

机に3つのボードとペンが置いてあり、ボードにはさまざまな色の紙が多く挟んである。あるボードには「これは『かく』やりとりを楽しんでも展示です」と書かれており、続いて遊び方が記されている。この作品に触れる人は、任意のボード、ペン、紙を選択し、任意のタイミングで自由に「かく」を楽しむことができる。違う時間に書かれたであろう他者の文字あるいはイラストのようなもの、線を眺めることもでき、「かく」行為から他者の身体と思考の断片を味わうことができる。



## 体験者からの声

自分ひとりで書く領域（横方向）に、他の人が加わることで縦や斜めなどの空間が広がっていた。筆談。ふだん話している時の声と筆跡から聞こえて来る声が違うという発見。言葉を発する時は、沈黙を埋めるように続け様に話したり、一度出た言葉を消すことは難しく、身体の上の方を使っている感じ。書く時は、思考をゆっくり紙に置いていけるし、途中で消すこともできるので、身体の真ん中から下から言葉を出しているのかもしれないと感じた。

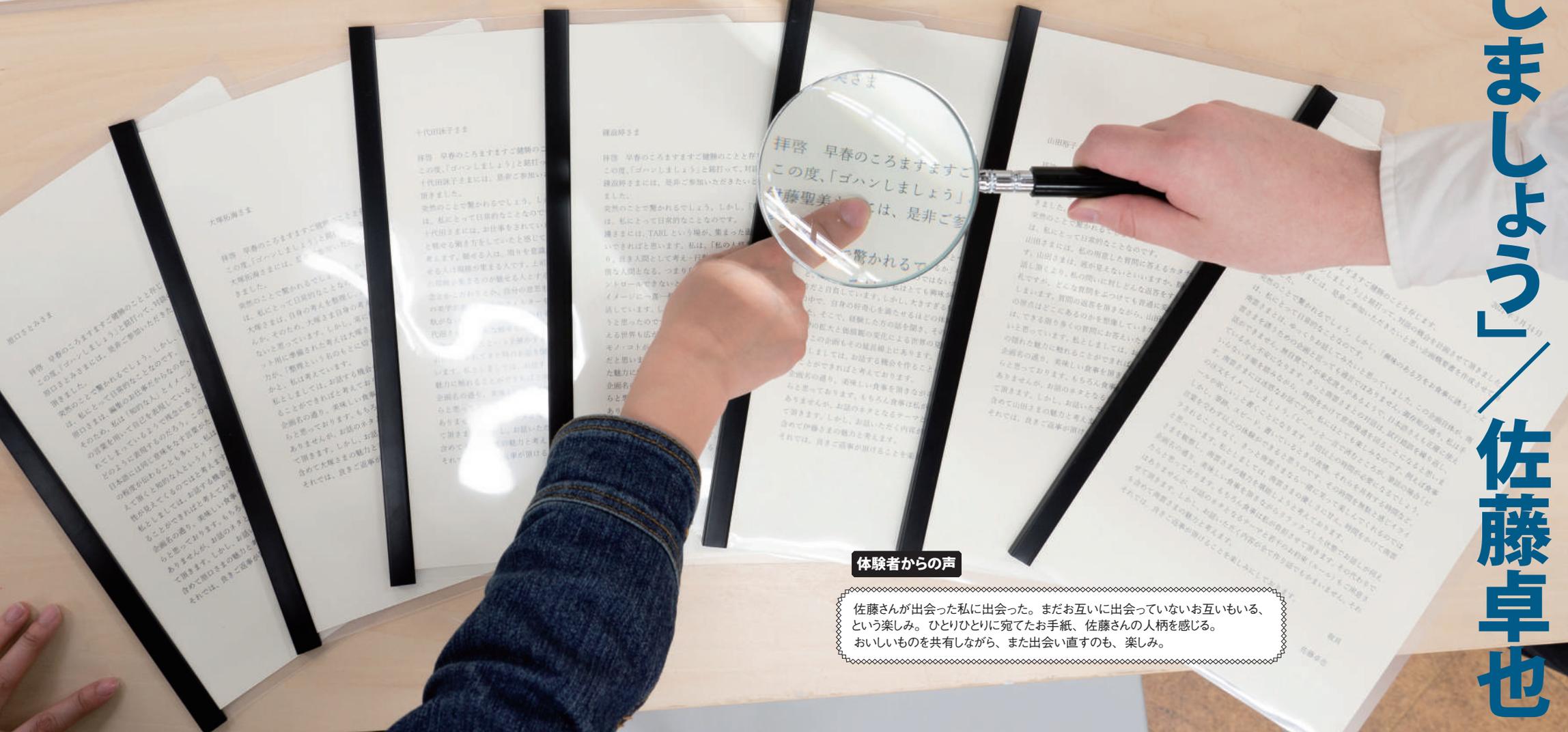
# あなたから見たわたしに出会う妄想企画「ゴハンしまししょう」

「ゴハンしまししょう」／佐藤卓也

テーブルに複数の企画書と手紙が並んでいる。企画書はメンバーやナビゲーター、それぞれに向けて「ゴハンしまししょう」という誘いの文言。それと共に、食事のときに話してみたいテーマ、そのテーマをあなたと話したいと思った理由、「お話しただく内容が全て作り話でもかまいません」という文言が記されている。第三者として、それらを読むことは、ラブレターを密やかに読むような、佐藤さん自身のものの見方をこっそり覗く感覚があった。

「会い」に含まれるのか？  
「あった」と言えるのか？  
疑問さえ感じなくなった時を想像す  
を単純に「出会った」と認めてしま  
」と書かれているのと同様な違和感を  
離なのか、深さなのか、密度なのか、  
として、まずは自分の尺度を探ってみた  
（作者）と話したいという欲求が強い。  
」ことができた。「彼の声はテキストと  
イメージとして伝わってくる」「彼女は  
を言語化して欲しい」などと興味は出  
ものの「出会っていない（ものたりない）  
」に思っている。  
「機会」を得たいと考えた。「出会った」

佐藤卓也



### 体験者からの声

佐藤さんが出会った私に出会った。まだお互いに出会っていないお互いもいる、という楽しみ。ひとりひとりに宛てたお手紙、佐藤さんの人柄を感じる。おいしいものを共有しながら、また出会い直すのも、楽しみ。

遮光したROOM301にテントが  
張設置されている。テントの入り口  
の前には、メモ帳が置いてあり「痕  
跡を残してみてください」と記され  
ている。靴を脱いで入ると、暗くて  
何も見えない。そこに何があるのか  
わからず、手で探る。おそらく、  
さまざまな生地、布、粘土、その  
ほかなにかわからないものたち。付  
箋があることに気づいた筆者はそれ  
を剥がして貼り、なんとか痕跡を  
残した。誰にも見られていない環境  
だからか、他者の痕跡のそばに寝転  
ぶことができる空間だった。

#### 体験者からの声

闇に入った時の匂いを覚えている。あと、あるキャラクターが『そろそろ目が慣れてきた?』と言っていた。あと、最後の網から先にいけないところがすごく面白かった。闇の中に白い何かポワーンと浮いていた。あとで、ドアを半分開けた状態でテントの中を見たら（多分反則）色々なものが置いてあってびっくりした。

他者の下書きに  
触れるテント  
／ 鍾淑婷

# 明確な宛名はない、 それでも 続くはずだと祈る、 じぶん語 ／十代田詠子

新しい言語でつながるためのワークショップ  
“じぶん語”のリレー

「じぶん語とは？」  
「新しい言語」だけが「じぶん語」のことではない。他にもありませんか？  
● 例として「……じぶん語、書く、読む、絵、手紙、写真、歌う、  
……」  
● じぶん語の表現や受けが異なるものならなんでもOK

次のページも見てみよう



ブースにPCが1台、「じぶん語のリレー」とタイトルが書かれた紙が置いてある。「じぶん語の表現」「じぶん語」で、知らない誰かとリレーを試みませんか？という書き出しからはじまり、リレーをするための手順が記載されている。

Instagramにアップされている他者のじぶん語をみることで、それをみた「いまの感覚」を、じぶん語のあらわしかたで動画撮影すること、それをアップロードすること。他者の表現を受け止め、そこで生じている変化を動画に残し、明確な宛名はないけれど、続くことを期待してアップロードすること。わかりあえない他者とコミュニケーションすることへの祈りのようなものを感じた。

## 体験者からの声

これまで、バラバラだった、じぶん語がリレー状になって見る事ができたので、ぐるぐる繋がついていく感覚がよくわかる。ルールはあるけれど、物理的なバトンはなく、けれども、繋いでいこうとする気持ち？意志？のようなものを感じる。

# 身体から 発話された言葉の 置き所を巡るZINE ／ 原口さとみ

## 体験者からの声

原口さんの ZINE は冊子じゃなかった。バネみたいな ZINE。  
手にとって、バネを回したり首を傾げて覗き込んで読む。  
端的に綴られる言葉の数々が、自分の筋肉に火をつけていった。体を動かしたく  
なった。

テーブルに、三角の形で蛇腹折りされた、  
硬質な紙製の ZINE が複数置いてある。  
そこには、直筆の文章が書かれている。  
筆者が読んだものは、どれも、その言  
葉を發したであろう人物の身体感覚への  
こだわりが感じられるものだった。言葉  
をどこに、どのような形かたちで書き記  
すのか、言葉になる前の身体へのまなざ  
しと、言葉は本来立体的な可能性を持っ  
ているのだ、ということを示しているよ  
うに感じた。



# 日々の中に在る焚き火を育む、

## 遊びの火種 山田裕子

ROOM302の床に切り株が1本、その周囲に名刺くらいの大きさのカードが刺さっていたり、吊られたりしている。カードには、「他愛のない小さな遊びの種」火種」が書かれている。切り株から少し離れた机にも大量の火種が置いてあり、焚き火で薪をくべるような感覚で、遊びの火種を切り株やその周りに置くことができた。日常のなかで小さな遊びをそれぞれが実践することで育まれる共在感覚、あるいは一緒に焚き火を囲っているような感覚があるのかもしれないと感じた。

### 体験者からの声

火種は『明日の火種を考える』という火種をもらうことにした。メタ的な言及がとても気に入った。シャツの胸ポケットに入れていたが、最後に折り畳んでそれに入れた。透明な線で吊るされている上の方にある火種を読もうとしたが、読むことができなかった。ジャンプしても虫眼鏡で見ようとしても、椅子の上に乗っても無理だった。



展示会当日、伊藤さんが、HOOM302に展示されている作品を一つひとつ体験。その感覚の余韻が残っているなかで、書かれた言葉たちがテーブルに並べられている。断片として置かれた言葉たち。それを見る人が自分の文脈を照射して短歌として掴んでいく。贈りたい言葉を、手渡すのではなく、選択可能な状態で置いておくこと。言葉の託し方に惹きつけられる展示だった。

**体験者からの声**

いくつかの歌の言葉を分けてある。「愛したろうか」仮定の話（愛しただろうか）？強い意志の話（愛してやろうか）？どちらも取れるし、そもそも全く違うことなのかもしれない。さとみんによって書かれた言葉が、ぐるぐると私のお腹の中でまわる、不思議。

**断片から掴みとり、  
漂う短歌  
— 伊藤聖実**

手のしわに

運命の瞬間

遠ざかり

愛したろうか

計算

記録にのらぬ

にぎやかな

物語

ナビゲーター 南雲麻衣、和田夏実、加藤甫、スタディマネージャー 嘉原妙から、展示会を訪れたメンバーに、透明な箱

「 Ver. Time capsule」が手渡された。

「この展示会の最後には、「 Ver. Time capsule」があります。メンバーのそれぞれの思いのモノを「 Ver. Time capsule」に入れてください。後日、これまでの歩みがぎゅっとつまった「 Ver. ZINE」とあわせてお届けします。これまでのスタディ1の取り組みのなかで、さまざまな身体とコミュニケーションが生まれ落ちたり、気づきや発見を重ねていったり、心の機微を探りながら表現してきたと思います。それらの体験を宝物みたいにそっと入れるように、思い出の箱としても大事にしまっておいてくれると嬉しいです」

当日 ROOM302 に来たメンバーは、思い思いにその箱に展示物の手触りをしまう。来られなかったメンバーには、他のメンバーやナビゲーターが代わりに、手触り、におい、それぞれの感覚を詰めていった。

この日がスタディの実施日としては最終日だった。しかし、その後も、メンバーそれぞれがこのスタディで見つけた種は、育まれているようだ。その様子は、また違う機会に記録できればと思う。



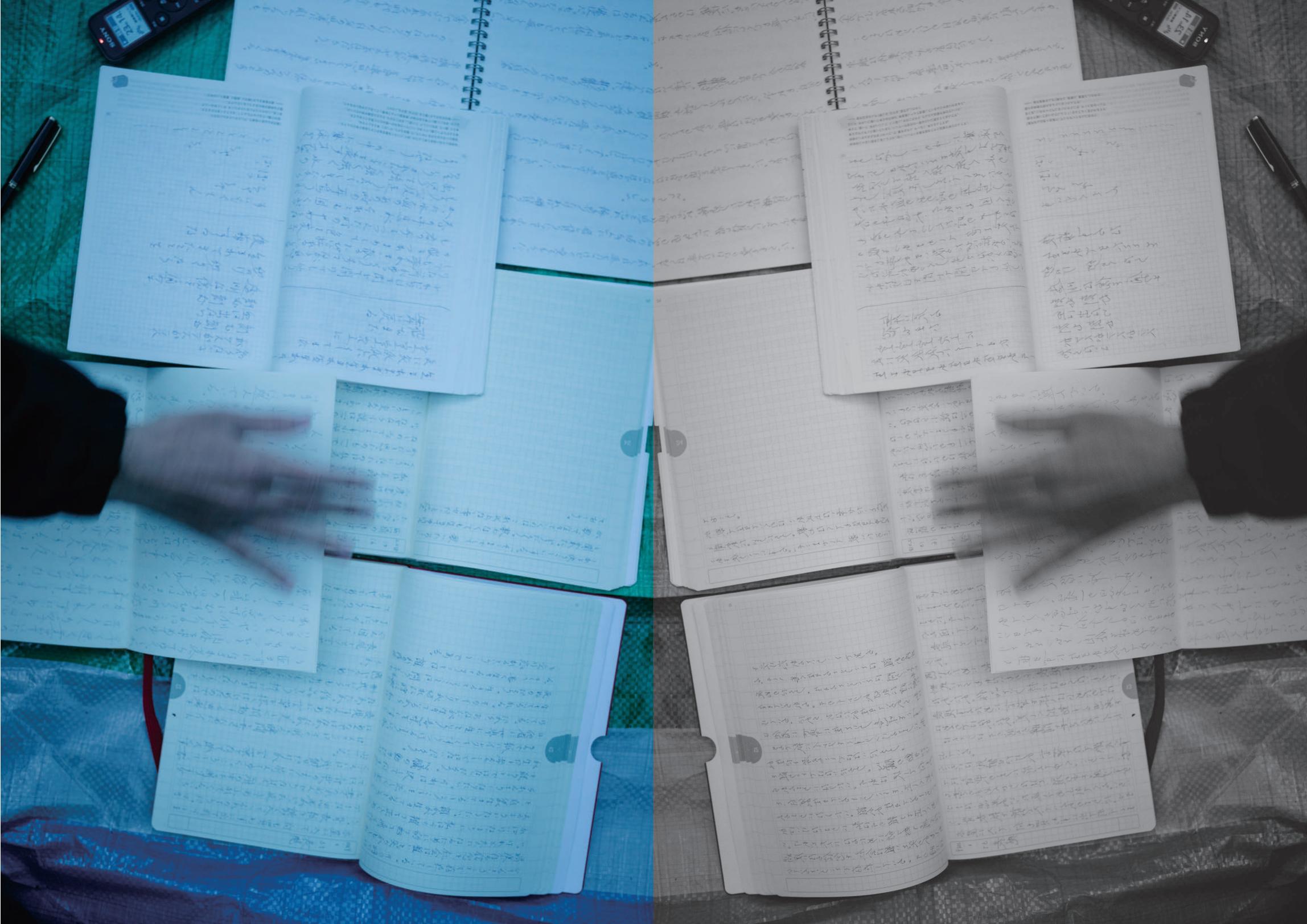
# 「共在する身体と思考を巡って」の手触り、におい、それぞれの感覚と出会い直すタイムカプセル 南雲麻衣、和田夏実、加藤甫、嘉原妙×メンバー

## 体験者からの声

ナビゲーターのみならず箱が届いたようである。ポストに入らなかったようで不在票が入っていた。何かに応えたいな。答えではなく、応え。アンサーではなく、レスポンスしたい。どこからどこまでか、箱の中身なんだろう。透明で、外から箱の中身を見ることはいくらでもできる。でも、確かにそこに形はある。輪郭がある。いつの間、その外側にいるのだろうか。それともまだ、その中身にいるのだろうか。その箱を開いた瞬間、世界がパッと透明になって、内側も外側もなくなるのかも。特別だったあの空気が、今まで普通だと思っていた空気に溶けていく気がする。スタディのメンバーと関わっていたやり方が、普段の人の関わり方にも影響している感じがある。いつの間にか、スタディで見つけた自分、スタディで呼ばれる「大塚くん」が自分の自然な姿であるようにおもえる。そこにいた自分を、あの場所だけの特別な自分にしたくない。したくないと思って、しないようにできるものではないけれど、なんとなく何かを握ったまま、すごしたい。

——いや、まだたどり着いていないかもしれない。  
ただ、一つだけわかったことは、コミュニケーションのあり方は一つだけではなく、たくさんあって、自分で選択してもいいということ。  
ほら、何か背負っていたものが、はがれ落ちたでしょう（展示会パンフレットより）





Handwritten notes in Chinese, including a section titled "THE HISTORY OF THE CHINESE" and another titled "THE HISTORY OF THE CHINESE".

Handwritten notes in Chinese, continuing the text from the adjacent notebook.

Handwritten notes in Chinese, continuing the text from the adjacent notebook.

Handwritten notes in Chinese, including a section titled "THE HISTORY OF THE CHINESE" and another titled "THE HISTORY OF THE CHINESE".

Handwritten notes in Chinese, including a section titled "THE HISTORY OF THE CHINESE" and another titled "THE HISTORY OF THE CHINESE".

Handwritten notes in Chinese, including a section titled "THE HISTORY OF THE CHINESE" and another titled "THE HISTORY OF THE CHINESE".

Handwritten notes in Chinese, including a section titled "THE HISTORY OF THE CHINESE" and another titled "THE HISTORY OF THE CHINESE".

Handwritten notes in Chinese, including a section titled "THE HISTORY OF THE CHINESE" and another titled "THE HISTORY OF THE CHINESE".

Handwritten notes in Chinese, including a section titled "THE HISTORY OF THE CHINESE" and another titled "THE HISTORY OF THE CHINESE".

Handwritten notes in Chinese, including a section titled "THE HISTORY OF THE CHINESE" and another titled "THE HISTORY OF THE CHINESE".

# 研究日誌概要

目的：参加メンバーそれぞれがスタディに参加したことで生まれているささやかな変化を記録する。

あるいは記録しづらいものを自覚する。

体験した出来事を自身の学びに還元しやすいような手段として日誌を活用する。

【研究日誌の取り組みを味わう上で大切にしたいこと】

\*いきなり誰かに伝えようとしなくてもいい

まずは自身の身体感覚、感情に素直になって書いてみる

\*テキスト、写真、イラスト、詩、手書き、音声入力など表現方法はその時に選択する

\*学びだけではなく、もやもやを記録する

\*書いたときの自分は、あくまでその時、その環境のときの自分である。  
その後考え方が変わっていてももちろんいい

\*書きたくないことは書かなくてもいい

無理やり言葉にってしまうことでこぼれてしまうこともあると思うので、

積極的な保留もすばらしいです。

一方で「まだ書きたくない」という状態の記録はできるといいかもしれません。

\*大切にしたい感覚を完璧に捉えようとせず痕跡を残すつもりで、日誌に取り組んでいただければ

※この日誌の全貌が見えるのは、このプロジェクトスタディの参加者のみです

※痕跡として残すことで、スタディが進んでいくなかでの振り返りがしやすい状態を作れたらと思っています

※今後みなさんと相談しながら、記録の一部を外に公開することも検討できればと思っています

※書き手により表記ゆれや空白などが見られるが、原文の表現を活かすためそのまま掲載している。

加藤 甫

南雲 麻衣

和田 夏実

木村 和博

大塚 拓海

伊藤 聖実

佐藤 卓也

鍾 淑婷

十代田 詠子

原口 さとみ

山田 裕子

嘉原 妙

品川区障害児者支援施設で活動をはじめ1年半になります。  
知的障害のメンバーさんがほとんどで、彼らの意思は言葉では共有  
されないことが多く、そのほとんどは行動によって提示されます。  
僕らが行ったアクションに対して、十人十色のリアクションを観察し  
て、次に何をするか、次回何をするかを考えています。  
10月からは、メンバーさんが撮る写真館開業に向けて練習をし  
ます。

12月に行われるアールブリュッドの展覧会に、パフォーマンスとして  
写真館の営業をおこなうことが目標。ゆくゆくは日常的に営業でき  
ないか、なんて妄想も。

写真館と言っても、シャッターを押すこと以外は全てアシスタントの  
僕がやります。アングルやライティング、三脚の設置、露出を合わせ  
ることまで。「それでメンバーさんが撮ってると言えるのか？」という  
声が聞こえてきそうですが、だから「写真館」なのです。「写真館」  
というフォーマットを引用するからこそ、写真館らしさの個性やクオ  
リティはどうでもいいのです。どうでもいいから僕が作っちゃう。お  
客さんがカメラの前に立ち、カメラを構えるメンバーさんと対峙す  
る。メンバーさん独特の間の取り方、タイミングの取り方で写真を撮  
られる体験そのものを、楽しんでもらう。そんな写真館の開業を目指  
しています。

と、壮大なプロジェクトのように聞こえますが、このあいだの水曜日  
に、久しぶりに違うことしますかーとなってやった活動から動き始め  
た新プロジェクト。

こちらの思い通りには動かないみなさんなので、これがどうなるかは  
わかりません。

けれど、1年半の間「撮られる」ということをやってきて、新たな展開  
を見せているこのワークに可能性を感じています。

#### 【加藤家のカタコト勢力】

今朝の事。まもなく2歳になる娘とダウン症の長男、さくが連れ立ってキッチンへやってきた。

ふたりとも明瞭ではない発音で「すぶん」と言っている。

僕はコーヒーを淹れていたので、ミルクを混ぜる係をかって出たのかと思い、それ用のスプーンを渡すと突き返された。

さくが「おー」と言って手を大きく広げている。

何用だろう？と思いつつ、カレーを食べる大きいスプーンを渡すと違うという。娘も何か言っているが聞き取れない。

けれどそこに必死さはなく、兄頼み。

さくがおもむろに引き出しに手をつき込み、娘の普段あまり使っていないほうのスプーンを取り、娘に渡した。

彼女は満足げにキッチンを後にし、その半歩後ろに付き添うさく。

さくは何でわかったんだろう。



撮影中、僕は息を止めています。

うそです。けど、感覚的には近いものがあります。

さっきみなさんが今日撮ってくれた写真にコメントをかいているときもそんな感じで、  
終わった時に「ぶはっ」と言わないけれど、そんな感じになります。

ボクシングのスパリングにも近いのかなあ。打つべし打つべし打つべし。

やったことないけど。

意識をどのレベルに設定するか。

これは撮影においてとても重要です。最初に深く設定しすぎると、迷子になります。

撮影現場では、常に迷子にならないよう工夫をしています。

まずは全体の地図を作って、そこからだんだんなかに入っていく。

中に入るのは危険が伴います。そんな時にパートナーがいると、意識の深いところまでいっても連れ戻  
してくれます。

ー僕たちは出会ったのかー

前回のワークからしばらくたってふと浮かんだその問いが、

頭から離れなくなってしまいました。

『出会う』と言う言葉を辞書で引くと『偶然』という単語がでてきて少し意外でした。

たしかに『会う』と『出会う』の違いは、

偶然が大切な要素のひとつなのかもしれない。

そう考えていくと、自分の普段の仕事は、この『出会い』をしっかりと拾えたかどうか、

が重要だし、この『出会い』を拾うための準備をえんえんとしているような気がします。大塚くんが「あ  
っ」と思って、GoogleMapで行った現地へ赴く。

その「あっ」こそが『出会い』で、そこに行動が伴うとマジックアワーというミラクルを引き寄せる。

01のワークで、僕は「僕たちは出会ったのか」という問いに出会いました。

02のワークで、「意識と無意識について」考えさせられています。

まだうまくまとまらないけど、普段の自分の活動中にある問いであることは間違いないさそうです。

そしてそこで「出会う」というキーワードが重要な要素になりそう。





さっそく大塚さんに触発されて、印画紙の束が入った箱を開けた。やはり印画紙は美しい。印画紙と薬品の匂い。15年前の海の写真が出てきた。

梅雨直前の曇天がつづく時期、日の出直前からの1時間が好きで、2005年は湘南の海に毎朝通っていた。

波打ち際を見るとたくさんの海鳥が横たわっていた。

突然現れた大量の死に茫然とした。

けれどその「茫然」は、その「死」に向けられたものではなくて、物理的にカメラを持っている主体としての自分が、その「死」に対してどう向き合うのか、を問われていると思い込んだ。自分勝手な茫然。それくらい自意識過剰な時期だった。

あそこで目を背けていたら、今頃カメラを手にしていなかったかもしれない。しばらく立ち尽くしていた。ゆっくりと、何度も立ち止まりながら近づいて、二眼レフで静かにシャッターを切った。



今週我が家は「工事用ロープ」に出会いました。

木材を買いに行ったホームセンターで次男が見つけてきて、これが欲しい、と。なんとなくおもしろそうなので買って帰りました。その日の夜、リビングでインスタレーションが展開されました。これは川俣正展を見せに行かねばなるまい。



ワークショップ終了後、久しぶりにダンサーの友達と呑んだ。身体を軸にしている人の話し方は、普段身体の可動域が広いためか、身振り付きで話してくれるので言葉以外の補助的役割にもなってわかりやすい。あと、コロナのあとの仕事についてや、ダンサーとして踊れる機会が減ったこと、いろんな悩みを痛み分けして、ダンサーの共有する身体は豊かだといつも思う。

第一回目のワークショップを経て「私たちは出会ったんだろうか？」と加藤さんの問いが私のなかでヒットして、出会うって簡単にいえば人と人が会うことだけでも、そこだけじゃないはず！と同じく和田さんもヒットして「出会う」ことを問い直してみるというワークが生まれた。

一人一人の出会いのお話では、佐藤さんに会いに行くひとが多いという話をきいて、会えなかった時間で誰を思うか考えたときに、佐藤さんを思い浮かべた人がたくさんいたんだと微笑ましくなった。私の友人の話では、コロナ感染をおそれて友人でさえも会うことを恐れる人もいるとのこと。この社会情勢のなかで、会ってもいい？って聞くことの勇気って今までなかったのに、こんなにも考えちゃうとその顔は寂しそうでした。私は、その友人の顔が忘れられない。



おじさんのせなかと船のせなかに、  
仲の良さを感じます (大塚くん)

2020.09.24

同僚と職場のボランティアの方に「南雲さんみたいな背中をしている人を見かけて、思わず南雲さん?!と声をかけそうになった」と教えてくれた。私みたいな背中…どんな背中かなと意識してみる。そういえば目は後ろにないだった。前の世界しか見ていない目で鏡をみてもなんか違う気がする。でも、私みたいな背中というのがそっと嬉しくて、この言葉をしおりにしたい。

2020.09.27

知り合いが3331で手話レクチャーの講師をしている。(たえさんはモデレーター)

そのテクニカル担当の手伝いで来ている〇〇(丸メガネ)のT氏は、象の鼻のイベントがあれば必ず手伝いに来ている常連スタッフさん(アート作品も作ってる)

「そういえば、手話レクチャーのさ、テクニカルの補助的なこと手伝ってるのだけどさ…」[え!3331だよ?][それよー]暇があれば「手話って、言語だってのは頭ではわかってたけど、あのレクチャーでそばで聞いてから、すごく実感してきたわけださ…あ、呼ばれた」と話し始めたと思ったら、お呼ばれで現場に戻るT氏。彼は話したいことのでいっばいだった。「映画の『メッセージ』を思い出したんだよね。手話もその次元の話に近いような気がする」となってナイスチョイスなT氏。「CLってドラゴンボールの漫画の切り取り方に似てるんだよね」と盛り上がってイベントの疲れが嘘のように消えていった。ただの手話講座と思っていたら目から鱗でスタッフ側だけど、ちゃんと当事者の視点で専門的にレクチャーを受けている気分で毎回楽しみだと言った。「また話そう!」と現場に戻る。最高な日。

▼ 文体も、身体の一つと考えると深いですよと勝手に思います。  
文章を書くことは、文体で踊ることか? (大塚くん)

職場から横浜駅に行くバス停の

名前に四季がある。

花咲橋、紅葉坂、雪見町、夏はなんだっけ。

昨日は、他者というどことなく遠いものに、距離を保ったまま、良い具合で剥がれた感じがした。

近づけたとかそういうことでなく。



2021.11.06

本を買った。前から興味があって、Amazonの買い物かごにずっと入れっぱなしだった本。タイトル、「地球にちりばめられて」まだ開いたばかりの開きかけの本は家にある筆筒のにおいがする。

ストーリーは、ある国がなくなって帰れなくなった女性が、自分の国の言語を探す旅に出かけつつ、自分の言語を生み出していく。その独自の言語<バンスカ>はだいたいどこの国(欧州あたり?)でも通じるらしい。

それを「バンスカはわたしの言語、わたしの真剣勝負、わたしそのもの。」という台詞があるらしく(先に作者のロングインタビューを読んだ)このスタディに近いなあと思いつつ開きかけの匂いを大きく吸い込んだ。「雪の練習生」もおすすめ。サーカスの花形だった白熊が怪我をして引退し、事務の仕事を始め、自伝を書くようになる話。読み終えた時、「これ…マルシア・ガルケス『百年の孤独』の白熊さんバージョンでは?」と思って可笑しくなりました。設定がユニークだな、読みやすそう!って舐めておりました…思いのほかスケールがでかくて途中で白熊のイメージが消えてしまっ読むのを諦めかけつつ最後まで読み終えたやつです。





犬がスヤスヤと寝ていて、幸せそうで、いい時間

昨日のワークを12日にリハーサルした時、加藤さんにいわれた「僕たちは本当に出会ったのか」という言葉が離れず、、、でも1週間で答えも出せないまま、出会いというキーワードをちりばめつつ(ちょっと無理もありつつ)、みんな出会えたんでしょうか?どうなんだろう。

「出会う」というキーワードがでてきたとき、実のところ私はとてもどきりとしました。いつもインタープリターといいながら、その人の世界を受け取る方法を模索してきて、つまりそれは「憑依する」というような飛び込むみたいな方法を探っていて、自分を無にしようとしてみたり、いろんな経験をすることで受け取ろうとすることを前提にしていたけれど、「出会う」はそれとはまた全然違う。ある程度、「自分」を存在させることを前提にすること自体がとっても怖くて、どきり、、、としてしまったのです。

「自分」ってなんだろう、と思ういつも難しいなと思います。なれないからこそというと、空気や大気や星のような恒久の歴史に私は憧れていて、できればその一部になりたい。祖父母と両親と私、常に3世代くらいしか同時代に存在できないとして、その超個人的な消えてしまうかもしれない歴史を紡ぐことに興味があって、ただその糸になりたい、、、(でもカラフルでポップなものが好きでお喋りではある)

「出会い」を考えた時に、出会った時に「私」が必要じゃん、というシンプルな状況に戸惑って、いや、「私」は全然歴然としていることも認識はしているんだけど、でもえっと、、、ってなりました。出会う、、、まだまだまだまだ答えはできません、、、。

大塚くんの少しずつ出会う挨拶や山田さんの異星人的な交信、木村くんの至近距離。

すうちゃんの白目は、はじめてやりました。顔をまじまじとみながら体操もしたことなかったかも。

みんなの思い出し方、伊藤さんの「承る」、なかなか体操はシンプルに役に立ちそう。

(みんなですくっと行進したら、その場の空気が変わりそうな気がする)

そういえば、未来はあっち!な感じがするという話で、手話では今が下に向かう矢印、未来が前に向かう矢印、過去が後ろに向かう矢印で明日やら昔々、やいろいろな時間のことを表します。目が前に付いているからかもしれないけど、自分の前に広がるのが全て未来だと思うとちょっとわくわくします。あと、今が下なのもすうっと立てる感じがする。

意識の写真たちは大塚くんの世界にやられて、原口さんの痕跡にもやられました。その空間だったのか〜!佐藤さんの気持ち悪さにも繋がるかもしれないけれど、zoomでカメラをつなぐと、繋がった!というよりそれぞれの四角い箱の中から交信している感じがあって、パラレルワールドの中で必死に繋がろうとしているような気になります。

備忘録的に戒めを込めて。

今朝のこと。

今日とお腹が痛くて、あと制作がどうにも詰まってて、作業をはやくしたかったのに同居人が部屋を綺麗にしようとか着替えるまで待って、とかで、頭があれもこれもどれも作らなきゃ、間に合わない、、、と私は容量越えしていて、何を喋っていたのかすっかりわからないまま、カフェに向かって。相手は頭の中をだだ漏れにして悩みを相談してくれて、でもちゃんと聴きもせず、お腹痛いなど思ったまま「アイデア出してみたら?いつも考える時一個のことでぐるぐるしてる気がする」みたいなことを(多分もっとやな感じで)言ってしまった。その人は敏感で動物みたいな生き物なので、昨日たくさん考えた上で話してるのにすごく嫌な感じ!とって、自転車でどこかにビューンと行ってしまった。(逃走、、、) そのまま弁解のチャンスもなく今に至る、のだけれど。言葉の暴力性みたいなものを嫌だなと思うのに、偏頭痛やお腹が痛い時、いらいらしてるときにいつもより一層批評的になってしまって、そんなみんな嫌だろうになあと思うにも関わらず、正しさを振りかざしてしまったりや批評的な態度をしてしまう、、、(あと家族やら距離が近い人にほどその癖をぼろぼろみせてしまう、そして帰り道やそのあと2週間ほどコンクリートに頭をぶつきたいくらいに自己嫌悪で落ち込む、、、)仕事やおじいちゃんとは全肯定モードになろうとスイッチできるのに、どちらも大切なのになんなんだろう。容量越えしても菩薩。になりたい(願望)

あと大学の修士までスポーツマンのような生活をしていて、ホルモンとはば無縁だったのだけれど、最近ではホルモンをただす薬を飲んでいて、毎月使い物にならない身体にびびりしてしまう。漢方かしら、、、良い方法探したいなあ。この文章も言い訳みても嫌だなあ、全てだめだめ、、、今日はどんよりです。

簡単なのに美味しい(ズッキーニのナムル)

レンジでチンするだけでナムル!冷たいナムル、いろんな野菜で永遠に美味しい。感情とご飯、美味しいって大事、、、昔、きつねが美味しいおでんを作りたくて怒ってる人からしを練ってもらってからくなくなるっていろんな人に練ってもらいに行く絵本読んだなあって思い出してえいやと調べてたらキツネじゃなくてネズミだった

ICCのHIVEというアーカイブにはいろんな作家のインタビューやトークが収蔵されているのだけれど(磯崎新×荒川修作とか)茂木健一郎さんと高橋悠治さんのこのトークがとってもシュールながらよくて、高橋の「ぼくが質問するたびに、まるであなたの中にすでに答えがあるかのように話始めるのはなぜですか?」って言葉に刺されます。名付けて所有してしまわないでください、と続けるところがまた良い。くっきり綺麗な言葉でわかったことにしちゃわないようにしたい、けれど、発見をいろんな人と一緒に楽しみたい、、ことは言葉コトバ

撮影会は、原口さんと一緒に撮って、私たちはお仕事柄?メディア慣れしつつ、なんというか自然と、インタビューのように、過去のその人の表情がみえたらいいなと思ったりしながら、昔を遡るように原口さんの小学時代、中学時代、高校時代と一緒に写真を撮っていった。

高校時代のコンテンポラリーダンスをしていた時の身体が秀逸で、仕草や動きかた、(あと原口さんはzoomでみたときよりちいさい!とびっくりしつつ)その身体から生まれるリズムや動きがとってもキュートで、惚れ惚れとしてしまった。私は職業柄、その人らしさに近づけた時にひゅーっとうっとりしてしまうのだけれど、原口さんからうみだされる言葉もたしかにさとみさんで、でも同時に身体の方が雄弁な瞬間がたくさんあるんだろうなとも思った。(これからのゲスト回で掘り下げるぞーってきもち)

私の撮影タイムでは、さとみさんからめちゃうやくちや鋭くて強い質問がきて、うはーわかっているなー思いつつ。自分のやってきたことやこれから考えていきたいこと、を考えなきゃいけないんだなあとはっとしながらそのあとプライベートな話になって、さとみさんの心の中のもののできて、私も最近のことが重なって、こ、これは飲みたい!と思いつつながら名残惜しくも退散、、、

わかりあえなさにひどく傷つってしまうのも、わかりたいのって願うのも、その人だからであることは俯瞰でみたら嬉しいこと?な気がしつつ。友人の歌人が、快感図鑑というエッセイ集の中で、泉のように溢れてた好きをたくさんたくさんあふれさせてたときから、頑張ってがんばったのに、その泉がもうからっからになるくらい、好きが出尽くした(もう努力じゃ沸かない、、)ときのもうごめん!っていう気持ちよさ。とかいてて、最近のわたしはそれもあって、もう全然わからん!みたいななんというかどうかどうしようもなさ。でも昨日(だめだちゃんと時系列でまとめるはずだったのに飛びますが)、大塚くんのあの文字、ノートをみてたらいつもみていたり話したりしているその人じゃないモードや身体が出てくることもあるのかなと思ってちょっとゆっくり一緒に野菜でも取りにいこうかなと思いました。

かきたいことまだまだたくさんあるけどまたゆっくり

ゆっくりね。

今日と明日は横浜でダンサーさんたちの群舞を言葉で紡ぐワークがあって、今月は頭の片隅にどうしよう〜っという悩みを抱えながらずっと過ごしていて、それはなんていうかとても美しいからで、みせるということを前提として鍛え上げられた美しい身体での表現に対して、ナラティブで答える(には力量がたらず)、何かの道具で身体の想像をさせるのも暴力的な気もして(コンタクトインプロとかならいいのに!)、ずーっと困ったなあ、と困っていたのですが、山田さんの実がずっとヒントみたいに手の中であって、今朝お布団に包まりながら、こうしてみよう。がみつかった、あーみつかったー!って気持ち。直前までみつからなくて、若干の遅刻気味ですが、楽しみになってきました。またみなさまと話したい。

コートのポケットにずっと山田さんからのユーカリの実をしのばせている。考えたい時、思いつかない時、ぼんやりどうしようと思ってる時、硬い実がいろんなことを教えてくれる。おまじないですね、今年も終わりますね

大塚さんにわかりやすく感化されて、自分の思考やメモについて考えることが多くなった。私は仕事の時になんとなくそれってどうなの？そもそもなんなの？みたいに思うと絵を描いていることがよくあって、それによってこういうことなんじゃないか〜？と思えるときスッカリしてスケジュールを立てたりバキバキ動けたりする。そのときはあんまり言葉で考えている感覚はなく、ぼんやりとした違和感とか関係性、その人の言葉を本当にやりたいことはなんだろう？と思いながら考えていて、描きながらみつけていくというような感じがする。手話通訳をしているときや手話で話しているとき、目の前にある空気の中に答えのようなものがふんわりとあってそれを手でつかむような感覚がある時があって、それは言い表した！というよりは絡まったぼんやりとした形のないものを手で掴んでほどいたり編みなおしたりしているような感覚で、言葉を手話にしている時の方が断然好きなのは、その感じに近い、のかななんてことをぼんやりと考えてます、山手線です

上のチェックメモは違う人の、下の絵が和田のでたくさんひよこひよこした人達が出てくるんだけど、それを友達に「なっちゃん頭に住む謎小人」と呼んでくれる

和田の手話もグラフィックレコーディングに近いという気づき。

話している時の所作も独特だね。

年間何十人も話している人を撮るけど、あまり見たことない所作。

なんだろう、、、「消化酵素」という言葉が思い浮かびました。

絵を描くことで自分の中に取り入れてから、通訳することなのかな？

僕は言葉やペン、ノートは体の器官という例えが合ってると思う。

何かあったら書くことでファンクション入れて、自分の中に取り込んでます。

Speculative Urban Think Tank - the New Normal

11月16日

- ✓ ① 森ビル展示 パネル情報整理 → エッセイ
- ✓ ② 森ビル展示 パネル情報整理 → ステートメント → エッセイ
- ✓ ③ ニッポン放送 口角所整理 → place list 作成
- ④ 12月8日 PR内容整理
- ⑤ ニッポン放送 脚本 + ステートメント

12/8 - 1/3

placy  
○○○○  
○○○○  
○○○○  
what?

20 max  
mizu ki  
me  
placy PR team

text

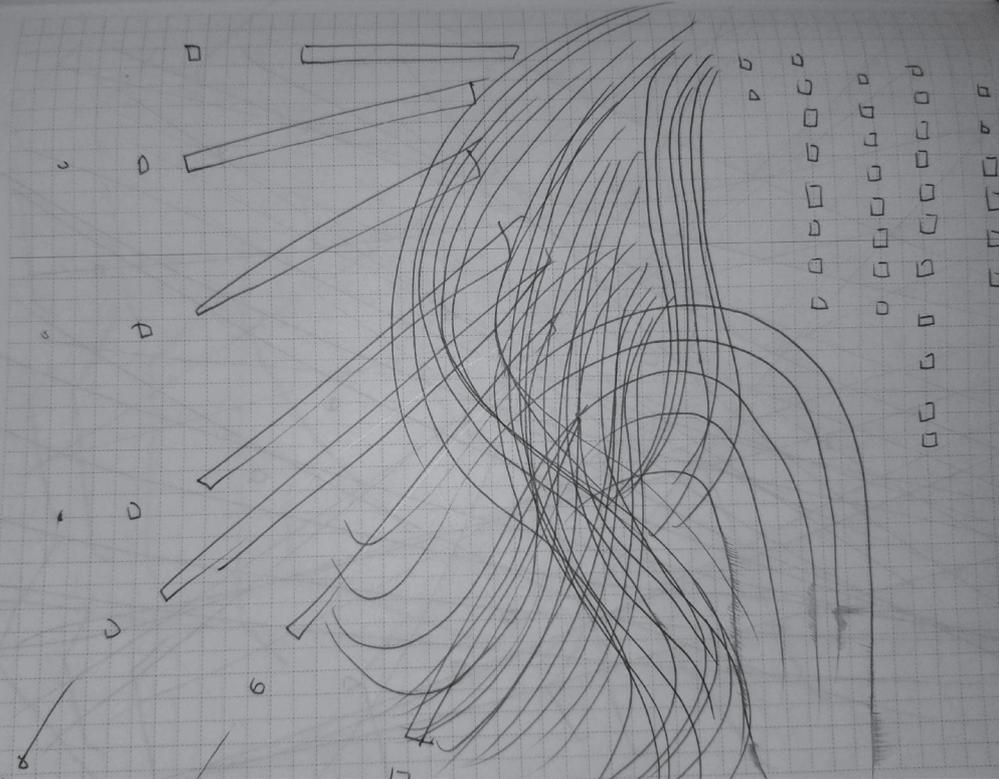
placy

placy

placy 2.0  
[chaos]

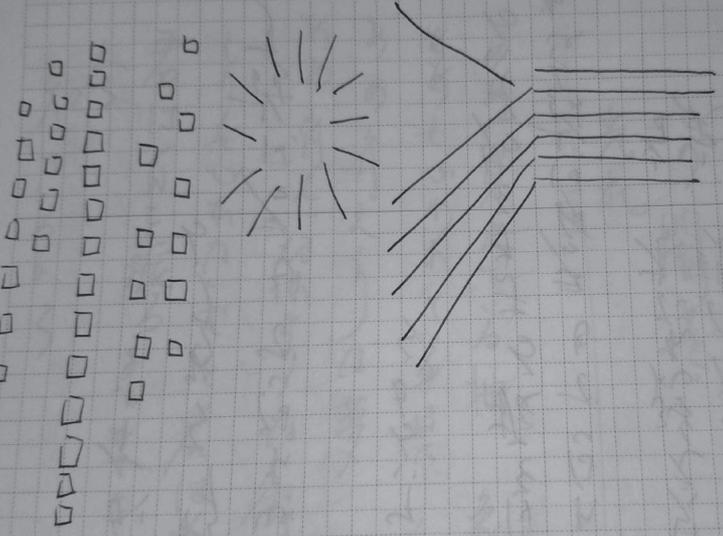
sns  
google  
review  
organism

placy 1.0 = 文化に適合。  
回路を伴って。  
文化の構造を記す。



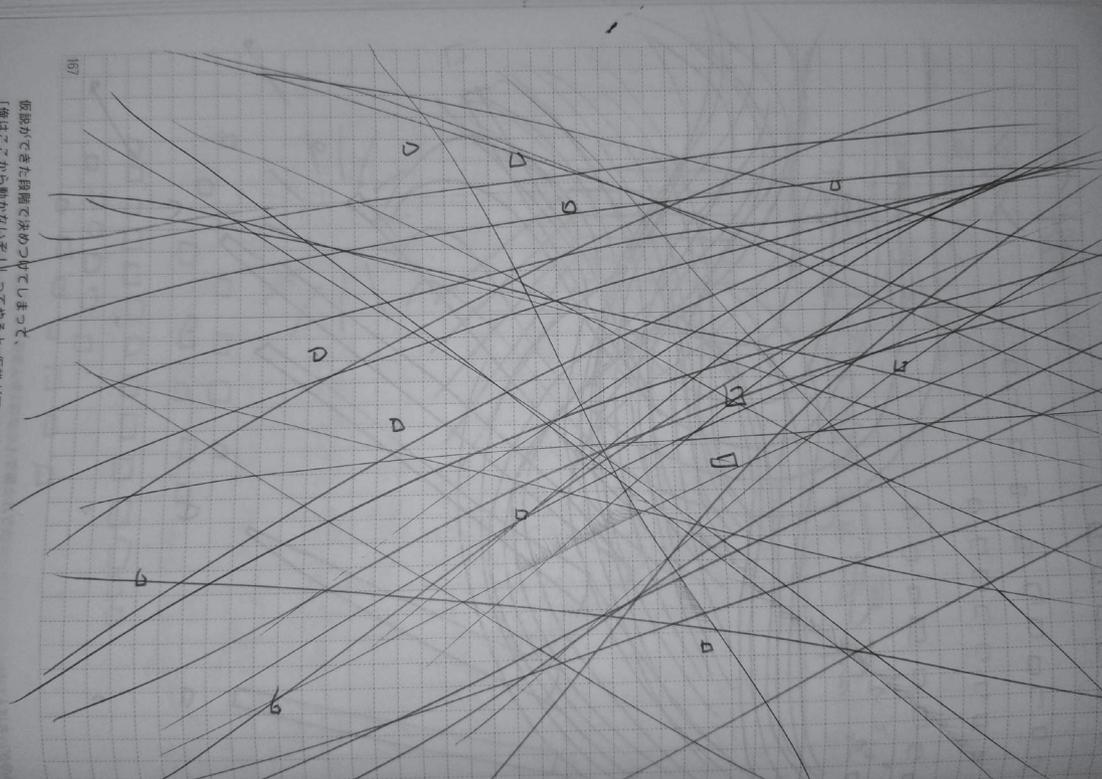
書きにくいのがいい、  
書きすぎるための。  
ただよまた、書きすぎるのもためです。  
書きにくいと自分によくない、  
別冊がない、おもしろくない。  
——前川さんが「勝手、いつか誰かの仕事なら、10分」

愛人  
愛人  
愛人  
朝になって全奇物語だ。

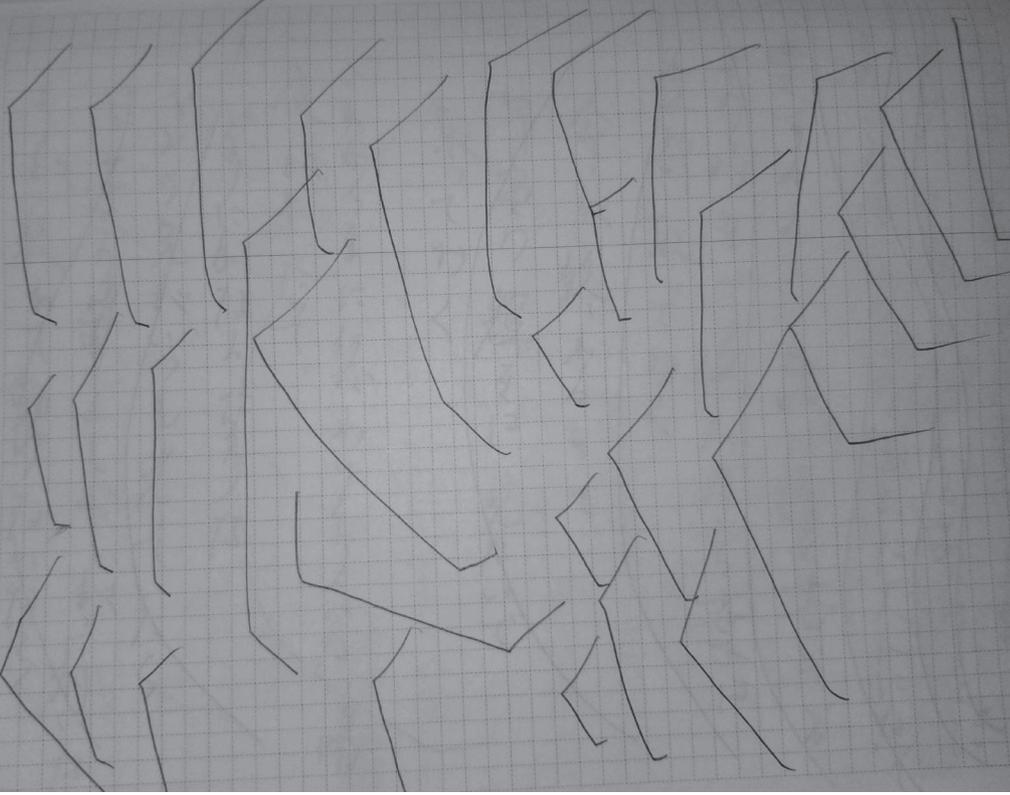


165  
赤井さんが「ピエロ」を見ては、「さんまのまんま」のセットで描かれてた  
「おちつけ」って文字をおもしろいなあと思って、有名な書道の方に書いてもらって、  
それを描き、おちつけ「トーキョー」も描いた。

とっさに過去のノートを引っ張り出して、こういうものを書いた(描いた?) ことが思い出された。  
サカナクションのアルバム834.194のいんすとろめんたる? 曲を聞きながら書いた。  
いんすとろめんたるを詩にすると、こんなイメージになる。これってことばのいんすとろめんたる?



167  
仮設ができた段階で決めつけてしまって、  
「俺はここから動かさない」ってやるよ、仮設が間違っているかもしれませんよね。  
自分が立てているのは、あくまで仮設です。



166  
仮設のままでいい。  
仮に出るだけで、もう仮の目的はほとんど達成されている。  
わざわざ何かを持ち帰ろうとしなくていいのだ。  
自分の時間をその場所に置き、その場所。  
すつと流れてきた時間と交換する。ただ、それだけでいい。

9/9のきむら【きょうの木村日誌】

9月11日で会社を退職して、フリーランスになるのですが、今週は有給期間なのですが、普通に会社の原稿編集やらして自分の詰めの甘さがかかりしつ、編集して言葉を整えていくことにうざりしつ、でもまあ楽しさもあつ、こうやって一文が長い文章を書いて発散することで目の前の原稿へのモチベーションをあげることができるので、まあいいやって思いつ、戯曲も書きたいし、お散歩もいきたいし、サウナもいきたいので、原稿やりきるぞ、あ、豚汁のにおいがするお腹減った

【20200920】

ねむい。電車移動、各駅停車に揺られて寝て、家についてソファで、寝ていま。みなさんの顔をみて、どきどきした。「最近出会ったもの」という問いかけがすごく味わい深い。自分が出会ったという感覚を持つ瞬間ってどんなときか？「ハームリダクション」という知らなかったけれど大切にしたい言葉を聞いた時、出会った感覚があった。それは、すれ違いじゃなくて出会った。山田さんが紹介してくれた「ファインダーとまつげの間まで薫風」を聞いた時も出会った感がある。意識しない出会いだとzoomで自分の顔と出会ってしまっていたなあ。大塚さんの新しい挨拶をみて、おなじ動作を繰り返すのではなく、ちょっとづつ変化していくことや朴訥とした質感があるって思った。なにげなくやっている普段の挨拶もきつとちょっとした変化や質感の違いあるんだらうなあ。意識についてのワークで、原口さんの撮影した写真、生活のにおい、人の痕跡を感じて、ああ引き付けられるよなあって思った。まだねむい。企画立てなきゃ、まだやらなければいけない原稿がある、でも今日はいい日だったので風呂にとりあえず入る。サウナ行きたい

やっぱり太田省吾氏の『プロセス』や『舞台の水』  
「なにかもなくしてみる」を  
読むの好きすぎて  
汗かいてきたけど、寝よう

20201003 木村

やはり、ねむい、低気圧が来てたこともあってなかなか眠気に勝てない。帰り道の電車の中で書いている。さとうさんとペアで撮る撮られる。「撮るのも撮られるのもあまり好きじゃない」と共有してくれたさとうさん。

自分の中でできるだけ負荷をかけないように、撮りたいという気持ちが先行していた。撮られている感、木村的にはじっと一方的にみられている感を与えないように撮影したいと思って、さとうさんが撮られる準備を整える前にシャッターを押した。すると、驚いた様子もありながら笑っているような表情をしてくださったので、嬉しくなってお喋りしながら連写した。

写真に写った表情がほんとに笑っているのには、わからないけれど、撮影する側としては、お互いに何かを探り合ってしまう前の時間を大切にできた気がしている。一方で相手のタイミングを待たずにシャッターを押すことの怖さもある。シャッター押す前にさとうさんと「とりえず撮ってみましょう」と雑談する時間がなければ、いきなりシャッター押す勇気はなかったかも。

撮影される側としては、照れた。照れた状態に対し、さとうさんも微笑んでくださったので「まあ、照れていていっか」と思いながら正直に照れて困っていられた感覚がある。

ふと思ったのは、さとうさんと木村だけではなく、加藤さんがいるからこそその安心感もあるということ。この回が終わる直前に、フォトグラファーの川島さんと木村の二人きりでの撮影になったときは「あ、二人きりなんだ」という感覚があった。これまで関係値があったので、いやな緊張や沈黙などまったくなかったけれど、それでも3人か2人かでその場の空気が違うのだと実感した。ファインダーをのぞかず、手元でボタンを押してしまったので、ファインダーをのぞきながら撮ることで見えるものも知りたい。

本気で笑ってました。撮られるとか意識する前に「やられた」しかなかった。そしたらもう笑いしかなかった。木村さんは照れてたのか。同じことをされると構えていたのかと思ってました。僕は加藤さんの存在をあまり感じませんでした。連続でシャッターは切れないなど教えて頂いていたのは覚えています、木村さんしか見えてなかったな一



おもしろいですね…。  
振り返ってみると、僕が撮る側でシャッター押していた瞬間は、さとうさんと二人の空間の感覚があった気がします。その後「メディアの人は〜」の発話から、加藤さんの存在を改めて感じて、でも違和感というよりは一緒にあの場を共有できた感覚があったなあと思い出しました



20201031 木村

ああ、明日から11月だああああああああ、と思いながら風呂上りに振り返る。

11時に代々木公園、ゆったりと集まって、歩き出して、敷物を引く

和田さんが持ってきた黄色の紐でインターネットになるみなさんを眺める

ほどいたりつながったり、絡まったり、引っ張られたり、移動したり

つながりの多い人と少ない人、糸の動きの影響の違い

抱僕奥田さんの「1本の太い糸より100本の細い糸」を思い出したり

ふたりひとくみで、スポンジの真ん中を探す

多人数でつながったり、移動したり、間にやわらかいスポンジが入った状態で相手の力具合を感じる

落とさないように相手に動きを要望するというよりは、相手の動きを感じている時間が楽しかった

そしてuber頼んで、もやもや共有時間

目をつぶって、動く、触る、自分が持っている感覚を研ぎ澄ましていく時間

仕事ってなんだろうから、発注の話、矛盾した気持ち、自分が納得できる給与の設定、いろんな話に広がる

先天的な夢と後天的な夢、衝動と名前をつけてよべるもの、そのままを伝えようとする通訳者のあり方

なに言っているのかわからないけれど伝わる言語への興味と忙しさ、結婚と人間関係と理想と矛盾と

受信力を高める、自分の笑顔が苦手から、強みになっていく

そして、身体にしようじきになってジョギング、体がゆるむ

深いところで出会いたい、書くこと、ノートに書くという身体表現

内容ではなくて、書いてきたということを語ること

なんとなく開く飲み会なんかより1時間の稽古の方が他者とつながる感覚があるって演劇の稽古場でずっと

思っていたのですが、今日の時間は、そういう意味で、すごく濃密な時間でした。必死にメモしている木村がそ

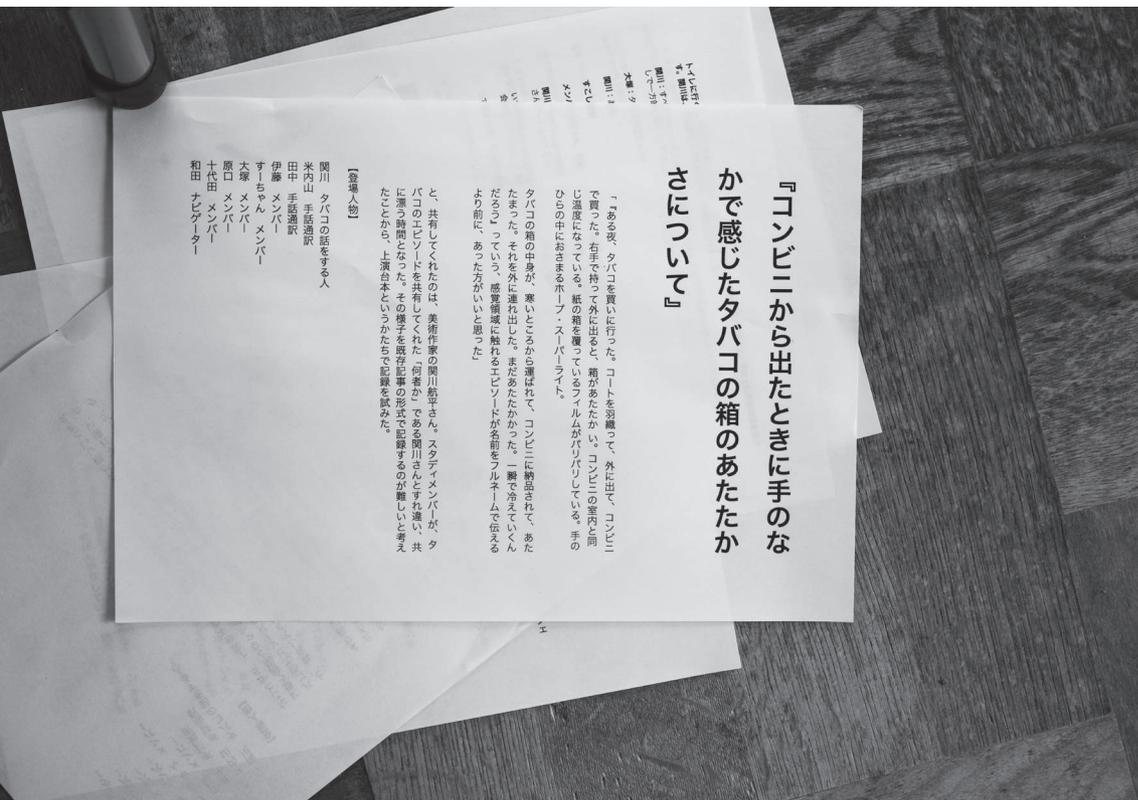
うだったから、あの場にいるみなさんはいろんなつながり、出逢い直す瞬間があったのかもしれない。みんな

の日記読みたいなー、語りたくなってきたときに語ることって尊いな、あーなんかとっても好きな人たちだなーとほ

れっぽい木村は思ったのでした

帰り道おつかさんが木村のPCに貼ってあったサカナクションのシールに気づいたのも驚いた

書いていたら11月になっていた



出会うじゃなくて、巡る状態を健やかに保つ出会うじゃなくて、巡る状態を健やかに保つ

いや巡る状態で在る

20201128 木村

うーん、今日は共に在る感覚が最初薄めだった。

途中、山田さんの洗濯物が飛ばされたと共有してもらった後は、あ、いま、同じ時間過ごしてるなど思った。でもきつとなんかこのワークを同じ時間にやってみることに握りなさが身体的にあってそわそわして、思わずみんなどんなこと感じてたのか考えていたのかを少しでいいから聞いてから終わりたいと思ったのでした。意味を求めてすぎたのかもしれない。

分岐点、フィクションといった素材を得て、どう研究してみるか、遊んでみるかよりも、「大切な写真」という事実フィクション的にテキストでとりあえず名前をつけてみようとした。とりあえず大切な写真の掛け合わせが、このままだと、結構こわいことになるとおもいやめて、いろんな人がカバーしているキンキの『愛のかたまり』を聞いて、写真を眺めた。

いいもやもや感が残っているので考える。あらためて研究日誌の概要も読み返そ野望とおきざりにできないわからなさについて

最近「うたよみん」というアプリで、  
短歌でも俳句でも台詞でもない何かを綴るのがたのしい

よるこびは身体のどこから生じるのか。その間いがあることで、  
自分がよるこびを感じていた瞬間を探して、そのときの身体感覚  
を呼び戻そうとする。そこを壊さないように言葉を送って、置いて  
みる。単語だけではなく、単語どうしを橋のように、建物のよう  
に、単語ごとの質と重さをふまえて重ねる。

その引き出しをあけやすくするとか、感度を引き上げるためにな  
にができるのか考える。そこには魔法みたいな視点とかなくて、  
地道に痕跡を残しておくことが大事なのではないか。

積み重ね方も短歌の基礎知識、劇作の考え方、好きな本、曲の  
言葉リズムとか、触れてきたものから引き出せる。きっとこのスタ  
ディの経験も痕跡として残せば、積み重ねの糧になる。

自分の身体感覚とか違和感とかを置き去りにしない状態を維持  
するのは忙しくなるとむずい。アーティストと呼ばれる人たちは、  
その状態をどうにか、あるいは当たり前のように大切にできている  
のでは。

自分もフリーになって、劇作家・演出家の肩書を離さないのは、そ  
こを1番大切にしたいからだなー。

アネットの作品を観て。だれがなにを考えたのか知りたいでは  
なくて、自分がなにを感じたのか言葉にしたいと思った。遠回し  
に、自分なりに、安心できる土台から離れて受け取ることがした  
い。

わかりたいが、わかったつもりになっていることとか。わからない  
ことへの解像度が低いまま、自分勝手におそれを感じて離れた  
りすることとか。恐さもあるけど、でもなんか格好いいし、面白い  
し、惹きつけられるし。

「あなたはいつでも征服したがり」

って言葉がすごく、ドキッとした。個と個で出会うことの妨げを自  
分で作っていないか。

舞台の登場人物として、そこにいた南雲さんに出会って、ダンスの  
WS一緒に受けに行きたいって思った。まったくおどれないけど。

#### 【本日の火種】

10. 7秒かけて、まばたきする。

7秒かけてまばたき、むずすぎる

一瞬でまばたきしてしまう

まばたきしない時間6.9秒とまばたき0.1秒からの脱却がむずい

大塚拓海さんは「書く」ことが好きで、いつも縦書きで書いています。

それに合わせて、彼のページは縦書きにしました。

この本を90度時計回りで、グルッと回転してお読みください。

振れだけと楽しかたーみんなの顔を見て、思っていたよりも  
なまぬかしく思われ。違和感なく安心して会話をした。  
カヌエオのから、カヌエあり、そしてオのついでにだんだん距離  
が変わっていくなら、いざいざ入りの新しい部分は出会うこと  
が出来るかも知れない。

はじめに考えは複雑な、複雑なして面白かった。

やりだした。もうもともとやっていた動きをまたやりに書いていく。  
もの、みんなの言葉の散らばり方が面白かった。物種ごとにと  
書き込まれていく。それぞれの個性があらわなまま、でもその  
うでで感じられるようにもある。十二人に話している、ある人  
の主眼物になり活躍しているものを体験を感じた。

写真を取り戻して面白かった。構図とかを考えるのがめんど  
ろかったけど、ひたすら物のテクニクを探求した。するど  
い筆跡がもたらす景色に驚かすことになった。

もうみんなは「痕跡の入り方」として、人の行動の痕跡を写  
真に残そうとしていたのだ。人によって、世界の切り取り方  
が違ったり写真が撮られた。

風景そのものを持ち帰るときに体を触って整理するというのが  
面白かった。身体と持ち物の関係を、触ることによって取り  
戻す。持ち物を確かめる動作でも、人によって違う。感覚によ  
って切り取る人も、テキストを描いて確かめる人もいる。

人と出会うというとき、その人との切り取るかによって変  
わる。手話を話す人は、視覚的なテキストが前に出ていたり、  
zoomで話している言葉も聞こえているからその印象も変わ  
ってくる。出会う方を考える、やっぱり同じ人であってもその人  
の違う面と出会う。

もし、その人の声と出会うなら、その人の感覚と出会うなら  
その人の動きや見た目と出会うなら、その人の言葉と出会うだ  
ら、その人の世界の切り取り方と出会うなら……

人との出会う方や、世界の切り取り方はここではないと思っ  
たこと思い出したのだ。

自分が何気なく思っていた写真が面白く、と言われた。

毎日、海を撮る。

空の色や波のうねりめきは毎日違っている。

毎日違っているから毎日行きたい。

海をとってきた。

毎日同じ道から写真をとったら

なにか見えてくるだろうか？

とりあえずカメラを海に向けてみる。

そのうちに、あれも撮れるこれも

撮れるとわかってくるかもしれない。

2020/09/21

朝早く起きた。理由は、今日からオンライン授業があるから。  
夕しかりシートに手書きで書いてもらった小説の口入を書き送ら  
した。寒く朝早く、くしゃみが出る。最近部屋の掃除をしつづら  
から、埃が舞ってアクリルシートを汚している。

だから、外に出た。起きてくれる人は誰かわない。「お母、アスクも  
アスクのポグットに入れたらいい。自転車に乗ってる時はずっとど  
ろけな。海辺の道は広くて、十分アクリルシートをアスクを取れ  
る。アスクをつけていると、海の匂いもしない。道のそばに生え  
ている草の、葉の匂いも悪くない。だから、アスクはただは  
うが楽しい。お母の車を走らせると、ポグットからアスクを取  
り出してあげる。

「アクリルシートはほら行くの」暗し、お母は言う。自転  
車で家を出かけると、「お母は行くところ」で家族に通りか  
かるとお母はあきれ、海邊の道は広くて、自転車のシート  
と調和していい気がする。自転車だと、小時間くらいは道のそ  
ばの道を走りまわることがある。

今日はこの場所からの海をとってきた。

水面が柔らかくて、人の肌のように感じた。

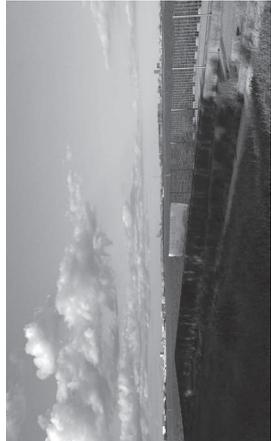
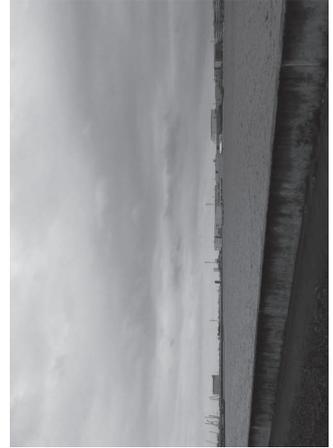


昨日飛んできた雲。

空が広いと海も広い。

のびのびと雲が浮いている。

遠くに房総半島が平たく伸びている。



朝たなから雲が飛んできた。空の色と海の色は呼吸し合う。日々  
変化する。夕暮りの空はゆるやかに落ちていく。潮に降  
らぶ。風の温度で秋が押し寄せた。季節の目もつな  
がらう。秋というものはなにか押し寄せない。はの道を走  
りもろくかきまわす。



とりあえず書く。そう、書くことはいつでも私に取ってはとりあえずだ。この考え方はいろいろなことにいい加減は用可能なのだと知った。「表現ではなく、記録」という加藤さんの言葉でそう確信する。

カメラのシャッターを押すことは、とりあえず世界を切り取ることである。言葉はせよ写真にせよ、何かを捉えることは何かを捨てることである。全てを言葉で書き表すこととしてしまうと、何も書けなくなる。全ての瞬間を捉えようとする、何も捨てることができなくなる。

だから、とりあえず撮られた今日の写真はこれら、そうした選択の上で存在している。全てではない何か。それでいく、諦めでも放棄でもない。少しのこだわり、私たちの限られた時間との限られたこだわりを生み出された何か。それは、尊い。

撮られるのが好きになら。写真は撮る加藤さん自身の動きをそのまま真似をしている瞬間がとても気持ちよか。緊張感があり、同時に安心して。シャッターが押され続け。手が動き続けた。私がある時に何かを考へて別の動きをしてしまったら壊れてしまつたと思う。でも、なぜか何も考えずにゆくりと手を動かして。動きをリードしてもらつたこともとても安心した。

僕が加藤さんを撮るとき、海を撮っている様な気がした。いつも自転車で漕いでなびき着くものだが、加藤さんは常に動いていく。その中で僕が気に入った瞬間を写真に収めた。それ以外はあまり、コントロールしようとしなかった。天気の良い日、曇りの日、

雨の日でも海はそこにあつて、それぞれの養育がある。それと同じ豊かさが加藤さんにかつ感じられた。それはそのまま、人を撮ることの感銘をもつると思へ。だから、撮るとも本好きになら。

東京に行く。そして帰ってくる。筋肉痛ともうた小冊子をお土産にする。「東京を人に送る」とは、歩くことであり、ちゃんと時間前にトイレに行くことであり、ハンカチを持つことであり、笑顔でいらることであり、おきんと靴を履く話を聞くことであり、帰りの夕飯の時間を話しあふことであり、隣で話す人の微妙な間を読むことであり、マスクをつけることであり、それでも行つて良かったと思つた時の安心感とともに感じることもある。

多くのものを切り取ってくる。それが全てではないけれども、僕の体を通した信だ。

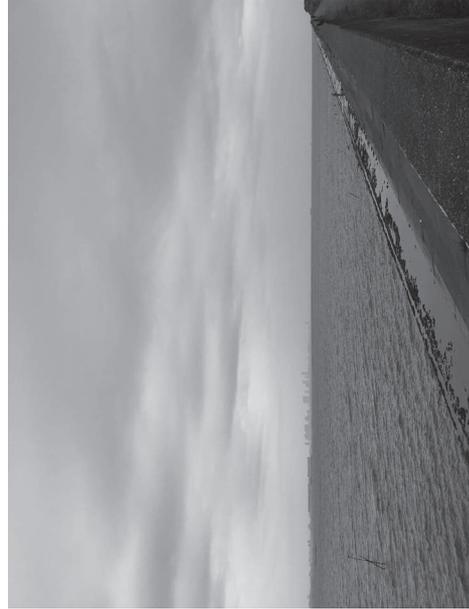
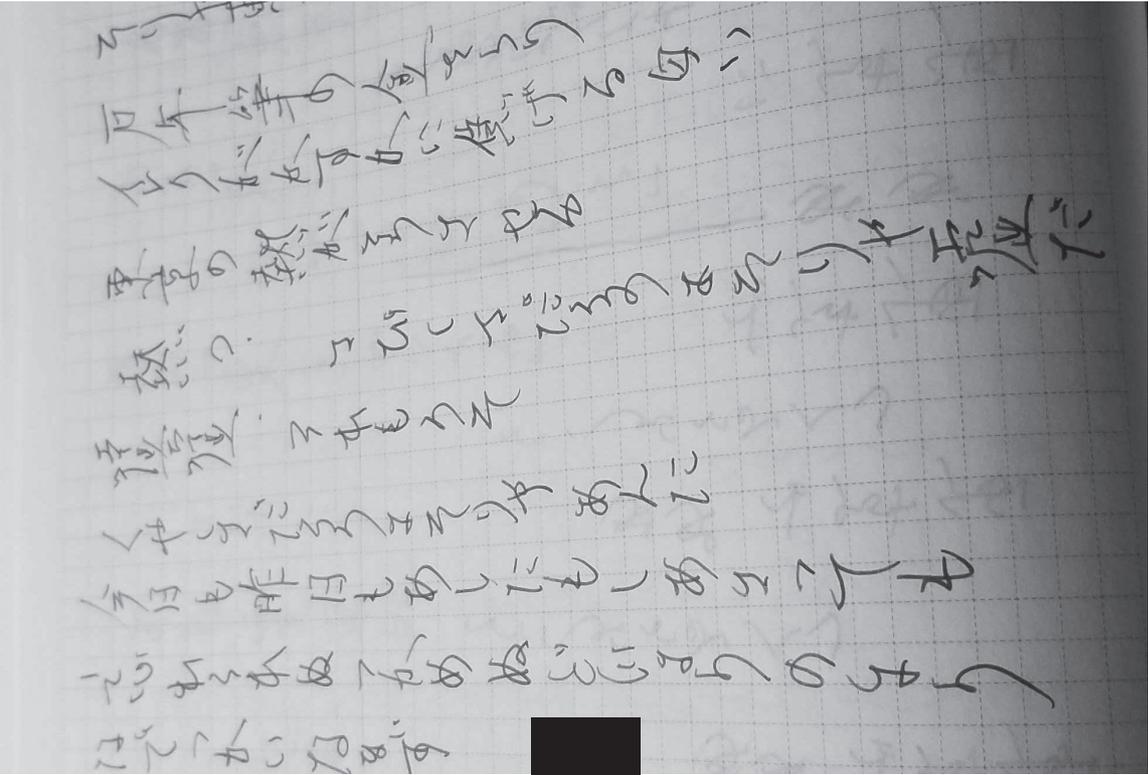
この世にもともと時間と空間があつたんじゃないから、人間が目と耳を発達させたから、時間と空間というものが生まれた、という言い方のほうが正しいです。  
—— 池谷裕二さんが『定義＝「生きている」』の

2020.9.9

毎朝思いのままに書くという無意識をひたひたの境界まで  
 いる。昨日もろくどおれ本がめしづくたので書いてみる。  
 詩のリスが無意識にはおちたらしい。小説のまじな  
 章を書くとき手が振れるという理由で、詩を書く。動画と  
 言うというより心の揺らめきをタイプライターで切り取って流し  
 ながら書いた。  
 そして記録するなら打ち出すのではなく、手書きのノートをま  
 のまま写真に撮り取るほうが記録的だ。

木村さん方には、言葉をもった感情を書いただけ、個人的に美  
 観がよくなるならそれで書いてみる。  
 中学高校、六年間の間、教室で、声を出して笑ったことがあま  
 りない。既つかしかな。  
 自分が口と口とでも声を出してしまふこと、表情が勝手に  
 に寝えられしこと。それがなんだからや、笑ったことも  
 増えしこともない。だから、素直に笑つて二人を喜ばし  
 いなもと思ふ。  
 ひかなや、嫌味ではなく、素敵な笑顔というものを探して。  
 自分が大人になるにつれて口と口としまふ大衆の身体をもつ  
 一層解き放たない。解き放つことのできる場所に行きたい。  
 大人になるとは、子供である自分を捨てることではなく、い  
 つまでも消えない自分の中の子供の部分をとり出してやり過  
 すことと思ふ。  
 僕は、それを抑えたりして今までやり過してきただけ  
 にも、今度はもう一度子供と自分と付き合っていく方法を  
 探してみたい。  
 などとなく、そとからにゆるめたりして出ていくや  
 りが自分にはあつている気がする。これはなにかならなくおき  
 いけなく考えるよりも、元々自分の中にも何かを眠らして  
 いく大衆の体がある。  
 声を出す。部屋にこだまする。心地よく体が揺れる。空気が  
 揺れる。体もめたなくなる。周りの人も笑つて。そんな記憶が  
 眠ら出される。  
 笑つては、声をひびきこつて身体をひびきこつてあるかもしれ  
 ない。笑つて合つてその場の人々の「からだ」が響きあひ合ふ。  
 などとなくそれを保持しようとする。ちひちと、笑  
 つてを味わつていく。

出会う方を考えている。明日、みんなにまた会える。多分、知  
 らない自分にも出会う。  
 考えなければ、こつて誰かと出会うことかたまる機会が減多  
 になり。出会うは、いつも偶然と理不だ、考えずとも、眠ら  
 出する機も手をつけてない。出会うの瞬間を覚えていらない。  
 手や手をするもの、眠らしているものを持ってきて欲しい。  
 そう言われて、「何も手や手つらなから、むしろ明日のこと  
 が楽しみでつらつらする」と思ふ。でも、何も考えずに来  
 ては笑ふのだ、という予感を感じさせる。これは無理やりによ  
 り手や手つなければならなし、体とつたにある手や手つ  
 りが、笑火させる。



一番最初に入ってくるはずの情報が後から入ってきた。  
わたしはというと、pmsとスタディのあとの予定のおかげで少々憂鬱になって人様に会う最低限の顔の準備すらギリギリ間に合わなかった。焦った…  
みんな「美しいな」って思った。  
最近言語されてきたわたしの中の「美しい」と感じる人、物の多くは「≡自信がある」みたい。  
やはり私は自信がなく、自分の気が抜けている顔が、誰にどのタイミングで見られているのかわからないことが少々不安になったり、「あ～気の矢印が自分ばかりになっちゃうから背景とかの機能があるのか…」なんて時代を感じたり。そんなそわそわ不安な(矢印自分)の初顔合わせだった。  
って気持ちが正直なところ。  
「ああ、自分のことばかり～」ってまた落ち気味になってしまうのはひとまず落ち続けないようにpmsのせいにしておく。

もうずっと感じていること。  
この「恥じらい」を捨てたい。  
たぶん、↑に書いたような矢印のむき方はわたしの中のしつこく残る「恥」が強く関係してる確信がなんとなくある。  
いつか、「あれ!?今取れた?!」ってイボみたいに落ちてほしい。  
その時まで探っていきたい。



自転車で乗ってたり移動するときに私の中の独り言をこ  
こしゃべってる感じで、投稿してる。  
お気に入りの場所。  
不思議なのは、15年以上今の家に住んでいて、ベランダに  
は何百回も何千回も出ているのにこの場所に気がつか  
なかった。  
でも、あそこに登ったらまたわたしの世界の解像度が少し  
上がったの。  
そうしたら、この存在なしの世界には戻れなくなった。  
わたしが、わたしだけが見つけたときめく場所。まだ出会っ  
ていないだれか1人にしか見つかりませんように。

どうしたら疲れが早く抜けるか、リラクスを獲得できるかを模索中。

この間は、銭湯を試してみた。

大きな人工物を見ると「人よりも大きなものを作った人はすごいなあ…」っていつも思う。

銭湯の湯は人より何倍も大きい(?)。(家の湯船も、人が入ってるから、人より大きいんだけど…)

あんな大量のお湯に包まれる感覚はやっぱり定期的に必要そうだな〜って。

熱々のハグをされているみたいで、雲が熱かったらこんな感じかな(ドラえもんの作画イメージ)

山形にいたとき、山形県民の友達が定期的に「温泉行くべ」って誘ってくれてた。おのずと私も温泉に行くことが知らぬ間に習慣になっていた。

「あの時はなにも意識してなかったけど、すごく大事な行為だったんだな〜」って、温泉の良さを感じはじめて、一歩大人になった気がした。

2020.10.04

自分の気持ちとゆっくり向き合うことができ「そうそう、こういう頭の使い方ですよ。」「ああ〜心地良くて楽しいな〜」って思えた。

おかげで身体がリラックスしたのか、生理が来た。

日々の頭の切り替えが難しくなってきた…むむむ…

仕事のわたしを一回ログアウトして、ただの私になりたい。

フェスやクラブやライブが好きなのは「ただこの音楽が好きなたし」になれるからなんだな、と最近言語化できた。男も女も肩書きも関係ない。

ひとつのことだけにほんのり頭と心と身体をあずける。

その時間が作れないとなると、どうやって探っていけばいいんだろうか…

「日々ログアウト」11月の目標にしてみようかな。





【最近考えていること】言葉にされないところがとても大切  
先月、カウンセラーの学校を卒業したのだが、その前後でコミュニケーション時の理解度が大きく変わってきている。「傾聴」とか学んだはずなのに、実は「理解できない」が増え、質問することが多くなっている（最終的には理解度は高まるのだが…）

。今までは、言葉にされなかった曖昧な部分を（意識せずに）自分で理解できるものに置き換えて話を聞いていた。これって、スムーズなコミュニケーションを行うには都合が良いが、置き換えられた部分に問題があった。そこには僕の価値観で置き換えられたものが入ってくるから。

話す側は、自身の行動は説明するが、その時の心境は曖昧にすることが多い。それなのにわかった気になっていたのは「僕ならこう思うから」に置き換えていたからに違いない。

言葉にされていないところを、言葉にしてもらったときに初めて話す側の価値観を知り、自分と異なることを認識する。そして、話す側の心の状態だけでなく、大きさや方向も感じとれる。

「受信感度を高める」一歩として、最近考えている。（上手く言語化できない）

めっちゃめっちゃ興味深いですね…。「なにを持って理解した」「理解された」と各々が決めるのかも関わってきそう。  
またケアとセラピーの違いについても再度考えたいくなりました。受信感度を高めること、どういう姿勢で他者との関わるのか、カウンセリングってそこに対する知見がめっちゃめっちゃ詰まってそうなので詳しく聞いてみたい  
(木村くん)

【ひとりごと】加藤さんの写真を見て想い出す

「僕には過去がない」と言っていたことがあった。正確に言うなら「僕の過去を証明するものがない」なのだが、写真など子供の頃を記録したものが何も残って無い。全て津波で流された。

震災後津波が引いてすぐ、実家のあった場所に行った。瓦礫が積み重なり山になり、その上に自衛隊が立っている。僕には映画の1シーンのように思え現実味がない。しかし、その瓦礫の中に足を踏み入れると多くの現実が目飛び込んでくる。正直、永く居たいとは思えない状態。でも思い出の品を探すため、多くの人が瓦礫をかき分けていた。

結局、僕の子供の頃からのアルバムも、卒業アルバムも、全て見つからなかった。なくなり始めて気がついた事がある。例えば「中学まで丸坊主だった」「デブだった」「剣道で東北1位」と言ってもそれを証明するものではなく、本人の記憶でさへ鮮やかさを失っていく。記憶＝時間だから、時間を切り取る写真は、記憶＝時間＝写真とも言える。写真がなくなることにより、記憶と過去（時間）が消失したのか…なんて考えたこともあった。実際、津波が去ったあとの瓦礫から人々が探していたのは思い出の品や写真であり、東京に住む僕のもとに地元の友人からきた連絡は「卓也の家族の写真が見つかったよ」の連絡。小学校の体育館に身元不明の写真が並べられ、多くの人が家族の写真を求め訪れたことも。1枚の写真の力を強く実感した。

写真家その時むけている視点（興味）が写真であり、新たな視点を鑑賞者に与えてくれると思って作品を見ていることが多いが、（家族写真など）撮影者の記憶に記録させるための手段・行為として写真があるのかな…と考えたこともあった。

【10/4日誌】1週間も寝かせてしまった。既に記憶が薄れているので記憶をたどりながら書いていく。

Room302に入ると加藤さんと嘉原さんが笑顔で迎えてくれた。3331が持っている学校というコンテキストなのか、過去にTURLを受講している経験・記憶からなのか、夏休み明けの教室というか…安心、懐かしさ、少しの気恥ずかしさみたいなものを感じた。

準備のお手伝いのはずが、写真を見ながらのおしゃべりになる。品川の施設の写真、表情に視線がいく。アサダワタルが本当にいい笑顔でそこにいた。とても気になる。いくつかのアートプロジェクトに参加させて頂き、いく人かの作家との交流も持っている。しかし、アサダワタルへの興味は大きい。想起を起点につくられるもうひとつの時間軸、その優しさがとても気になる。品川の施設のすみっこでただただ観察する、そんな機会が欲しい。もうひとつ、40オーバーのアサダワタルが少年のように写っているのが不思議でならない。パラダイスの写真からは空間の持つパワーとその空間で遊ぶ作家の関係性に目がいく。「なんで?」とツッコミを入れたい写真ばかり。あの空間では作家も遊びたくなるのかな?それとも加藤さんが作家で遊んでいるのかな?木村さんとお会いする。Zoomでお会いしているから?初めての感じが全くしない。笑顔、声のトーン…誰とでも仲良くなれる、心をゆるしてしまう危険な人だ。無敵の営業になれるぞ…なんて考えた。

南雲さんとお会いする。動きを追ってしまう。手話だからというのも含めてとにかく動いている。人は歳を重ねるにつれ動かなくなっていく。そこには自分を見せる恥ずかしさもあってと思うのだが、動作、表情に無駄がなくなっていくように感じる。南雲さんからはそれを感じない。笑顔と動きで楽しさを伝播させる。だから自然と目で追ってしまう。

ワークが始る。明確な目的がない自由な時間。以前はこの時間が苦手だった。何をしたらよいかわからない時間が嫌で、無理

矢理動いていた。今は何もなくてよい時間の贅沢さを知った。好きなように会話し、写真を楽しみ、空間を傍観する。Zoomでずっと感じていた違和感が解消されていく。会話による新しい発見があり、雰囲気から勝手に想像を膨らまし、興味が高まっていく。Zooms使用時のような会話の順番、タイミングを待つ、それが撤廃されたことにより得られるその人のリズムを得られたのはとてもよかった。

あみだくじでできたヘアが似たもの同士に感じたのは僕だけではないはず。

木村さんの写真撮影。僕は写真を撮るのも撮られるのも苦手。無理に構えてしまうから…なんて話をしてた。綺麗に撮らなければとか、どんな風に撮られたらよいかと考えてしまうと言ったからか、座った瞬間シャッターが切られる。連写、連写…どこまで?そこから笑顔しかなかった。どんな風に撮られるなんて意識していない、表情も、仕草も…やられたと思ったら笑いしか出なかった。

で、交代。きっと同じようにやられると構えてるななんて感じた。でも、適当にシャッターボタンを押すことにした。笑顔も、恥ずかしそうにしている仕草も、あの空間にやんちゃな空気が生まれていて、上手に撮ろうとかいうより、動きだったり空気感だったり、狙ってない構えてないところが木村さんっぽくて良いななんて思った。結果としていい大人の男3人が個室でわいわい騒いでいる…って感じになった。帰り際に少し写真を見たが、まさにわいわい感が写ってた。笑ってた、笑ってた、笑ってた、撮られることとか全く意識せずに、ただただ笑ってた顔がそこにはあった。

撮影が終わった人たちの関係性が面白い。共通の秘密を持った感じだろうか?確実に距離が近づいている。この関係性のつくり方はとても興味深い。メンバーを変えたらどうなるのか…試す時間が欲しかった。

やっぱり皆さんとゆっくり話したい。2時間では足りないか…



【11/28日誌というより愚痴】もうずっと書いていない。

明日になったらきっとまた書きたくなるだろうと思い、今のうちに書いておく。

「また文章をかくのか…」と気が減入る。文章は苦手、文章は嫌い。しかし、この1ヶ月ちょっと、帰宅すると論文を書くことを続けていた。もちろん、会社命令で仕方なくイヤイヤに。

10月の半ば、専門技術の資格試験受験（これも会社命令）。同日、論文の提出日。仕事の合間をみつけて書き上げたA4用紙6ページ。そこから査読→修正、査読→修正、査読→修正…土木エンジニアの業界に、僕が書くこととなった論文はライトアップデザインについて。「用語が全然わからん」「書かれている内容が正しいのか判断できない」「そもそも業界が違う」の声に合わせて修正する。理解するつもりのない人に理解させる文章は書くことができないと思いつつ、何度も書き直す1ヶ月。

もう書くのが嫌になった笑

昨日やっとその論文に対するプレゼン大会が終了。

で、今日。

ごめんなさい。

疲れもピークということもあり、気持ちのがらない笑  
お題の概要…頭がぼんやりの中、なんとなく理解する。

方法…フィクションを入れて…んーわからん。

約90分考えた（というかぼーっとしてた）…わからん。

やばい…

このままだと何もできない…

まっいいか！（この辺で少し頭がスッキリしてくる）

いやダメだろ…汗

しかたない、得意なこと、できることに置き換えよう。  
とスライドを立ち上げ、分岐点となった写真を貼り出す。

文章を描きたくないから絵本にしよう。

写真を貼ったらリアルすぎるな…絵も面倒だし…よし！

RPG風にしてフィクションだと言い張ろう。

あっもう時間…汗

【28日のワークを終えた】

終えたつもりになってるが正しい。

不思議と楽しくなって、完全にやるべきことから外れてしまった。

しかたない、しかたない。

これも自分らしさと前向きに考える。

昨日、福島県いわき市にある県営復興団地 下神白団地で行われているプロジェクト「ラジオ下神白 あのときあのまちの音楽からいまここへ」の第2回報奏会「伴奏型支援バンド(BSB)編」をみた。このプロジェクトは、消すことのできない震災の悲しい記憶に対し「音楽をつかって語りかけてくれた、支えてくれた人たちがいた」「みんなで音楽を楽しんだ」という明るい記憶をプラスしてくれるものと感じた。きっと下神白団地の方々は、ただ暗い表情で震災を語ることは無くなるのではないかと。それは、震災を思い返す時にアサダワタルとBSBメンバーがつくった時間も同時に想起されるはずだから。復興のカチは色々あるが「震災の悲しい記憶で、それ以前の楽しい記憶をも上塗りしてしまう」と感じることもある。高い防波堤などがそれである。震災を想起させる大きなコンクリートの壁。それによって見えなくなった美しい海の風景。「昔は美しかった風景も…」この後に楽しい記憶が語られるはずもない。しかし、このプロジェクトは違う。そこに訪れ、紡ぎ、場を作り、時間を共有し…それら記憶を保存する外部記憶装置として作用する音楽を奏でる。

暖かい気持ちになる反面、ただ故郷で行われているプロジェクトを視聴するだけの自分に悔しさも感じる…アサダワタルカッコいい。

東京で生活をするようになり、東京駅構内は日常的に利用するものの外観を見る機会は少なくなった。

「歴史」を象徴する丸の内側に対し、「未来」を象徴した八重洲側。光の帆をデザインコンセプトとしたグランルーフなど先進性・先端性を表現している。数年前、営業として東京・銀座付近を歩いていたときは、グランルーフの柔らかい照明に優しさを感じていたな…なんて思い出す。

今から故郷いわきに向かうけど、福祉業界で働く母親の命により家には入れず、車を受取りすぐ東京へ戻る。明日は長野県大町市へ。

～昨日の太平洋から一転、今日は北アルプスに～

富士山を横目に4時間車を走らせる。向かった先は長野県大町市。今年北アルプス国際芸術祭が行われるハズだった町。確かに来る予定ではいた。しかし季節も目的も異なり、後部座席には大量の引越し荷物。いつものTERATOTERA芸術祭ツアーのような陽気な笑とお酒の匂いは全くしない。

目的地が近づくにつれ山々が迫ってくる。山に吸い込まれるように伸びる高速道路、山すそに並ぶように建つ家々。平行線が何本も引かれているようで面白い。また、山が壮大すぎるからなのか、建物のスケール感、距離感が麻痺していく。不思議な空間構成に見入ってしまう。

心地よいけど冷たい空気、路肩の雪に吸い込まれる音。波の音に包まれた昨日と変わって、静寂に包まれる。

少し時間があつたので、3年前の作品を探してみる。「雪で通行止め」「クマ注意」予想外の妨害にめげず、浅井裕介「土の泉」は見ることができた。

もろもろ片付け車を返却するためいわき(福島)へ向かう。カーナビを信じて進むも雪による通行止めから大きく迂回を余儀なくされる。引越しの疲れ、雪道の運転、1時間の迂回…「疲れた、疲れた」とボンボン言い始めたら、目の前に北アルプスの風景。これを見るための迂回だったと言い聞かせる。

少し自分の時間を自分でコントロールできるようになった。今年度のプロジェクトも終わりが見えてきた。来月には平常運転だな笑

この時期、無茶振りが多くなる仕事にうんざりしつつも、図面書くのが好きなんだよな…と実感する。僕が好んで行っている表現活動が図面を書くことなんだろうと思う。昔CMで地図を変える仕事?なんて聞いたことがあるけど、生活を想像して僕は街を設計していると思っている。だからこそ人を見て、様々な価値観に触れ、多くの視点をもらうことに興味があるのだろう。

週末、みんなの発表を覗けるといいな

まずは焼肉で膨れたお腹を、明日雲を吸い込むために空ける必要があるな…

いつか実現

大塚くん→お洒落なお店(期待に応えたい)

南雲さん→熱燗(今ならおでんとペアなのに)

嘉原さん→ワイン(僕も好き)

加藤さん→鎌倉のハイボール専門店

2020/09/20

ついに皆さんとご対面！それぞれの画面を覗き込んで「あ、人間だ」と思った。ほっとしたような、むしろもっともどかしいような。声や絵だけで認識していた皆さんが身体をもつ実体であることを視覚で確認したけれど、たぶん、私の身体はまだ不安がっている。新しい挨拶を考えたとき、自然と画面に身体の一部を近づけようとする動きになった。画面越しの「出会い」と空間を共にする「出会い」、触れる「出会い」はぜんぶ別次元の現象みたい。

モニター越しに集うと、誰がどこを見ているのかわからなくなる。人の表情や仕草を観察するのは格好の環境？かもしれない。そんな自分をまた違う誰かが観察しているかもしれない。また違う誰かは今夜の夕飯について考えているのかもしれない。

人はどうして写真を撮るんだろう？

そんな問いがずっと自分の中に燻っている。記録のため？撮影者が見た景色と、撮られた写真に映るものは本当に同じなんだろうか。Googleフォトに重なっていくイメージの数々を遠目で眺めていると、一枚一枚の写真が私たちの手から離れて勝手に会話を始めている。

もっとこの身体や身の回りのものとフラットに繋がってみたい。舌のように語る南雲さんの手を思い出す。ハッとする表現だったな～。運動会で白い粉に顔を突っ込んで鉛玉を見つけたときの嬉しい火花が散りました。そんな気づきや発見がたくさんあるWSだった。

今日は久しぶりに電気を消してお風呂に入った。見る脳を休めて、自分の身体のお世話をする時間。首が凝ってました。



2020/10/04

映像学科で学ぶ私にとって、カメラは身近な存在だ。というのはちょっと嘘だ。私は生身の人間を撮るのがこわい。それはたぶん、「撮られるのが苦手」と話していた方々と似たような理由じゃないかと思う。レンズを向けられる相手にかかるストレスを想像してしまうのだ。

カメラを持つと、欲が出る。こういう写真を撮りたい。欲のままに演出を施していくと、嘘をついているような気持ちになる。被写体となる人の時間と身体を借りて、嘘をついている。嘘は決して悪いものではない。多くの映像作品は、現実でないものを作り出す「嘘」だ。頭ではわかっているのに、私はこの息苦しさで未だ折り合えない。

山田さんとペアになって、お話をした。今日初めて会った人と「撮影者と被写体」というリスクな関係を結ぶ。なんと恐ろしいことか……！どうしたら「私と山田さん、山田さんと私」のままで撮影ができるだろうか？そう頭で考えるより先に「一緒に映りましょう！」と提案していた。カメラという壁をひょいっと乗り越えて、ストレスを分け合いたかった。

相対して置かれた椅子に座る。やっぱり真っ正面きって向き合って緊張する。でも今、山田さんは私と同じ方を向いている。チューチュートレインだ。

山田さんがボタンを押すタイミングはわからない。私がポーズを決めたタイミングでストロボが光らないと、不安の波がかえってくる。でも、そんな隙すら与えずに次のシャッター音が鳴る。平行棒を急いで渡るようなスピード感だ。山田さんの背中を見て、どう映ろうか考える。読みが外れて被ったりする。焦る。加藤さんのスマホをお借りして、映りを確認しながら（そこまで気にしてなかったかもしれない）撮影はつづく。

どのタイミングで交代したかは記憶にない。シャッターボタンに手をすると、主導権を握る恐ろしさが蘇ってきた。鼓動が速まって、連動するようにボタンを押す手も速まっていく。山田さんは、想像以上に動きや表情がダイナミックで、加藤さんのスマホ越しに見るのがもったないくらいだった。独りではないと思った。これは演劇だ。私たちは共演者になった。

ここまで記して、読み返してみる。そもそも「嘘」ってなんだろうか。どこからが嘘で、どこからが真実なんだろう。その線分けには意味があるのだろうか。

虚構は現実の中に生まれる。現実が虚構を生む。

あの撮影スタジオに、山田さんと私二人だけだったらどうなったろう？観客がいなかったら、あのスピード感ある演劇にはならなかったかもしれない。

「恐ろしい」「こわい」という言葉を多用した。私がこの言葉をつかうとき、それは大抵（好奇心）（ワクワク）を内包している、と私は知っている。



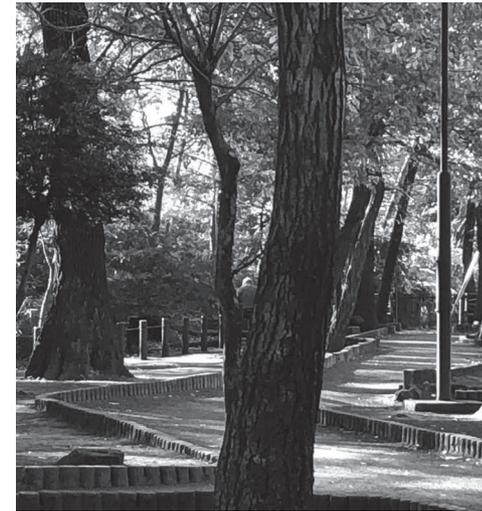
2020/10/31 前  
午前中は築地でフィールドワークをするはずだったけれど、諸事情により自宅で作業をすることに。うどんを食べてから、のんびり向かっている。  
今みなさんはなにを、なにをしているんだろうか？かくれんぼ？ポイントラリー？  
もしや、宝探し？？わからないけれど、なんだか楽しそうだ  
電車で揺られながら、宿題である"モヤモヤ"について考える。  
モヤモヤってなんだ。  
この問い自体が、私の中にモヤモヤ宿す。「これが、私のモヤモヤです」と手に持って示すことができるのなら、それはたぶんモヤモヤじゃなく、ゴロゴロべたべたサラサラした、何か。強いて言うなら、代々木公園を目指すこの身体そのもの、頭や心の中に芽生えた感覚を、指先で触れるように言葉へ変換していく。  
それでも届かない、触れられない領域を、"モヤモヤ"と呼ぶ。  
脈絡のない思考をそのままキーボードに打ち込む。ふと顔を上げると、私と同じように揺られている人々の輪郭が、モヤモヤして見えた。気がした。

それでも届かない、触れられない領域をモヤモヤと呼ぶ...確かに今日はみなさんの触れられない領域を、触れられないままにさらけ出してくれたので、そっしーさんの言葉を借りるなら「うれしい」でしたね。先頭を走るすーちゃんのマラソンもその肌触りを感じたのかな。共に在るマラソンでした!  
(南雲さん)

思考が言葉を紡ぎ、言葉が私を思考させる  
思考する口があって、音にする器官としての口がある  
二つの口の距離が今は少し遠い これくらい

過日のマラソンの時も感じたけれど、すーちゃんの身体感覚、なんかすきです。脳と心の距離が近い感じ。  
すきのなかに、若干の羨みもあります。笑 (原口さん)

ありのままの事実を知覚して分析する器官(脳?)と"私"の感性で解釈する器官(心?)をうまく使い分けられていない自覚があります!笑  
私も思考整理が巧みな方だったりを見かけると、好奇心と羨ましさでいっぱいになります。



【2021/01/19】

言葉：古代日本で、言葉に宿っていると信じられていた不思議な力。発した言葉とおりの結果を現す力があるとされた。

\*\*\*

内なるものをことばにして表出させると、

↓

a.エスカレートする

b.かたちが明瞭になる／実現する／納得する／すとん、と落ちる

c.嘘っぽくなる／違和感／実現しない

誰かに見せる/聞かせる言葉だったらなおさらハードルは上がるけれど、誰にも見せない言葉にもハードルを感じる。たぶん、表出させた時点で、それは”内なるもの”から”外のもの”になって、ある人(私)に解釈されるものになるから？

(ここまで書いて下書きに仕舞いたくなりました。)

自分が発した言葉に自分自身が引っ張られたり、逆に解釈違いを起こしたり、「あ、これだ」と納得したり、そういうことがある。

内→外は、単なる移動ではないのだ、と思う。

(ここで大塚くんのtranslationとinterpretation?の話进行思い出す)

「言葉」というメディアは、どうやら単なる透明な容器物ではなさそう。

(ここでマクルーハンというカナダのメディア学者の話进行思い出す)

\*\*\*

原口さとみんさんの話を聴きながら

マーチングをやっていた頃の記憶などが思い起こされました。

(楽器を素早く拍に合わせて担ぐ動作を習得するために、いろんな人に「どう担ぎ上げているか」を聞いて自分に合った「感覚表現」を探したり)動きの感覚を飲み込む(解釈する)ために必要な「お菓飲めたね」的表現が見つかりさえすれば、自分はどんな動きもできるようになるのではないかと、思っていた時期もありました。

身体を動かす人(などという区別はなく、みんな身体を動かす人なのかもしれない)の身体感覚を表現する言葉って、ものすっごく面白い。おもしろい…!

下書きばかりがたまっていく

【最近】日付を越えて帰宅する日は布団に入るまでこの灯りもつけない。(今は特別に、スマートフォンの灯りだけをつけている)間風呂はこの一環として行われる。換気扇のスイッチの脇にある緑の小さなライトと、浴槽脇の温度を示す数字だけが光っている。手に取ったパンツの色もスウェットの後ろ前も、見るだけではわからない。シャンプーとリンスは同じサイズのボトルに入っているから、ボトルの位置で見当をつけ、賭けで泡立ててみる。暗間は、イレギュラーにみえて案外レギュラーな環境だと思う。見えていなくても、記憶や触覚を頼りにできる。それらを頼りにしたり、パンツの後ろ前を実際に履いて確かめたりすること自体が、自分にとって「おさまりのいい行為」だと感じられる。風呂から上がって、白湯をいれる。暗いリビングでメモ帳をひらいてみた。紙の範囲はかろうじてわかるけど、字は全く見えない。風呂場ででもくもく考えていたことをそのまま書き残した。読める字になっているかな。なってなかったら面白いな。スマホの灯りがまぶしい つづきは明日考える。寝る。

1999年7月26日

生まれた。大きな赤ん坊だった。お母さんが押すベビーカーの中で、「元気な男の子ね〜」と、よく声をかけられた。そこはマンションの窓も人もぎゅうぎゅうの街だった。ショッピングモールの天窓に青空が見えた。

2008年4月26日

いつの間にか海を渡っていた。土曜の夕方に放送しているアニメがとんでもなく面白い。エンドロールに流れる人々の名前を、姉に借りたパソコンで深夜まで調べ続けた。図書館で原作の小説を借りた。開くといつも、樹木の香りがする。給食をかき込んで、読んだ。ティッシュ箱はメモ帳だった。リビングに置かれたそれはいつも、人の名前、好きな言葉、知らない言葉、明日するごとで真っ黒になった。

2008年6月26日

お母さんと離れて暮らすようになって、数日が経つ。お父さんは、ほとんど日本語を話さない。家を出る時とお風呂に入る時に、相手に手を振る習慣ができた。暗黙の挨拶みたいなものだろうか。「おかえり」や「いってきます」の代わりにような。そうでもないような。学校のことを家で喋る習慣がないので、これが唯一の会話だったりする。

2014年9月26日

吹奏楽部の部長として半年やってきたけれど、うまくいかないことばかりだ。どうしてみんな、そんなに我儘なのか。コーチの先生はこう言った。「誰にも見せないノートを書きなさい」結局書かなかった。お母さんの家に寄って、愚痴を吐いたりしてみた。初めてかもしれない。お母さんは拙い日本語で相槌を打った。

2015年4月6日

高校に入学した。中学はそれなりに真面目にやってきたから、高校はまた違う三年間にしてみよう。初めてのクラスルームで担任が話をしている。「クラスカラーが決まってて、D組は緑なんだよ。緑好きな人いる？」静まり返る教室。なんだその質問、と思いつつ、えいやっと手を挙げてみた。緑は、いちばん好きな小説の、主人公の女の子の瞳の色だ。

2015年7月26日

入学と同時に入団したマーチングバンドは、一言でいうなら賑やかな動物園だった。「なんて呼べばいい？」という同期からの質問に、小学生の時から決まり文句で返す。「なんでも良いよ!“ゴリラ”までなら許す」ちょっとゴリラに失礼な返答かもしれない。正直に言えば、本当はなんでもいいのだ。なんでもいい。なん

と呼ばれてもいい。

2016年2月26日

今年もまた、体力づくりの基礎練習が始まった。中学の頃に使っていた楽器とは段違いに思い楽器、一年前は持ち上げるだけで一苦労だった。リーダーの掛け声を合図に、肩に担ぐ。定められたテンポ・歩幅で脚を動かす。練習場に冷たい風が吹いた。寒いだけではなかった。体の隅々、皮膚の奥底、筋肉も骨も内臓も、担いでいる楽器も、私自身のものだと思える。

2017年2月26日

進路調査票とやらを提出しないといけない。私はものづくりをする人が好きだ。自分のことを生産者向きの人だとは思わなければ、人生は一回しかないようだから、どうせなら、より面白そうな方を選んでみよう。

2020年4月26日

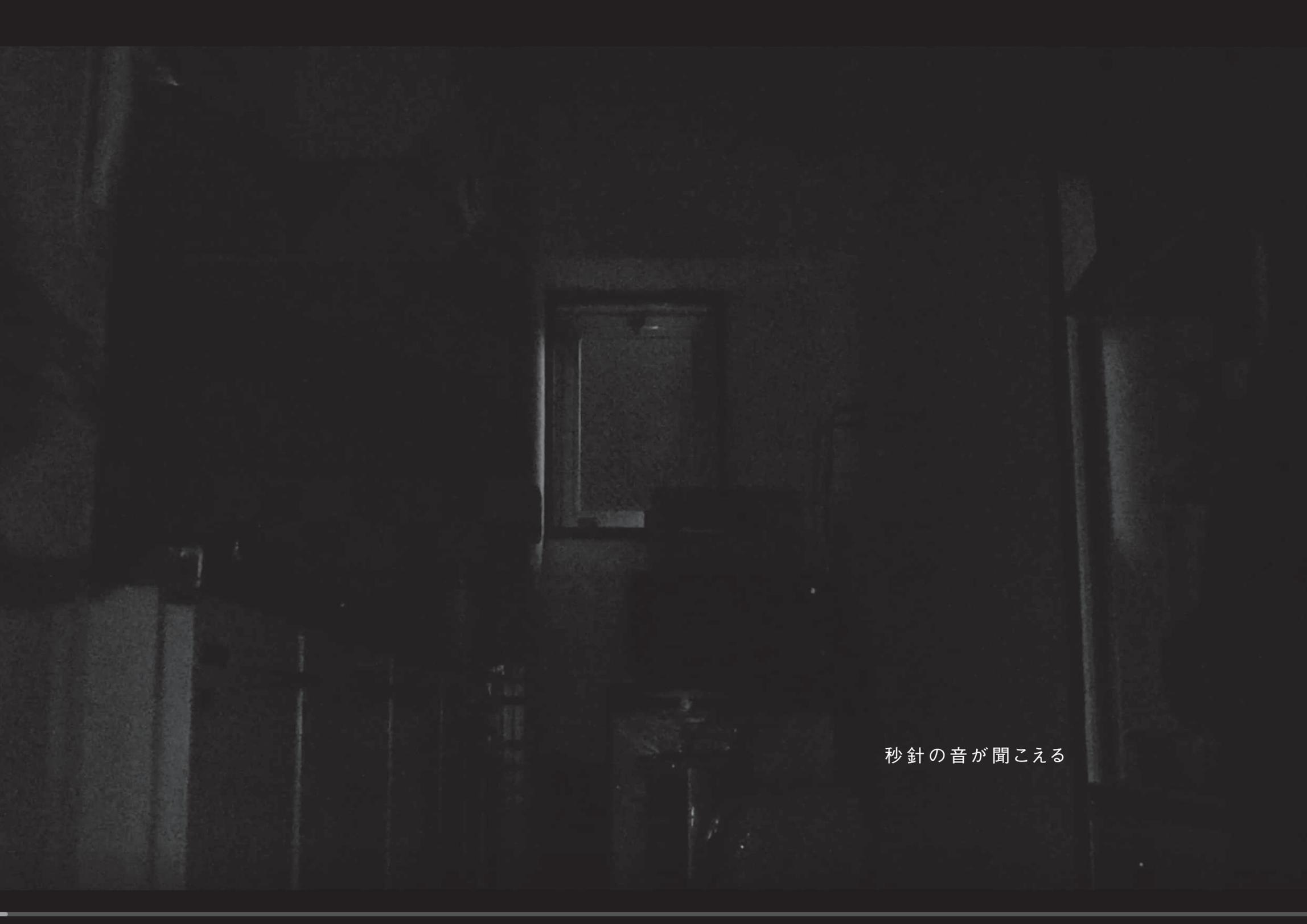
久しぶりに、「誰にも見せないノート」を書いた。声を出そうとすると、喉が詰まる。「早く治るといいね」という言葉に、うまく答えられなかった。「この状態を早く脱するべき?」「するべきこと」ってなんなのだろう。これまで以上に家族との会話が減った。アルバイトもあるし、友達と通話もしたいのに、ハードルが上がった。不便だ。でも、声が出ないってそんなに悲しいことだろうか。不便なことって存外楽しかったりしないか。暗い場所でじっとしていると、目が冴えてくる。見えていたものが見えなくなって、見る行為だけが残る。お風呂で目を凝らす。閉じる。

2020年12月6日

近所のラーメン屋さんに行ってきた。お気に入りの豚骨か、塩を開拓するか。悩ましい時はいつも、一緒にいる人とジャンケンをする。一人ならコイントス。結果は塩だったけれど、結局豚骨を注文した。本当に望んでいることには、選択肢を失ってから気づいたりする。

この1週間、バイト以外ではほとんど、声を発していない。会話をお休みしている。サボタージュだ。

さて、スイッチはどこにあったか。



秒針の音が聞こえる

動物の音声言語は「逃げろ!」など命令形のみでコミュニケーションをとることが多いようですが、シジュウカラは「へびへび!」とその指示対象を音声言語化することがわかったそうです。SVOで言ったら、VOはできてるということでしょうか。音声に限らず、私たちに解明できてない言語がたくさんありそうで、ちょっとロマン感じたので投稿してみました!

わあああ、面白い!カラスが「来い!」「生まれ」「気をつけて来い」の3語解明されてる話は知ってたのですが、イメージの音声化はめちゃくちゃ可愛いですね、、、  
個人的には人間の言語の起源が「さえざり」からきてるこの本も面白かったです、(お時間あればぜひ、)  
“ジュウシマツの歌には「文法」がある——これが転機をもたらす大発見だった。”

あとソングラインもきゅん、、、とするので是非、、、  
“オーストラリア全土に迷路のようにのびる目にはみえない道——ソングライン。アボリジニの人々はその道々で出会ったあらゆるものの名前を歌いながら、世界を創りあげていった。”

今日のワーク (オンライン)

挨拶をして初顔合わせ (読んで字の如く)

大塚さんの挨拶が個人的ヒット。旦那さんにやって見せたら「ピーカブーだね (外国のいないいないばー)」と言われた。「いないいないばー」は万国共通。でも言語のない国では通用しないらしいと言う話も聞いた。チェック。

動きをチャットボックスに書き込むワーク

たくさん書いたメモ、見返したいなあ

全部見られなかったから、他の人たちが何を書いたのか、後で見返したい。

未来の動きを考えるワーク

2025年?の朝ごはん?チームの人たちがみんな画面の左上を指差しているのが面白かった。未来は斜め上なのか。なんとなくわかる気がする。

平安時代の睡眠方法 小道具を使ってしまった。演劇ではこれを「役者が小道具に逃げる」と言います。でも役者じゃないからいいよね!と自分をたしなめる。あと思ったのが、1人で何かを説明しようとする、とても難しい。でも誰かの動きを見て、それをさらに発展させたり、それに刺激を受けて思いついたりするのに素直に反応していけば、いろいろ発想が出てくる不思議。

オフラインだったら (もちろんソーシャルディスタンスを取りながらだと思うけど) どんなふうにチームで発想したかな

意識のとびうおの話。

自閉症の東田さん。インタビューシリーズ、面白そう、他の人のも読んでみたい。

意識の旅。気になったり引かかったものの写真を撮ってみる。

説明できないけど、惹きつけられるもの。エトセトラ。→次回までの緩やかな宿題。

自分のこと。

誰かのためでなく自分の意識に潜っていくこと、そしてそこから海面を突き抜けてジャンプすること。潜るのは好きだけど、ジャンプはなかなか出ないし、出すのを怖がってきた。でも今日はなんか気持ちよさそうだなと思った。リアルにはそんなに泳げないけど、意識やイメージなら飛べそうな予感。

今日話題に出てきた資料: 日比野克彦「100の指令」、東田直樹「ぼくの意識、あなたの意識——作家・東田直樹氏インタビュー」、オリヴァー・サックス「意識の川をゆく: 脳神経医が探る「心」の起源」

忘れ物チェックのはなし

スイッチはどこにあるか。自分の体をさわること。絵を描いてチェック。文字でリストアップ。

視覚で記憶する人、言葉で記憶する人、色で記憶するひと、

触覚で記憶するひと、etc. なにと紐づけているか。習慣。



言葉【2020.10.04. Day3 対面で】

早めに家を出た。でも色々あって、会場についたのは3分前くらいだった。マスクをマウスシールドに変えて、ゆるくそわそわした状態で始まった。

加藤さんが朝から準備してくれたたくさんの写真をみんなで見る。人物が多い。南雲さんの光に触れる手や腕が美しい。南雲さんと少しお話しする。佐藤さんはキュレーターのように、窓側の、施設の子たちの写真を解説してくれた。「いやおれもさっき聞いただけなんだけどね?」とエキスキューズを入れる佐藤さんは10時くらいから来ていたらしく、「でもおれ何にも手伝わなかったよ」と言うから「見てることも手伝いですよー」と言ったら加藤さんにも同じことを言われたらしい。施設の子たちの加藤さんとの距離感の変化に憧れさえ抱く。

オレンジ色の背景の作品を見る。その写真は、クラシルの料理動

画のようにほぼ真上から撮った写真だった。プリントした写真を並べる手ごと撮られた作品。和田さんが来て、どの視点で作品を見るのか、の話をした。

たとえば、撮影者と同じ真上の角度から見るか。それとも少し離れて、斜め上から見るのか。

つまり、その写真を撮った時の状態に入り込んで見るか。それともその切り取った時間の枠の外の時間も含めてその写真を感じるか。のような話だったと思う。

和田さんは(オンラインではわからなかったけど)背が高かった。そのことも視点の話とつながって見えた。オンラインで画面の中で見る和田さんと、枠を外して見えた和田さん。加藤さんの助手の川崎さんと原口さんとみんも来て、撮った時のエピソードを聞いたりした。

その後、あみだくじをして、伊藤さんとみんさんとペアになってワークをした。お互いの写真を撮り合うワーク。

写真、ときいて正直、ちょっとやだな、と思った。

写真を撮られるのは昔から苦手で、集合写真も、グループで撮る写真もすべて苦手だ。

そして伊藤さんとみんさんもそれが苦手な人だったので、じゃあふたりとも苦手なまま撮られたら少しは楽かなと思って、提案した。

結果、ものすごく楽しかった。たぶん伊藤さんとみんも。

合言葉は「素敵じゃない」「期待しない」。

「素敵」な写真が出来上がることを「期待しない」。

雑談しながらの撮影はとても楽しかった。

いまを楽しむ、みたいな、ちょっと手垢のついたワードだけど、事実私たちはその瞬間をすごく楽しんだ。

「だけど、おしゃべりに夢中で、カメラのレンズを見てなかったなあ」と、あとで伊藤さんとみんさんが言った。確かにカメラじゃなくて、お互いの顔を見てた。雑談が楽しくて。

そうか、撮られることから少しだけ視線を逸らしたのかもしれない。といまは思う。

私たちは撮影をとても楽しんだ。

それだけでもとてもいい時間だったけど、

結果少し写真を撮られることから目を逸らしたのかもしれない。

これは小さく逃げたのかもしれない。と思いつく。

そう思うと少しもやもやする。

さっきオレンジの写真の横で、川崎さんが、「写真を撮るときは、

必ず、「これを撮る」っていう何かがあって、いつもそれを撮るためにどうするかを考えて撮る」というようなことを言っていた。

その、目的、というか、「伊藤さんとみんのこの魅力を撮りたい」と言う欲求は、撮影の最後のほうに自分の中に生まれていた気がする。しかもぼんやりしてただけどころハッキリしていた。絵ではイメージできないけど標準はハッキリしていた。いまこれを書いていて初めて気づいた。それは、カメラを意識しない伊藤さんとみんを撮りたいということだった。だから私の狙いは言葉なしでも伝わったとも言える。でも、伊藤さんとみんはそれを違和感と捉えた。とも言える。

「カメラのレンズを見てなかったね」と言ったあたりには、伊藤さんとみんの中にも、何か新しいイメージが小さく生まれたのかもしれない。

最後の方で、「次は雑談無しで撮影しあってみたいねー」と2人で話していた。今を楽しむから、今に集中するへの変化。かな? ワークの後、残った人たちは撮った写真をみえた。けど、私たちは見なかった。(わたしは誘惑に負けそうになったけど、伊藤さんとみんの不動さに私もやり遂げることができた。)

果たしてどんな写真になったのか、見たい気持ちと見るのが怖い気持ちがある。やっぱり素敵に撮りたいし撮られたい欲求は、私にはあるらしい笑

でも最初に漠然と怖がっていた時とはちょっと違って、「素敵」と向き合う心持ちが少し変わったのか。よくわからん。

みんなの写真も見られなかったので、次回はそれも楽しみに。





ある朝、目覚めると、私の右手はスマートフォンになっていました。手首の先にはスマートフォンが縦にくっついていて、指はない状態でした。

それまで私は普通の社会人でした。大学を出て、アルバイトを二年（就職浪人）してから、下請けの下の孫請けの中小企業に就職して働いていました。最初の5年くらいは私は物覚えがあまり良くなく、おちこぼれてしたが、それでもお酒が好きな先輩がうちゅうご飯にさそって励ましてくれたおかげでなんとか乗り越え、いまでは大きなプロジェクトも任せられるようになり仕事が軌道に乗ってきたところでした。

そんな時に何故か突然、右手がスマートフォンになってしまったのです。さて、「右手がスマホ」になった私は、はじめこそ後ろ指さされて気持ち悪がられたり、受け入れてもらえなかったりしましたが、人間は素晴らしい適応能力を持っているようです。私も周囲もだんだんと慣れてしまって、「右手がスマホ」という事実を受け入れていったのです。

それどころか、会社人間は私の右手が記憶力やリサーチ能力に大変優れていることを知り、私を活用してくれるようになりました。そして「右手がスマホ」という理由でスマートフォンアプリの開発事業を任せられるようになりました。むしろ会社への貢献度は上がり、部署内でも成績はトップクラスに。社内報の取材も受けました。

右手がスマホになつてから、私は順風満帆でした。むしろ注目されるのも嬉しいくらいでした。ただ唯一、ペンを持てなくなつてしまったのが、悲しいことでした。私の書く字は、美しいわけではありませんが、なかなか味があつて評判だったので。

しばらく経ったある朝のこと。いつものようにアラームの音で目覚めました。右手のアラームを消そうと右手のスマホを左手の人差し指でスライドしました。した、とおもつたのですが、実際には身体を動かさな。

しばらくしてアラームはブツッと止まりました。

抑揚が少ない声でした。

…え、だれ。

と、私は声を出したつもり、でも、実際には出す、

…おはようございます。私はあなたのスマートフォンです。深夜にすこづつデータを移行していましたが、今日からは私があなたのより良い生活をリードしていきますね。よろしくお願いします。

…I will lead you to a better life.

と、流暢な英語風な音声で言いました。

わけがわからぬうちに、自分の意思に反して身体は勝手に動き、朝のルーティンをはじめます。

いつもの洗顔、いつもの歯磨き、着替え、朝食、メールチェック、洗い物、「ゴミ出し」会社に向かう。テレビゲームのコントローラーの反応が遅い時を思い出しました。

いくつかの内臓はまだ自分の意識下にあるのか、私は胃のあたりがもかむかするのを感じた。腸がじんわりと溜まっているのがわかりました。

会社についてからも同じ調子でした。スマートフォンは私の日常のほとんどを右手として理解しているで勝手に全部進めてくれる。業務も交渉も驚くほどスムーズにすすんでいきます。ただ、言語音声はスマートフォンのスピーカーから出力されるためか、私の顔でなくスマートフォンを向いて喋る人もいました。そんなときは、

…I will lead you to a better life.

とスマートフォンが私にしか聞こえない小さい声で言いました。

私の部署の仕事は、だいたいは大手とクライアントの調整役でした。調整役、というのは、落とし所を探す役回りであることが多く、金錢感覚にはパランス感覚がとても大切です。誰かの目的や意思・意図を実現させるために何処を立てて何処をおさめるか。

AIチャット他人の手柄になりやすい。そしてたいがい、プロジェクトが完了すれば、握手をして笑顔で別れる。そしてまた別のプロジェクトに取り掛かる。軌道にのれば、調整した人間のことなど忘れてしまいます。

私には、それがとても心地よかつた。透明になって、自分が流れる水そのものになったような快感。自分の中に取り入れて整理して外に出す。その運の流れを自分の中で作れさえすれば、なんの苦もない仕事でした。

それは、いまは、スマートフォンがオートメーションで「いつもの私」をやってくれている。そんな私を、私はじつぱりと見ることができる。それは完璧に私でした。

俯瞰して自分の仕事ぶりを見ることの喜びも手伝って、スマートフォンが仕事や日常をやってくれなことを私はすんなりと受け入れました。

私は自分がいつもやっている仕事の鮮やかさに、関心しました。喋りかけるタイミング、言葉のトーン、時には知らないふりをして質問して答えを誘導する手法、会議のリスムのつかみ方など、パスルがはばりどハマるようで美しく、やはり自分のやり方は間違っていないのだと、喜びで胸が杯になりました。

それなのに、プロジェクトが終わると透明人間のようにつとと消えてなくなる自分を見たときに、なんの中身の無い、空っぽの存在であるように感じられたのです。

私は胸が苦しくなりました。そしてもう喜びとても自分を見ることはできなくなりました。これまでの5年間、自分は一体何を見てきたのか、何を聴いて、なにを感じてこの仕事をしてきたのか、すっかり見失ってしまいました。

ああ、なるほど。このままでは、大変なことになる。そう思い、私ははじめて自分からスマートフォンに語りかけました。発話ではなく、意識で話しかけてみました。

…オートメーションをやめたいのですが、どうすればいいですか？

するとスマートフォンが答えました。

…すみません、あなたの言っていることが分かりません。

ははあ、こいつ、私の意識を認識してはいるわけだ。

さてこの先、このスマートフォンとどう付き合っていくか。私は黙って意識の目を閉じた。

各回の振り返り、記録、日々の思考の痕跡を全く残せていない……このフリーライド状態が自分にとってもプロジェクトにとってもよくないことを自覚しておきながら、どうも内なる言葉を発するからに調子をあげられない自分の情けなさと、そろそろ本当になんとかしないと、と自分に喝をいれる——というメモ書きを残します。

(本来なら、誰にも見られない場所にかきたいようなことですが、多分それもひっくるめて書くべきだろうという解釈。)

9/8 tue

10日前くらいのこと。絵が描きたい→でも書けない(子どもの頃から落書きとかできなかった)→わたしは色が好きだ。ポリッシュで何か描きたい→質感や塗り方が好きな感じにできて満足。

次の日選んだ服のカラーリングが、無意識にネイルと同じだった。今自分が求めている明るさや世界観はこれだったのか？

+ + +

踊りたい。楽器を演奏したい。やったことない弦楽器やドラムとかにも挑戦したい。

+ + +

⇒総じて、言葉じゃ説明のつかない表現活動をしたい欲がおきている？

⇒いま向き合っている仕事やプライベートの問題は、複雑で言葉にできない曖昧さが複合的に絡み合っている。それをそのまま受け入れようとしているということ？ しんどくて吐き出したい気持ちから起きている衝動か。

=言葉系つぶやき=

そういえば、このプロジェクトは「プロジェクト」を自称せず、「ラボ」でも「リサーチ」でもなく「スタディ」を名乗っている。

たまに建築系の人「スタディ」という言葉遣いをしていて、「ルー大柴以上のなにかがありそう」程度のスペシャルな気配は感じていたけれど、

これってそもそも専門用語なんだろうか。それとも、今参加しているこのプロジェクトは、なんらかの意図あって「スタディ」なのでしょう。

僕は、勝手にスタディは「研究」と訳していて、それも専門的な研究ではなく、夏休みの自由研究みたいな軽いノリで考えています！ (大塚くん)

東京プロジェクトスタディの「スタディ」にかけている想いは、逡巡する思考や時間があつてこそたどり着ける風景とか表現とか、他者と(自分自身とも)共有できる術とかがあると信じているのですが、でも、なかなかプロジェクトの現場では短期集中型の場と時間しかない、というのが実情です(がつと集中するからこそ突破できる表現もあるのだけど)。  
なんというか、そういったしなやかで強度のある表現(や視点や術みたいな何か)が生まれるには、プロジェクト以前の時間と場が必要だと感じている。安心して迷子になれる場所、手足を動かして考えられる場所、正解を出すのではなくとにかく色々と実験できる場所が必要なんじゃないか、という考えから、この事業はプロジェクトとは呼んでいないんです。常に更新して思考して実験していくみたいないメージを表す言葉として「スタディ」が一番しっくり来たんだと思います。  
わたしは、稽古場みたいなイメージをスタディには持っています。(妙さん)

ナビゲーターをやることになっているいろいろ考えている時、「一周まわってスタディなのだな……！」と思った記憶があります。  
教育学部に在籍していた際、learnとstudyをわけて考えていた気がします。Jobとworkを分けて考えるように。  
いま、美術館などでlearn programは積極的に行われていて、けれど、、、(たえちゃんの発言につづく)  
learnっていうと総合的な学びをイメージするのですが、そのための具象にひとつひとつ向き合い積み重ねるイメージで、それは算数ドリルのようなことでもあるのかな、と。  
けど、プロジェクトであることに変わりはないような気もしています。  
プロジェクトスタディプロジェクト？笑

確かに今思うと、スタディには「勉強」……体の中に知識や経験が染み込んでいく感じがします。稽古場と言われてわかりました。(大塚くん)



研究日誌 スタディ1 第2回 (9/20)

「私たちは本当に出会ったのだろうか?」という問いは、前回のWSの後に考えていたことなので、この言葉から始まったことに少なからず、衝撃を覚えていました。

なにを持って「出会った」とするのか。

仕事の関係で1日に50人くらいの人と名刺交換をすることがあるけれど、その中で本当に「出会った」人というのは、片手に収まる、もしくはすると、1人いればいいんじゃないかな、と思うことがあります。

最初の新しいあいさつ。

異星人の挨拶風に見えたジェスチャーは、「覗き見る」という感覚から生まれたものでした。たぶん。

大塚くんの手のひらを開いたり閉じたり徐々に顔が見えるというのは、緊張や恥じらいや期待感など色々な要素が含まれていて「はじめまして」感があり素敵だと思いました。

とてもシンプル。だけれど、伝わることが多い。次回、生身であった時にもやってみて、ZOOMの時との違いを探りたいと思います。

「電話」を表す、手話の動きの変遷が興味深い。

使う道具の形態のより、使う人の身体の動きが変化するから、手話も変わっていく。

口語が時代によって変わるように、手話もアップグレードされていくということが、考えてみれば当たり前のんだけど、この日の一番の発見でした。

余談ですが、スマホでニュースを読めるようになってから、朝刊を縦に4つ折りにして読む人を電車内であまり見かけなくなったな、ということをおもいました。これも日常的な動作のアップグレードと呼べるのか。

動きをかく。

最近した動き→近い過去から徐々に遡って行動の記憶を辿っていく

いつかしてみたい動き→「自分が出来ないこと」を前提に書き出していることに途中で気づき、「やれば出来るかもしれないこと」に変更。その結果出たのが「マグロの解体ショー」。

まずは、マグロ漁師の知り合いを作ることから始めようと思えます。

休憩中に写真を撮りに外へ出かけた時、部屋に残したiPad はZOOMに繋いだままにしておきました(おそらく他の方も同じだと思いますが)。

部屋の中は、スタディ1の他の人と繋がっているのに、ドアを隔てた途端、急にひとり遠い場所にやってきてしまったような感覚。急激なひとりぼっち感。オンラインの状態からオフラインになったことに脳が追いついていなかったのかもしれない。

おそらく、生身で同じ空間にいた後に、それぞれのワークのため

に外出したとしたら、また違うのだらうと思いました。その場にいた人の話声やしぐさ、空気感、そうしたものと一緒に出かけられる気がする。

撮った写真は、視点が実に多様で面白かった。それぞれのものや場所に対する捉え方が違う。なんとなく、その人の頭の中?に出会えた感じがした。

【本日の夢 2020/9/25】

どういうわけか、毎朝、ダックスフントを3匹、ある場所から別の場所に移動させる仕事をしている、らしい。

そして、この日は何故だか時間がない、らしい。

3匹のうち2匹を両脇にかかえ、残る1匹を走らせる。

両脇の2匹、ダックスフントというより、コーギーという感じの質感。むちっとしている。それなりに重い。

時間が少ないので小走りになる。

地上のダックスも走っているようだ。

けれども、そこはダックス。足が短い。

短い足をちょこちょこ動かすも地面が滑るのか、遅々として進まない。がんばれ、ダックス。

途中、一緒に働いているらしい人が現れ、両脇のダックスを引き取ってくれる。

今考えると、この時点で、空いた両手で地上のダックスを抱えればいいものの、なぜかダックスを走らせ続ける。

抱っこが嫌いなタイプなのか。

そして、同僚もほかの2匹を走らせ始める。なぜだ。少なくとも君はダックスを抱えて、走ったほうが早いのではないか。

ちょっとした大通りの交差点にさしかかる。

信号が変わりそう。間に合うか。

がんばれ、ダックスと再び思う。

が、間に合わない。

先に行く同僚とダックス2匹は、横断歩道の中州のようなところで止まっている。

なんだかやたらと細い中州。

すぐ近くを車がびゅんびゅん通るので、ダックス、同僚、ダックスの順で細い中州に縦列駐車のようになっている。

こういう時、ダックスは細長いから便利だな、と思ったところで目が覚めた。

何かの暗示なのか、潜在意識の表れなのか。

ひさびさに、困惑した朝を過ごしてます。

【本日の出来事 9/27】

「週明けは秋晴れ」、を待たずに洗濯してしまう。

しかも、寝坊したので、午後から洗濯をしよう。

乾くと信じる。

乾け、と念じてもみる。

16時。

夕方から外出の予定があるため、

一度取り込む。

9割がた、生乾き。

9月末の微妙な曇天模様の空の下。

当然の結果ではある。

秋だな、と思い、早くも夏が恋しくなる。

21時過ぎ帰宅。

生乾きは継続している。

このまま一夜を越したくない。

荷をまとめる。

徒歩10分ほどにある、

コインランドリーに行く。

布団も洗える(らしい)大型の洗濯機や乾燥機が充実している。

22時前。

15台の乾燥機はフル稼働中。乾き待ちのひとつも、ちらほら。

皆、一緒にスマホと対峙している。

心の中で

(さては、あなたも秋晴れを待たせませんでしたね)と思う。

乾燥が終わった人が出て行く、

新たに袋を抱えた人がやってくる。

その繰り返し。

私が帰る時にも、乾燥機はフル稼働中。

この近所には、どれだけ 週明けの秋晴れを待たなかった人がいるのだろうか。





研究日誌 スタディ1 第3回目 (10/4)

書こう、書こうと思いつつ、あっという間に1週間経ってしまった。

スタディの3回目が終わった日に、記録用に色々と手書きでメモをしていたけれど、Slackに書くまでに、なぜだか時間がかかってしまった。

3331の302に到着した時、どこからともなくカレーの香り。どうやら、お昼ご飯にカレーを食べた人がいるらしいということがわかった。

今回は早めに着いてお昼をここで食べるのもいいかもしれない、と思う。

1回目、2回目を経て顔も名前も知っている人ばかりだけれど、そこはかたなく「初めて生身で会う」ということへの緊張と、もっと相手のことを知りたい、お話したいという興奮が入り混じっている状態の自分があることに気がついた。

そしてその後の、「雑談してください」と言われた時の漠然とした不安感。

「雑談とは、、、」と思考が停止する感覚を味わう。

加藤さんが撮影した写真を見る、ということで、ちょっと気持ちが落ち着く。

「やることある」ということの安心感を味わう。

写真を介すことで、吹きや会話徐徐に生まれていく。

このあたりから、それぞれのメンバーの顔と名前とZOOMであった時の印象が一致し始めた。パーチャルと生身の世界の間で生じていた誤差のようなものが修正され、焦点があうという感覚。ポートレイトを撮る、というテーマで、スーちゃんと一緒になる。

「どう撮ろうか」という話から始まり、彼女が映像を勉強していること、お互い撮られるよりも撮ることが好きなことなどを話す。

ポートレイトではあるけれども、一緒に撮る・写ることにする。

ファインダーを覗かず、2人が入っているであろう場所に身を置

く。そして、適当にシャッターを切ってみる。あとで写真を見せてもらったら、案の定最初の1枚目は私しか写っていなかったが、それはそれで良い。

あの時の私たちにとって大事だったのは、綺麗な人物写真を撮るというよりも、一緒に何かをする、時間や場を共有することだったと思うので、即興的に次々と試すことができたのは、本当に楽しかった。言葉が適切かはわからないけれど、ある種の共犯関係のような感じだった。

加藤さんという、写真に映らない第3の人がいたことは、観客のようであり、観察者のようで、見ている人がいるから成り立った時間であるかもしれない。もし、加藤さんや他の誰もいない状態でスーちゃんと2人きりだったら、どうだろう。全く動けず仕舞い、もしくは、1時間でも2時間でも撮り続けていたかもしれない。

そして、最後の最後に、

いわゆる「ポートレイト」を撮ったかもしれない。

スタディの後、残ったメンバーでお茶をするため、カフェを求めて外に出る。

日曜日の午後、都会のカフェはどこも混み合っていて、しばらく徘徊する。

その間、「雑談」をする。それぞれが興味を持っていることや、その場で目を引かれたものなど。それぞれの個性というか、空気が滲み出る時間だったように思う。

その後、結局カフェは見つからず、3331の302に戻る。

途中、コンビニなどで、それぞれが好きなものを買った。他人のことは言えないが、全体的にかなり自由度の高い商品選択。パーソナルな部分が垣間見える。面白い。

そして、延長戦までしたのに、まだ時間が足りない。

次回、撮った人、撮られた人がいる中で写真を見ること、それぞれの意識的に行動したことや、無意識で行われていたことなどを知るのが楽しみ。





【本日の夢 (帰宅途中の地下鉄座席にて) 2020/10/20】

園芸の仕事なのか、  
整地された土を目の前にしている。  
さらさらとした土。  
人差し指と親指で作った丸くらいの大きさのプランターに土を入れ、  
指で真ん中に、種を蒔くような穴を開ける。  
でも、種はまかない。  
小さな穴ぼこが空いた、  
小さなプランターを作っては、  
並べる。  
その作業の繰り返し。  
土を盛る、穴を開ける時は、  
「あ、見つけた」と思っている。  
それは、自分がなにかを見つけたのか、  
それとも、その作業をしている姿を誰かに見つけられたのか。  
よくわからない。

研究日誌や宿題の続きを、、、と思いながら、あつという間に時間が過ぎていく。

色々メモをしていたものを一旦にまとめてみよう!と書いてみたら、とても長くなってしまいました。

=====

代々木公園の日、途中で離脱した後、新幹線に乗って名古屋に向かった。あまり気乗りしない、迷いのある用事だったせいか、「こだま」に乗ってしまう。夜の「こだま」。当然、富士山など見えるわけもなく、ただひたすらに流れる闇を見ることに。

それでも、日中の陽射しや代々木公園での出来事などのポカポカやモヤモヤを旅の道連れに出来たことは良かった。

11月の共有回の数日後には、1週間ほど福岡に行った。再び新幹線。「のぞみ」の速さで4時間半。名古屋で人が入れ替わり、大阪で誰もいなくなる、ということを知る。

福岡では来年の公演のための稽古に参加。まだ出来るかどうか、わからないものための稽古。それでも人が集う。身体がそこにある、ということの必要性を皆感じていたのだと思う。

と同時に演劇って何だろうと改めて考える。

そんな福岡の、ありえないくらい筋肉痛とともに身体を意識して帰ってきたのが、5回目のスタディの前日。

帰りは飛行機だったので、急激に東京の時間の流れに放り込まれた、意識と身体がバラバラの状態でのZoom。

パンツを飛ばすという危機を経ることで、ようやく現実に戻って来られた。

ので、1時間ほど書いていたものを消し、書き直しはじめる。

その後の1週間は、仕事に忙殺される。

久々に東京の消費されていく感覚を味わう。

前回の俳優の0→1で、うまく伝えられなかったのが、この「消費される感覚」だということに後で気がついた。

日々の訓練や稽古、公演で着実に技術は向上し、器として出来上がってきているのに、内側が磨り減っていく。

当時所属していた劇団で、新作を複数同時に稽古しつつ、レパートリー作品のツアー公演をやり、空いた時間に客演もするという時期があり、ある時ふと、これ以上何も出さぬものがない自分は芝居ができない、と思ってしまった。

今考えると、完全にオーバーワークだったのだけれど、当時は烏滸がましくも才能の枯渇、などと絶望した。

そこから、くねくねと曲がり道曲がり、一周回って、演劇に戻っている。

なぜ演劇か?

たぶん、身体がそこにあること、他者の言葉を自分の身体を通す、ということに興味があるのだと思う。

手話通訳のおふたりの話を聞いて、そんなことを考えていた。



春ぶりの実家にて。  
イヌストレッチ



記憶はだいたい映像と感覚がセットになってやって来る。

一番最初の記憶は、ひとり部屋の中でテレビを前にして大泣きしている。

何が悲しいのか、どこか痛いのか、口を大きく開けてわんわん泣いている。

部屋は寒くなく、どちらかというと温かい。

次の記憶は、プールに突き落とされた時のもの。

落ちたのではなく、落とされたという背中からの感覚の記憶と、水の中にぶかぶかと浮いている全身の感覚の記憶が同時にやってくる。不思議と落とされたことに対する恐怖心はなく、たぶん、ぶかぶかが勝っている。

そんな風に自分の記憶は、前後の文脈を持たず、ある時ある場所で起きた出来事の一部や状態のみで構成されていることが多い。そして、その記憶がやってきている時は、たいてい目を開いたままで、じっとその場面を観察している、らしい。

「らしい」というのは、目を開いてじっと1点を見つめたまま動かなくなることがあると、友人に指摘されて気が付いたからだ。

「猫が何も無い空間をじっと見ていることがあるでしょ?それと同じ感じ。目線を追って、何かあるのかな?で見るけれど何も無い。だから、人が見えないものを見ているのかなって」

確かに、何かを思い出している時は、その記憶が過ぎ去るまで、じっと動かずにいるように思う。そして、「私の中の記憶」=「他の人には見えないもの」を見ていることに違いはないのだけれど、側から見るといわゆる「目に見えない存在」と交信しているように感じられるのかもしれない。

実際、そうした自分の状態に気がつくまでは、「少し変わった子」や「靈感がある」という噂が頻発していた、らしい。(好奇心が強いのか「靈感あるって本当?」と聞いてくる人がいた)

その、無意識に生じる自分の中で起きていること、と、外から見た自分の体の状態のズレにより色々悩まされていた時期もあったものの、いつ頃からか、そのズレを意識的にコントロールできるようになり、遊べるまでになってからは、随分と楽になったと思うそんな話を、たまたま知り合った外国籍の演出家の方にしたところ、「それは世阿弥の「離見の見」だね。そういうトレーニングをやっているから受けにおいでよ」と誘われた。

世阿弥、離見の見、風姿花伝。

学生の頃学んだ母国の古典を、回り回って地球の裏側から来た異国の方に教わる日が来ようとは。人生どこで何と出会うかわからないものだなと、思う。



メモを取るときに、  
一言一句迷すまい、として細かく正確に取る時と、  
耳で捉えた音だけを書き留める時があって、  
たまに何のメモなのか瞬時に思い出せないことがある。  
去年の手帳を見返していたら、  
「コンビニのホープ」  
というメモが。  
日付を見て、関川さんの話だ!と思い出したものの、全く事情を知らない他者が見たら、謎は解明されないのだろうと思った。  
「コンビニのホープ」。  
コンビニの希望。  
コンビニの期待の星。  
ホープという名のコンビニ。  
コンビニの暖かさを帯びた煙草の箱、ということからは遠い。  
こんな風にプライベートで書いたメモや日記を誤読されつつ、研究が進む過去の人々がそこそこいるのではないかと思った。



今日、甫ちゃんにシェアしてもらった記事が素敵だったのでメモ。

他者との意志や気持ちの「やりとり」に、自分自身と向き合ってくれる他者の眼差しを感じることに、人は心地よさと安堵を感じるのだなとしみじみ感じる。

分かる／分からない、理解できる／理解できないのその前に内包されている「やりとり」についてのメモ

【研究日誌 | 9/9 | レクチャー「手話と出会う〜アートプロジェクトの担い手のための手話講座（基礎編）」気づきメモ】  
コミュニケーションと身体性について、ゆらゆらしながら考えた  
り、ふと想い起こしたり、つぶやいたりする逡巡の記録

7月1日から毎週水曜日の朝、アートプロジェクトの担い手のための手話講座がスタートした。

企画・モデレーターとして現場に立ち会うなかでの気づきの記録をnoteに綴っている。

今朝もレクチャー実施日だった。

ろう者の文化に触れること、ことばからイメージすること、手話からイメージすること、何気なしに言っていることから生じるコミュニケーションのスレなど、毎週、毎週、はっとして、自分自身の視点が更新されていくような体感がある。

この感覚は、アーティストともに作品制作をするときに感じる体感に似ている。異なる視点に確かに触れるあの感覚。

何か掴めそうで、まだ掴めなくて、でも何かあるぞ...! という予感  
はたしかにあって...みたいな感じ。



【研究日誌 | スタディ1 第2回のと、帰宅してから】

「まぶたのうらを見る」と白目のことを言ったすーちゃんのことば。

背中もそうだけれど、決して自分では見えないものを見ようとすると、体はどこかぴーんと筋が張るような感じがするのはなぜなんだろう。そう言えば、自分の顔も決して「自分の眼では」見えない。見えないものをなんとかして見てみたいと思う欲求（本能？）は少なからず人に備わっているものなのかな。

「20分の旅」から帰ってきて、写真を眺めながらその人の視点、どうやって撮ったんだろうとわんもわんと想像した。色々ゆったり、もっと話したかったなあ。

なぜか惹かれるもの、気になるものをとって歩くと、確かに目の前の風景の解像度が上がる。意識がぎゅっとして、でもどこか無意識が少し逃げていくような気もして。

考えよう、見よう、見ようと思わず、ふと飛び込んできたことにパチンと自分のなかで何か反応すること、そのときをそのままにそっと抱きかかると、自分にとってのその方法はなんだろうかと、思いを巡らす。

晩ごはんを食べながらいくつかメールを返信した後、ふうっとベッドに横になった。ベッド脇の窓からは涼しい風が吹く。

だんだんと足首に、脇腹に、背中にと痒みがはしり、つい掻いてしまっただんだんとぶっくりこもり腫れてくる。ぶつぶつ蕁麻疹が出て、ああ、秋が来たんだと、また今年もこうやって自分の皮膚から季節の変わり目を感じる。

（子供の頃から気温の温度差により蕁麻疹が出てしまう体質なのです。うう…痒い）

皮膚といえば、「恋をすると指先がビリビリするみたいだ」みたいな文章を、確か10代の頃に読んだ何かの本に書いてあった気がする。誰かと出会うというのは、身体がビリビリすることなのかもしれない。それはその人の気配がそうさせるのか。オンラインになって気配とか匂いとかそういうものが遠くに持っていかれてしまったような感じで、そして自分自身のその感度が鈍くなってしまったりやいまいか、と少し不安になる。

人は人の匂いが恋しくなる生き物なのだと信じている。少なくとも私はそうだから。

【研究日誌 | スタディ1 第3回のと、6日目の夜に】

昨晩からずっと降り続く雨のせいもあってか、一日中部屋のなか  
はしっとりとした冷たい空気に包まれていて、夜になりいよいよ耐えられなくなって毛布をひっぱり出した。いまは、その毛布に包まれながらこの文章を書いている。

1週間のなんと早いこと。

6日前の朝9時、3331の関係者出入口で甫ちゃんと待ち合わせ、ROOM302に仮設のスタジオをつくっていった。仮設的とはいえ、空間をどう使おうかと、やっぱり301に撮影スタジオが合った方がいいよねとか、同じ場の空気を吸って併走するように思考するのはやっぱり楽しい。私は相手の中でぶわあっと膨らんでいくイメージを自分の中に取り込んでよりベターな環境をどう共に立ち上げていくか、それを考えながら身体を動かすことが好きだなと改めて確認する。

しばらくすると、佐藤さんがやって来た。甫ちゃんが並べていく写真と一緒に眺めたり、関わっているアートプロジェクトの準備などのおしゃべりをしながら、準備を手伝ったり、また写真をゆくり見たりのんびり過ごした。

時間が経つことの早いこと。あつという間にお昼が過ぎ、コアタイムに。

全員が同じ時間、同じ場所に集まって顔を合わせたのはじめての日。

最初はどんなふうに進んでいくのか、内心ドキドキしていたのだけど（終わった後、お茶をしながら甫ちゃんには話した）、2人1組になって撮影の相談をし合って、仮設撮影スタジオに移動して撮影をして、ストロボがはじける音が何度も聞こえてきて、そして、しばらくたって2人がROOM302に帰ってきたとき、あ、関係性が少し変わったと感じた。301から帰ってくる人が増えていくと、だんだんと302の空気が柔らかくなっていった。不思議とみんなが301のドアの近くに居たのは、あの柔らかな変化の空気にあたっていたいと本能的に感じ取っていたからなのかな、と振り返って思ったりもする。

同じような経験をした、その経験を通った身体というのは、言葉を超えてお互いの親密度をあげるのだと思う。互いの立ち位置を確認し、視線や視点が合うからなのか。

撮影ワークの後、きーっと流れるようにみんなの写真を眺めると、みなさんどんな話をされていたんだろうとものすごく気になって仕方がなかった。

撮る／撮られる、見る／見られるに意識を向けながら、自分と他者の無意識に触れる。その一端に触れて、続きは、また次回



【研究日誌 | どのようなその前のようなもの | 第4回から2週間後の合同共有会から2日後】

このところ、そう2ヶ月ほど前からこのところにかけて、もやもやと、ふやふやと、時折やって来る間いと実感がいくつかある。そのいくつかの間をゆらゆらと揺らぎながら考えている。

自分のことは自分自身が一番わからない、ということ。改めてそれを実感したのは、2ヶ月前にいろいろと検査を受けたときだった。説明を受け、はあ、はあ、なるほど、と合わせて返事をしているものの、なんのこっちゃなあ...という眼差しでしかエコー画像を見ることができない。先生の言うことばを「ひとまず」信じておくしかないあの心許ない感じ。エコー画像を読み取れるひとの目には、人の身体はどう写っているのだろう。なんてふと想像してみたり。

それから1ヶ月半くらいが過ぎた頃、私の体内にあるものは良性的との診断結果が出た。その翌日、メゾンエルメスでシャルロット・デュマの個展「ベゾール（結石）」の会場で、それはまあ、まん丸と大きな美しい馬の結石に出合ってしまった。それを眺めながら、私の体内にもある小さな腫瘍のことを考えずにはいられなかった。なんだか宇宙に漂っているような気持ちになって、そのときの感覚と感情を忘れたくなくてInstagramに書き残している。

“日々、私の体内では、良性的も悪性的とも関わらずさまざまな変化が起こっていて、昨日とは決して同じ身体ではないのだ、ということを感じつけられたような気持ちになった。生き物は不確かだな、と改めて思う。と同時に、だからこそ何か「確かだと信じられる」ことに触れたいのだと思う。”

「《確かだと信じられる》ことに触れたい」ということが、なんとなく、身体性や対話、コミュニケーションのことにつながっていくような気がしている。まだ、なんとなくなのだけだ。あの日の体感を大事にしたくて、あれから何度も思い出している。

あと、歌人の俵万智さんが、真実を伝えるために嘘をつく（脚色する）というようなことを話していたことも思い出したりした。真実を伝えるために、フィクショナルを織り込む、その技術を使うということ。はっきりとした答えなんてないかもしれないけど、大事なことだと思うから、ここ数年時々思い出しているんだろうな。ぶつぶつ。。つぶつぶ。。

【11/28 第5回 研究日誌】

書こうとして自分のチャンネルを開いたら、いつか書いたまま投稿しなかった「メモ」があって、あっ、そう言えば書いたなぁと読み直した。

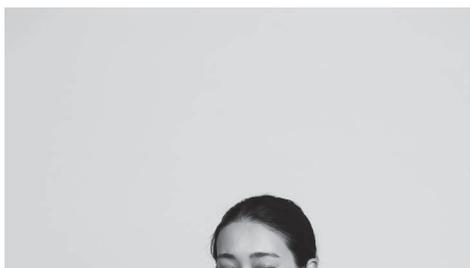
せっかく書いたのにそのまま消しちゃうのもなぁとしばし考えて、「メモ」として残しておくことにする。

【メモ】

昨日、ファンタジア!ファンタジア!ー生き方がかたちになったまちーのプラクティス「みじかい間、少しとおくまでの対話」① WANDERING: ショートショートを体験したときのこと。

そのなかで、「最近はじめたことはなんですか?」という問いかけがあって、「手のひらに太陽をあつめること」と書いた。

代々木公園のあの日以来、気が向いたときに手のひらをお日様にかざしている。新しいおまじないを覚えられたみたいで、けっこう気に入っている。



ここからが今日の研究日誌。

今日、zoomにみなさんの画面が表示されたとき、あれ、なんだか遠いなぁという感覚。あれはお昼ご飯を食べた後のまったりとした午後イチという時間のせいだったのか。それだけじゃない気がする。もんやりした気持ち。

でも、ワークに入る前に、これってどうということ?と疑問が交わされたのは、なんかうまく言えないけど良かった。

フィクションを織り交ぜて分岐点の自分に会いに行く。分岐点ってそもそもなんなのだろうと考えながら、これまでに何度も思い出している出来事の風景を手繰り寄せてみた。

もしかしたらこういうのが、走馬灯のワンシーンなんかかなぁ、なんて浅はかな妄想をして、いやいや、もっと自分でも気づかないうちに刻まれていた出来事が浮かぶんだろう、と自分に自分で違うて、と言う。

・

(家の最寄り駅に着いた。このままの勢いで書き上げておきたいから、人通りの少ない道を歩きながら書く)

・

ひとまず、気のむむまま書き進めていくと、しばらくして、分岐点で出会ってきた人々と物語のなかで対話してるような感覚になった。もう会えないけど、でも会えるみたいなこの感覚は、寂しくてたまらないが私は好きだ。決して手放したくない感覚。(うーん。会えるっていうより、その人の声、におい、間合い、あの小さな背中のイメージを覚えてる、ちゃんと覚えてるぞって確かめているのかもしれない)

・

(帰宅、ベッドの端に座って書く。お腹へこべこだ…)

・

今日のワークは後々になって、ああ、そういうことなのかって気づく日がくるのかな。来そうな、来なさそうな、少し宙ぶらりんな気持ちのまま、今日は、ひとまず今日は、書き留めておこうと思う。

今日、Slackの下書きを書いては消して、書いては消して、と言っていたすーちゃんの話聞いて、逡巡する行為と時間が、あぁいいなあとじんわりに思った。私は迷子になることが好きなのだ。だって、すぐに決めるなんてできない。何かを保留したまま漂っていたい、という欲求がどこかにある。

私もこのところ、何度も書いては寝かせ、寝かせていたこともすっかり忘れて、気づいてはまた消してを繰り返している。

今日だって久しぶりにiPhoneから自分のこのチャンネルを開いたとき、関川さんの回の後に書いた(らしい)下書きがあった。さっと読み直してから、やっぱり消してしまう。

きっと誰にも見えない思考の痕が、このSlackのあちこちにもあるんだろうと想像して、なんだか洞窟のなかを歩いているような気持ちになるなぁ、なんてふんわり思いながら、いま、地下鉄の暗がりのなかを揺られて帰る。あ、駅に着いた。

歌を詠んだのは3年ぶりか、それくらいで、今日は痩せ細った自分の感覚に、少し落ち込んだりした。私は表現に関わり続けて、これからもきっと生きていこうけれど、自分の表現というものを開くことが上手くない。時間がどうにもかかる。やっかいで時々嫌んなっちゃうけど、今日のこの感覚を私はしばらく反芻してしまうだろう。しつこくてしごとくて、ときどき悔しくて考えていくんだろう。

そしていつか、私はストンと腹に落ちて、やっと語り出せるときが来るはず。そう信じていたい。でもまぁ、語れないときはそのまま良いんだ。

今日から数えて1000日後くらいに、私はどこかで、一人、歌を詠んでいる。その日は、きっと曇ひとつない晴天で、眩い冬の朝の空気の中で、鼻頭にキンと冷えた空気が通るときに。(自分への約束1)

昨日、ちょうどキッチンの机の上に置いていた校正原稿の隅っこをちぎって、ズボンの右ポケットに入れた。ポケットの中で指をもぞもぞと動かしながら、まずは紙を柔らかくしてみようと思ってくしゅくしゅとそれを触り続けた。

しばらくして、ポケットから右手を出して仕事に戻った。その後も、ときどき右ポケットに手をつこんで、「うん、あるな」と確認しながらぎゅっぎゅっと丸めていった。

・

不思議なもので、途中で取り出して見てみようという気にはならなかった。というよりもむしろ、ポケットのなかにそれがあるうちは、見ちゃいけない、見ないようにしよう、と決めていた。この球を触りながら2つ思い出したことがある。

・

ひとつは、ずいぶん昔に亡くなった宝塚のアパートに住んでいた親戚の叔母のこと。彼女には子供がいなかったからか、私のことを自分の子供のように可愛がってくれた。彼女は、祖父のお兄さんの奥さんだった。彼女に会うとき、私はいつも彼女の前に立った。「おばちゃん、会いにきたよ」と伝えると、叔母はそっと両手で私の頭からおでこ、頬、顎、肩と優しく触れ、そして、いつも決まって「大きくなったねぇ」と言った。彼女は、目が見えなかった。少しひんやりとした薄い彼女の手のひらが私の頭にふわっと触れたときの重みを思い出した。

・

もうひとつは、あるアーティストが話してくれた石のこと。彼は昔、海や川に行ったときに気に入った石があるとよく持ち帰っていて、拾い上げてポケットに入れてから、しばらくずーっとその石を持ち歩いていたらしい。そして、しばらく、ずーっとその石を見ないようにしていたのだそう。それは、何か新しい作品をつくらうと思ってやっていたことではなくて、何となく、見ないでおこうと思う。それをずっとならしてやっていたんだ、みたいなことを言っていたと思う。

そして、そういう石を持ち続ける遊び?のようなことをはじめてから数年後に、1つの作品が生まれた。確か、その作品ができようとしている時、彼は、この作品をつくるための「稽古のようなこと」を僕はやっていたのかも知れない、と言った。何気ないかつての経験が、いま、この瞬間に接続する。立ち会ってしまった、見てしまった、と心を撃ち抜かれ震えたあの日。

彼のポケットの石の感触を私は知らないけれど、その石と昨日から私のズボンの右ポケットに入っていたこの紙切れの球が少し重なって見えた。どちらも久しぶりに思い出した。ああ、嬉しいなぁ。



# 出合いが重なり 続けた先に

# 「実感」の先で、 共に在る。

——— 人と人との「間」の部分に触れようと手を伸ばすふるまいは、  
他者と出会うときのヒントになるんじゃないか、そんなことをぐるぐると考えています。  
(Tokyo Art Research Lab「2020年度東京プロジェクトスタディ」スタディマネージャーからのメッセージより抜粋)

音声言語で他者の話を聴く。その行為がお互いにとって最適かどうかを考えずにこれまで取材を行ってきた。取材した内容を記録するとき、わからないことは避けて、わかりやすく、誤解が生まれづらい言葉を選択してきた。

「共在する身体と思考を巡って」を経て、執筆・編集の仕事に関わるときに、疑ってこなかったこと(あるいは目の前のことにいっぱいいっぱい通り過ぎてきたこと)へ立ち止まるようになった。企画立案の時点で、インタビューイーとの出合い方を含めて検討し、聴きたいテーマや掲載する媒体の特性、想定読者、取材チームの構成を模索してみる。

あるときは「インタビューイーと一緒にコミュニケーションゲーム」をしてから、取材をはじめてみたり、あるときはグラフィックレコーダー同席のもと、リアルタイムの記録と運動しながら話を伺ったり、またあるときは「上演台本」という形式を活用した記録のあり方を検討したり。

自身の身体や思考の癖でなんとなく駆動していたコミュニケーションのあり方。それを一度手動に切り替える。すると、これまで触れることができなかった他者の側面が見えてくる。その側面も一部ではあるけれど、その先には果てしないその人ならではの世界が広がっている。手動にしたことで発生した労力の先には、たしかに豊かな世界が待っている。それらが、自分の中にも「まだ出合っていない世界＝他者」がいることを教えてくれる。環境によって自分に中にある他者が弱くも強くもなることを気づかせてくれる。持っている特権や無自覚だった差別・偏見を露わにしてくれる。

「いやいや、それはあなたにとっての事実だとして、どうやって手動に切り替えればいいのかよ」

わからないけれど、お互いの顔が見えないまま出合ってみたり、新しい挨拶を考えてみたり、気になったものを撮影して見せ合いっこしてみたり、お互いに撮影しあったり、公園で敷物を敷いてもやもやを共有してみたり、フィクションを織り交ぜながら自分の分岐点について書いてみたり、通訳・翻訳とはなにかの語りに触れて体験してみたり、既存の自己紹介の仕方を一度避けてみたり、詩的言語を起点に生活を味わったり、ダンスパフォーマンスから問いを深めてみたり、とりあえず受け取ったものをなんらかの形にしてみたり、全力疾走で展示会に出す作品を作ってみたり、これまでの経験を振り返って記録してみたり、あの日もらった作品のかけらを手で持ってにやにやしたり。私にとってはそんな経験がコミュニケーションを自らに取り戻すきっかけだった。

取り戻すとは言ったものの、自分だけでどうにかできるものでもないの、いつまで経ってもわからないし、どんどんこぼれ落ちていくし。でもまあしょうがない。その中で、自分が選択してみたり、しなかったり、保留にしてみたりしながら、全部手動だとしんどいわ、でも嫌いじゃないわ、なんて思いながら、暮らしていきます。スタディ1に関わりのあったみなさんは、この冊子に出会ってくれた人は、これからどんな出合いがあるのでしょうか。その出合いが重なり続けた先には、わたしがいて、あなたがいて、そして共に在るのかもしれない。

木村和博  
スタディ1記録・運営／劇作家・編集者・ライター

2020年春、これから出会うであろうスタディ1の参加メンバーに向けて、私は自分の考えをこう記していた。「人と人の『間』の部分に触れようと手を伸ばすふるまい」は、まさにこのスタディ1の実践の風景そのものだった。

じっくりと時間をかけて、モニターに映し出されることばや絵から、スピーカーから流れ出てくる声色から、目の前に居るその人の姿勢、身振り手振りや部屋の中での立ち位置、ひんやりとした秋の日暮れの空気の匂いの中から、ときにはそっと、ときにはぐいっとその「間」の「何か／何者か」に手を伸ばす。それも、ほんとうに真摯に。そうして伸ばしたその手には、いったい何が残ったのだろうか。

本書には、スタディ1での実践の記録とメンバー一人ひとりの思考の痕跡が綴られている。特に本書の後半には、「研究日誌」と題して、各自が思い思いに書いてきた言葉や写真が掲載されていて、そこには12人の戸惑いや気づき、時間を経て醸成されていく思考の足跡、何か掴みかけてこぼれてしまった肌感覚やスタディ1に流れていた時間の余韻が、行間や余白にじわっと宿っている。

世界が、日々の暮らしが、一変した昨年の春。それから幾度の緊急事態宣言の発令・解除を経て、今ではもうすっかりマスク姿も、アルコール消毒も、街のあちこちで見かける透明のパーティーションも、見えないウイルスも、私たちの「日常」の一部になった。でも、確かに昨年、私たちはみな一様に、経験したことのない「日常」の連続の中を過ごし、静かにうらたえていた。他者との触れ合いや向き合う距離にどうしようもなく敏感になり、仕方がないと自分に言い聞かせながらも、オンラインでのコミュニケーションに、どこかごもごとした違和感と物足りなさを募らせていたと思う。どんどん他者が、社会が、自分から遠のいていくような、自分自身の何かが欠けていくようなあの感覚を、きっとまだ忘れてはいないだろう。

これまでの「当たり前」が大いに揺らぐ中で、このスタディ1に取り組んでくれたのは、メンバーがそれぞれに、何か自分自身にはない思考や想像の術を、コミュニケーションの在り方を「実感」しないとマズイと感じていたからではなかったか。「私たちは本当に出会ったのだろうか?」と、素直に問い、何度も何度も繰り返しその問いに立ち返っていったのは、私たちが何をいま「実感」しているのかを自分自身でちゃんと掴み取ったからだと思う。

あの人と出会った(と考える)、この人があそこに居る(のを目尻の際で感じる)、いま、共に在る(パソコンの向こう側で、いま、洗濯物が飛んでいったらしいと聞いて)。

「実感」とは、直接見るとか、触れたとか、そういうことじゃないんだと、スタディ1を通して私はストンと腑に落ちた。それは、「肯定する」こと、「在るな、と信じられる」ことでもあるんだと。そっと伸ばし続けた私の手の中には、いま、12人分の実感の跡が確かに残っている。

嘉原妙  
スタディマネージャー／アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー

## 東京プロジェクトスタディ1 共在する身体と思考を巡って ー東京で他者と出会うためにー

著者 大塚拓海、伊藤聖実、加藤甫、木村和博、佐藤卓也、鍾淑婷、十代田詠子  
南雲麻衣、原口さとみ、山田裕子、嘉原妙、和田夏実

編集 加藤甫、南雲麻衣、和田夏実、木村和博、嘉原妙

デザイン 岩田直樹 (ダイナモデザイン)

記録写真 加藤甫 (第4、6、7、11回)、川島彩水 (第3回)

印刷・製本 株式会社ショウエイ

発行日 令和3年7月30日

発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京  
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス8階  
Tel 03-6256-8435 Fax 03-6256-8829  
<https://www.artscouncil-tokyo.jp>  
ISBN978-4-909894-24-3 C0070

※本冊子はTokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」の一環として制作されました。



※スタディ1の活動レポート記事全文は、  
「東京プロジェクトスタディアーカイブサイト2020」で公開されています。  
<https://www.tokyoprojectstudy.jp/>

*Tokyo Art Research Lab(TARL)*とは  
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京の人材  
育成事業として、アートプロジェクトを実践するすべての人々に開かれ、  
ともにつくりあげるリサーチプログラムです。現場の課題に対応した  
スキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会における  
アートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。  
<https://tarl.jp>



